グローバル地域ケア IPE+創生人材の育成

Global & Regional Interprofessional Education Plus (GRIP)

年次報告書　2023

令和 6（2024）年 4 月

CHIBA UNIVERSITY | grip Global & Regional Interprofessional Education Plus Program

目　次

ごあいさつ.....2
1. 事業概要.....3
1-1. 「大学の世界展開力強化事業」について.....3
1-2. GRIP について（申請内容から５年分の予定）.....4
1-3. GRIP 推進のための組織と体制.....25
2. 2023 年度の取り組み.....30
2-1. 大学院博士前期課程副専攻 GRIP の開講.....30
2-2. 教材開発.....32
2-3. カウンターパートとの連携.....35
2-4. ISL プログラム開発.....36
2-5. ISL プログラム　派遣.....37
2-6. ISL プログラム　受入.....41
3. 事業評価.....45
3-1. 事業評価の観点と方法.....45
3-2. プロセス評価.....46
3-3. 学習成果の評価.....48
3-4. プログラム評価および外部評価.....53
Fact Sheet.....58
資料１　GRIP 実績.....58
資料２　受け入れプログラム実績.....59
資料３　派遣プログラム実績.....59
資料４　教員交流実績.....60
資料５　研究計画書.....62
資料６　学習の進め方.....81

ごあいさつ

SDGs の開発目標 3 「すべての人に健康と福祉を」を実現し、WHO が提唱する Universal Health Coverage「全ての人が適切な予防、治療、リハビリ等の保健医療サービスを、支払い可能な費用で受けられる状態」の推進のために、地域ケアを創生する人材を育成することを目的とした、グローバル地域ケア IPE プラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP） のプロジェクトは、今年度 2 年目となりました。

2022 年度は、多くの方々のご協力により、GRIP 初年度事業はほぼ目標を達成したと考えております。

2023 年度は、前期に、プログラムの改善のために定期的な内部外部評価を受けました。そして、この評価結果をもとにプログラムのブラッシュアップを行いました。また大学院博士前期課程国際実践学に GRIP プログラムを開講しました。これにより、サービスラーニングとしての構造が整いました。

結果として、予定通りインドのシンビオシス国際大学から 10 名、イギリスのレスター大学から 5 名、合計 15 名の多様な学部、大学院の学生を受け入れ、日本のソーシャルキャピタル、ホームレス支援、災害準備教育についての社会課題解決学習を行いました。またシンビオシス国際大学に 10 名、イギリスのレスター大学に 5 名の派遣を行い、事故なく安全に、学習到達目標を達成し、派遣プログラムも修了しております。そして GRIP スタッフ一同大きな手ごたえを感じております。国と文化制度が違っても、健康関連の社会課題の本質は共通しており、学生はフィールドワークと前後の学習を通して大きな学びを得ています。

また 2022 年度の GRIP プログラムの学習成果をカタールのドーハで行われた、ATBHXI で発表しました。また 2024 年度にスタートさせるオーストラリアモナシュ大学との調整を行っています。

2024 年度は、フェイズ 1 の完成年度となり、いよいよインド、イギリス、オーストラリア、日本の 4 各国における GRIP が展開されます。フェイズ 2 に向け、さらに継続可能性を高めるように、効率的な事業運営を工夫すること、学習効果の評価を確実に行っていくこと、これらを統合して、教材ケーススタデイの開発と蓄積を行っていくことが 2023 年度に引き続き課題となります。

本事業の実施に際しまして、さまざまなフィールドでご協力いただいた皆様、派遣・受け入れに多大なご協力を頂いた教職員の皆様に深く感謝申し上げます。

これからも GRIP の発展のためにご指導ご協力をよろしくお願いいたします。

千葉大学看護学研究科　教授
GRIP プログラム責任者
酒井　郁子

1. 事業概要

1-1. 「大学の世界展開力強化事業」について

1-1-1.「大学の世界展開力強化事業」全体の概要

「大学の世界展開力強化事業」INTER-UNIVERSITY EXCHANGE PROJECT とは、日本の文部科学省が 2011（平成 23）年度から実施している事業である。その趣旨は「世界的に学生の交流規模が拡大する中において、我が国にとって重要な国・地域の大学と質保証を伴った連携・学生交流を戦略的に進め、国際的通用性を備えた質の高い教育を実現するとともに、我が国の大学教育のグローバル展開力を強化する」ものである。

この趣旨の下、日本全国の大学からの事業の公募・審査・評価を担当する日本学術振興会では同事業については、「国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力の強化を目指し、高等教育の質の保証を図りながら、日本人学生の海外留学と外国人学生の戦略的受入を行う事業対象国・地域の大学との国際教育連携の取組を支援することを目的」とされている。（日本学術振興会，大学の世界展開力強化事業. https://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/index.html）。

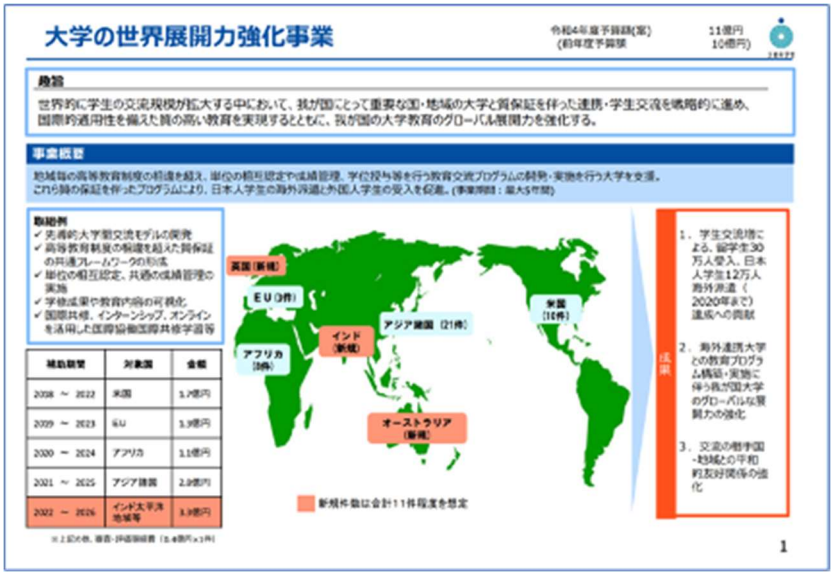


図 1　　概要　大学の世界展開力強化事業　令和 4 年度

事業概要は、「地域毎の高等教育制度の相違を超え、単位の相互認定や成績管理、学位授与等を行う教育交流プログラムの開発・実施を行う大学を支援。これら質の保証を伴ったプログラムにより、日本人学生の海外派遣と外国人学生の受入を促進。（事業期間：最大 5 年間）」である（文部科学省：大学の世界展開力強化事業、令和 5 年度）。

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/

1-1-2. 大学の世界展開力強化事業～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～

図 1 に示した通り、日本政府が日本国にとって重要と見なす国・地域を戦略的に選定し、学生の交流を促進するものである。2022 年度からの 5 年間については、インド太平洋地域等（英・印・豪）を対象地域として、想定の新規採択件数 11 件、予算 3．3 億円として公募がされた（R4 大学の世界展開力概要 https://www.mext.go.jp/content/20220131-mxt_koutou03-000020212_1.pdf）。公募時の概要は図 2 に示す通りである。

図 2　大学の世界展開力強化事業～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～

申請数は総計 30 件であり、うち 14 件（新規は 11 件）が選定された。そのうち、交流先を、英国・インド・オーストラリアの 3 国とする申請数は 6 件であり、本事業「グローバル地域ケア IPE プラス創成人材の育成（GRIP Program）を含む 4 件が選定された。この選定・採択を受けて、GRIP は 2022 年 10 月より、事業開始に至った。2022 年度はインドとトライアルプログラムを実施し、2023 年度はインドにイギリスを加えた 2 か国との協働が開始された。2024 年度にオーストラリアを派遣・受入国として加え、計画上予定されていた 3 か国との交流が本格的に始まる予定である。

1-2. GRIP について（申請内容から 5 年分の予定）

1-2-1. 交流プログラムの目的・概要等

交流プログラムの目的及び概要等

グローバル地域ケア IPE プラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP）の目的は、SDGs の開発目標 3「すべての人に健康と福祉を」を実現し、

WHO が提唱する Universal Health Coverage「全ての人が適切な予防、治療、リハビリ等の保健医療サービスを、支払い可能な費用で受けられる状態」の推進のために、地域ケアを創生する人材を育成することである。その人材とは、世界中どこにおいても文化的謙虚さに基づいた異文化対応能力を基盤として、多様な専門職とともにケアに関わる社会課題に取り組み、現場での最適解を導き出すべきものであり、生命科学に限らず、広く多様な専門の人材、エンジニアから行政官まで文理を問わず対象となる。このようなプログラムは世界のどこにもなく、世界初のプログラムとして実施するものである。千葉大学では 2007 年から日本では初めて医療系学部を横断した「専門職連携教育プログラム－亥鼻 IPE」を 15 年間、必修科目として推進している。この専門職連携教育を、全学に発展させ、日本以外の国や地域の課題に対応できる専門職業人材を育成する。本事業では、「地域特有の健康課題」に対して、専門領域の異なる学生がインター・プロフェッショナルかつインター・ナショナルに協働して取り組み解決方策を提案する地域対応型の人材を、専門を跨いだサービス・ラーニングにより育成するものである。

本事業の特徴は、以下の３つである。

(1) 医療系学部にとどまらず地域ケア創生に関わる全学部および全大学院が参加し、国際的な「地域ケア創生ネットワーク」を構築する
(2) IPE を基盤としたソーシャルラーニングにおける専門領域の異なる学生による相互の知識提供で、地域ケアのサービスを構築し実施
(3) 千葉大学が COIL（Collaborative Online International Learning ）-JUSU（Japan U.S. Unique）とグローバル IPE（現地交流型）を組み合わせ、継続的アクティブラーニングで、学習の相乗効果を得る

本事業で開発する能力は、専門職連携実践能力―Interprofessional Competency と、社会課題解決能力―Social Issue Solution であり、この二つは文化的対応能力及び文化的謙虚さ－Cultural Competency and Cultural Humility に立脚した具体的な実践能力である。この能力を学部、修士、博士と段階的に獲得できるようにプログラムを構築し、新たな専門職教育モデルとしての普及を以下の２段階で実施する。第一に、オンデマンド教材の開発と JV-Campus での開講、教材評価、教育ロジスティクス評価を実施する。千葉大学とシンバイオシス大学（インド）において現地フィールドスタディを実施し、バーチャルワークショップの開催、社会課題に関する学生のケーススタディをオンデマンド教材に追加する。これらにより、インタープロフェッショナル・サービスラーニング（ISL）の初期モデルを構築し、さらに上位の修士・博士のプログラムを開発する。第二段階では、モデルの横展開普及として、国内の大学や連携校以外の大学（札幌医科大学、台北医学大学など）に展開し実施する。社会課題への対応について、事後評価を実施、さらにアウトカム評価を蓄積することで、専門職連携教育の効果評価に貢献する。

養成する人材像

社会課題の解決はまさに多様な職種間の連携協働および国際的な比較と考察、資源を

創造する柔軟な発想が必要とされる。本事業で養成する人材像は、Universal Health Coverage 推進のために地域ケアを創生できる専門職である。

具体的には、こどもたちの健康状態の改善のためのアクションを取ることができる、その国に必要な医療機器、介護機器を開発できる、健康的な環境を考慮した地域開発ができる、健康資源へのアクセシビリティを改善する、健康習慣の獲得のための教育ができる、高齢者のポリファーマシーの改善に取り組むことができるなど、どの国、どの地域であっても、自国でも他の国でも健康関連の課題に他の専門職とともに取り組み、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤として、現場での最適解を導き出すことができる自律した組織人を養成する。そのため、本事業は千葉大学全体を対象として多様な専門の人材をこのような、グローバル地域ケア IPE プラス（GRIP）型人材として育成する。

本事業で計画している交流学生数

表 1　事業期間 5 年間の交流学生数　（人）

2022 年度		2023 年度		2024 年度		2025 年度		2026 年度	
派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
10	10	15	15	20	20	30	30	40	40

事業の概念図

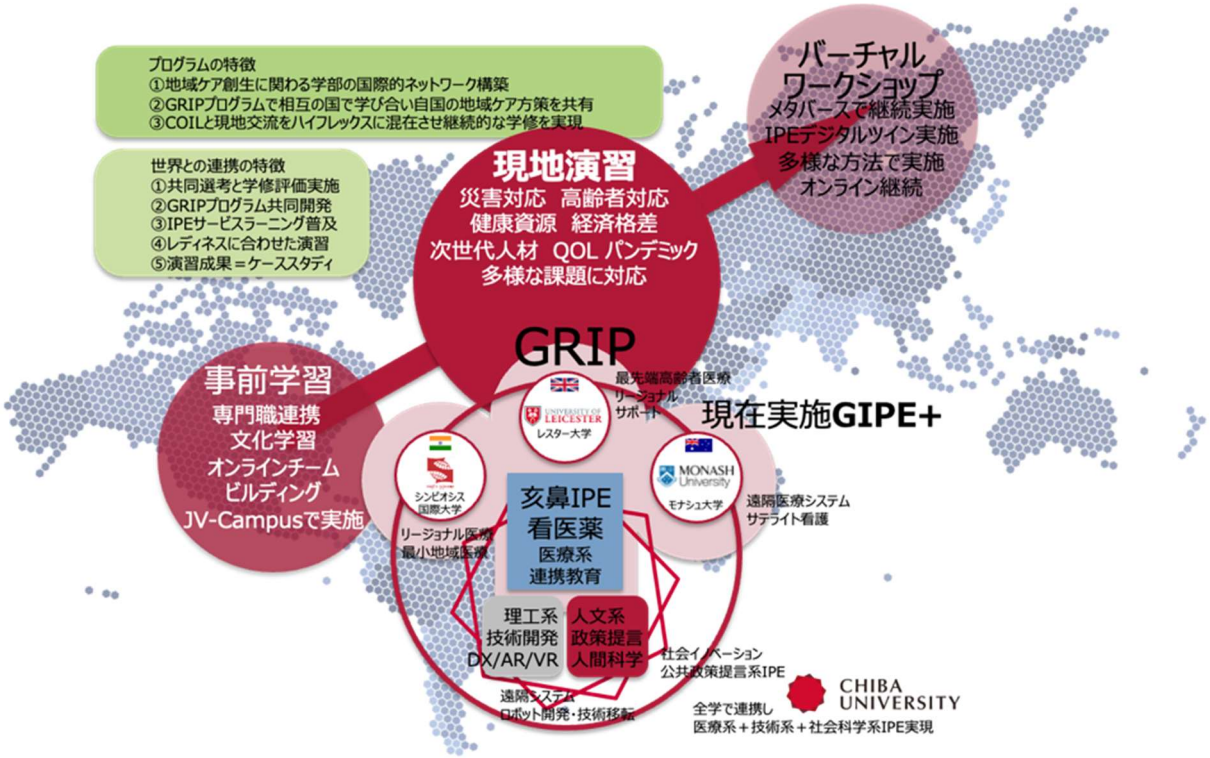


図 3　本事業全体の概念図

1-2-2. 交流プログラムの内容　【計画内容】

世界初のプログラムを６つの観点で実現

本事業 GRIP（Global & Regional Interprofessional Education Plus）は、学部学生、修士学生（医学部薬学部は 5 年生および 6 年生）、博士学生を対象として、大学全体に看護学の理念を展開し、SDGs の開発目標３「すべての人に健康と福祉を」を実施できる人材をあらゆる専門領域で育成するものである。そのために、本事業では、以下の６つの具体的内容を実施していく。

(1) IPE とソーシャルラーニングをグローバル＆ローカルに推進する世界初のプログラム

IPE は、専門家や知識の利用者と向き合うことで、現在の実践やパラダイムに疑問を投げかけることができる学習である。この IPE に、同じ国の異なる専門職の間だけでなく、異なる伝統、教育システム、言語を持つ国同士のコミュニケーションを促進し、インターカルチュラルなプログラムを構築する。このような新しい IPE の取り組みは、世界の看護ケア・アプローチの多様性に対処することができ、実践やコンピテンシーが均等性ではない、というユニークさがある。このような国際的 IPE コースは世界に存在していない。本事業は、世界をリードするプログラムとして構築する。

(2) 副専攻「グローバル地域ケア IPE プラス（GRIP)」の設置

本事業では、大学院グローバルプログラムである大学院国際実践教育に、新たに副専攻プログラム GRIP を全学履修可能として設置する。本副専攻は、修士課程および博士課程を対象とし、亥鼻 IPE 科目履修済みの学部学生（看護学部生 4 年生、医学部、薬学部５年生、工学部・医工学 4 年生、および連携大学）も受講可能とし、プログラムの３ポリシーを明確にし、受講させることで、人材を育成する。連携大学が承認すれば、海外の連携大学の学生も、千葉大学の副専攻の学位を取得できる。将来的には、海外連携大学での設置も促進してもらい、世界共通のマイナープログラムの設置を目指す。

(3) 健康関連社会課題の世界共通化と地域特性対応の双方型解決の実践

GRIP の専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL　2 単位）は、事前学習、現地演習、バーチャル・ワークショップで構成する。

(i)事前学習は基本的にオンラインでチームビルディングとケース・シナリオを用いたシミュレーションにより社会課題を解決する。

(ii)現地演習では、多様な文化的・学際的背景をもつ学生が協働して、現地の問題解決に専門職連携を基盤にして取り組む。

(iii)バーチャル・ワークショップでは、社会課題解決に向け取り組んだチームにより、学習成果の具現化とその地域への実装、自他国への移転可能性の検証などをまとめる。最終課題は社会課題解決の成果は、ケース・スタディ・シナリオとして蓄積し、次年度以降の教材として利用する。

(4) 医療系学生が履修可能なインテンシブ・イシュー・プログラムで実施

本プログラムは、全学で実施するものであるが、看護系（医療系）が履修していなければ、グループワークの効果が薄れることは間違いない。看護系（医療系）のカリキュラムは、過密で長期間の留学などが難しいことから、これらの専攻の学生が GRIP の履修をしやすい、インテンシブ・イシュー・プログラムで実施する。これは、すでに国際教養学部が知識集約型教育で実施しているモデルを活用し実現する。

(5) カリキュラム・マップによる学習到達目標の明確化と質保証

プログラムの３ポリシーを明確にするとともに、設置する授業科目のカリキュラム・マップを学部・大学院ともに設置、その中で留学における学習到達目標も明確にし、学生の興味と準備状態に応じて、段階的に学習到達目標をクリアできるようにする。海外の大学にも同様にこのプログラムとポリシーを提供し、共同で実施する。

(6) ハイフレックスによる授業運営

GRIP 科目のうち、専門職間社会課題解決演習（ISL）以外の６科目は、オンラインでの学修を可能とし、世界のどこからでも受講可能な環境を作る。千葉大学では、スマート・ラーニングでハイフレックス型の授業を展開している。医・看護・薬・工の４学部、300 名以上の専門職連携教育をオンライン同時双方向で、かつグループワーク（６人程度）で学習目標の達成までファシリテーションできる環境が整っているため、それを活用する。

２フェーズでカリキュラムのレビューを実施しプログラムの質を保証

さらに本事業では、以上の実施計画を２つのフェーズで実現させる。

【PHASE 1】—GRIP モデルの構築　（2022－2023 年　中間評価まで）

初年度（2022 年度）は、IPE オンデマンド教材開発を行い、JV-Campus に搭載する。現在すでにその一部となる高齢者ケアについては、すでに JV-Campus で公開している。このメディアを、千葉大学及びシンバイオシス大学の学生に受講してもらい、教材評価を実施する。一方で、オンライン・チーム・ビルディング・プログラムを開発し、フィージビリティ評価を実施する。またフィールド･スタディの予備調査を行い、課題を選定する。

これらを演習課題アーカイブとし、課題に取り組むためのテンプレートを作成する。さらに、2023 年度には、インドと日本で現地演習プログラム開発し、フィールド・スタディをスタートさせる。さらにバーチャル・ワークショップを開催する。また、その成果としてフィールド・スタディをケース・スタディ・アーカイブとし、事前学習コンテンツとして利用する。

【PHASE 2】—GRIP モデルの世界普及　（2024－2026 年　中間評価以降）

JV-Campus を活用し、国内・海外の大学をリクルートする。一方で、これまで連携のある、札幌医科大学、群馬大学、ハノイ大学、台北医学大学、ライプチヒ大学、シンシナティ大学などの参加を促進する。これにより、ローカル・フィールドの拡張を行う。また毎年バーチャル・ワークショップを開催し、ケース教材のアーカイブを継

続する。健康課題の取り組みプロジェクトのフォローアップ・スタディをスタートさせ、現地でのインパクト及びアウトカム評価の指標を明確にする。最終年度には、プロジェクト全体の最終評価を行い、共有する。

本事業のプログラムに関する質保証

(1) GRIP プログラムに関する反転授業教材の蓄積と活用

本事業の実施により、JV-Campus 上に千葉大学提供の IPE コンテンツ、およびサービスラーニング教材を公開する。これを活用する大学教員および学生からの授業評価をもとに持続的に改善していく。

(2) GRIP プログラムの質保証　4 能力の評価

サービスラーニングを用いたグローバル IPE に関しては、その堅牢な学習者評価のツールおよび方法が確立していない。本事業を通して、「１．専門職連携実践能力」「２．文化的対応能力」「３．文化的謙虚さ」「４．健康課題解決能力」における自己評価と他者評価の項目を開発することで、学修者評価を適切に実施させる。

(3) 副専攻学位、サーティフィケートの付与

GRIP を大学院副専攻として設置し、大学が運営する履修管理および成績管理に基づいて受講させる。博士課程では、グローバルな演習の一つのプログラムとして位置付け、留学の一部とする。このように、正規科目及び副専攻と位置付けることにより受講管理・成績管理を厳格に実施する。

本事業で学生に習得させる人材能力

本事業では、学生には大きく２つの能力を修得させる、そして、それぞれに６つの目標があり、合計 12 の修得すべき能力の習得を目標とする。

修得させる２つの能力とは、「A.専門職連携実践能力」および「B.社会課題解決能力」である。「A.専門職連携実践能力」は、「B.社会課題解決能力」の前提にある。

「A.専門職連携実践能力」は、IPE では生命科学に関する知識とその利用法に関するものである。これを全ての専門領域に拡張して目標とする。従って、これまでの IPE の目標をもとに、以下のような能力を設定する。

もう一方の「B.社会課題解決能力」は、ソーシャル・ラーニングとしての能力であり、幅広い知識が必要となると共に、それを地域に還元できるような能力が必要となる。また社会課題を発見し、よく理解し、かつ持続的に継続できる解決方法も重要となる。即効性はあるが持続できないものはいずれ社会から排除されるため、SDGs の理念に沿った持続的な解決方法が本事業の能力でも求められる。

一方で、この２つに共通する具体的能力には、文化的対応能力および文化的謙虚さが含まれる。つまり、２つの知識、専門的な深い知識と、社会的な幅の広い知識が必要となり、それらを裏付けするための「文化的対応能力および文化的謙虚さ」が重要となる。

これを学部と大学院に効果的に修得させるため、以下の学習到達を目標とする。

「A.専門職連携実践能力」における能力は、WHO が示す専門職連携教育をもとに、以

下の 6 つを GRIP1-6 として策定している。

（GRIP1）専門混在のチームワークでの課題解決
（GRIP2）各専門ごとの役割と責任の明確化
（GRIP3）コミュニケーションとリーダーシップ
（GRIP4）チーム学習とその成果の反映
（GRIP5）ニーズを伴うユーザーとの関係円滑化
（GRIP6）倫理を伴う実践教育

次に、「B.社会課題解決能力」における能力は、SDGs の理念を参考にし、以下の 6 つを GRIP7-12 として作成した。

（GRIP7）地域のアセスメント評価
（GRIP8）地域課題の抽出
（GRIP9）実践型課題の解決目標設定
（GRIP10）社会政策菜等の方策立案
（GRIP11）効果測定の評価計画立案
（GRIP12）地域における合意形成

上記の能力を獲得することを学習到達目標としている。

以上のように、本プログラムでは、プログラムの実施により。グローバル＋ローカルな「グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成」を実現する。

1-2-3. 学生主体の国際交流プログラム　【計画内容】

本事業は、基本的に全てが共同学習となっている。特に、専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL　2 単位)は、千葉大学―海外大学―課題提供大学および国内大学と幾つもの大学が連携し、共同学習を実施する。このような中で、以下の 2 つを積極的に実施し、現地に行かなくても共同学習が可能なプログラムとして構築する。

(1) オンラインチームビルディングワークショップ

健康課題の解決に向けて現地演習を行うが、事前準備として、参加大学の異なる専攻の学生が興味のある演習課題に取り組む。演習課題は、医療施設と地域、都市部とへき地、ジェンダー、母子と高齢者など対極にある概念を含む課題として学生の興味に応じて選択する。国や専門領域を超えて取り組むチームを学生が主体となって構築していく活動を、教員がサポートしながら行うことができるように、アイスブレーク手法、チームの発展段階に応じたファシリテーションなどを共有しつつ学生チームの構築を促進し演習課題に取り組む目的目標を明確にし、具体的な行動目標を立案する

までをオンラインで行う。この学部学生のチームビルディングに修士および博士が入ることにより、お互いとともにお互いからお互いについて学ぶ IPE のコアコンピテンシーを獲得することを期待する。

(2) メタバースを活用したバーチャルワークショップ

現地演習に取り組んだ後は、ワークショップでの共有に向け、メタバースでのプレゼンテーション準備の話し合い、プレゼンテーションの実施、各大学教員からのフィードバックののち、学びの共有を行う。最先端の SNS を学習に利用するとともに、ミラー社会での成功を現実世界に反映させる。

またこの際には、このプロジェクトの興味のある学生にもワークショップ参加を促し、次のプロジェクトのイメージをつかんでもらうとともに、フィールドへの理解を深める機会となることを期待する。将来的には GRIP に関する学生と教員の実践報告の場として機能し、社会課題解決に関する実践知の集積プラットフォームとなることを期待する。

1-2-4. オンライン（「JV- Campus」等）を活用したプログラム　【計画内容】

GRIP では、全体の実施計画と同様に、中間評価までと中間評価後の 2 つのフェーズでオンラインプログラムを構築し、JV-Campus で公開し、事前学習で利用する。本事業では、JV-Campus をプログラムの一部として利用するものである。

(1) PHASE1（2022－2023）

事前課題コンテンツを JV-Campus に公開し、連携する大学の教員および学生から評価を受け洗練する。事前課題コンテンツは、以下の内容とする。①専門職連携学習および演習②文化的対応能力学習および社会課題解決学習、①②のコンテンツを海外連携大学とともに洗練しパッケージ化する。JV-Campus 搭載コンテンツをパッケージ化する際に、連携校であるシンバイオシス大学、レスター大学、モナシュ大学からもコンテンツを提供してもらい、ワークシートおよび反転授業資料を拡充する。

(2) PHASE2（2024－2026）

上記①②のパッケージを活用し現地演習の準備性を高める。また現地演習で得られた社会課題解決 Case を難易度別にリスト化し、事前課題コンテンツに加える。これにより学生のレディネスに応じた演習準備を可能とする。PHASE2 での事前学習、現地演習、バーチャルワークショップのサイクルに連携大学以外の大学の学生が参加できるように JV-Campus で効果的に周知する。また大学院生のリクルートに使用できるような GRIP 動画コンテンツを、海外連携大学とともに作成する。

予定しているコンテンツの内容は以下の通りである。

①専門職連携学習コンテンツ

アイスブレーク、チームワークとチームビルディング、専門職の役割・責任の理解の方法、コミュニケーションとリーダーシップ、リフレクションとフィードバック、

倫理的実践、カンファレンス（会議）での意思決定、対立の解決と交渉、など

②文化的対応能力学習と社会課題解決学習コンテンツ

現地演習地域の文化、風習、医療福祉制度、地区診断、ヘルスプロモーションと社会的決定要因、プロジェクトマネジメント、文化的謙虚さ、など

③社会課題とその解決方法のケース

７つのプログラム(1)専門職連携基礎、(2)専門職連携実践１、(3)専門職連携実践２、(4)Cultural Competency and Cultural Humanity、(5)社会課題解決基礎、(6)社会課題解決応用、(7)専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL）を実施し、オンライン化する。

1-2-5. 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成　【計画内容】

本事業では、学部、修士、博士の学生を対象とし、既存の留学科目を活用した履修管理及び単位認定を行うとともに、大学院に「Global & Regional Interprofessional Education Plus」を置き、副専攻の学位を付与する。また既存科目を活用し単位を付与することで、学部から博士までどのレベルの学生でも GRIP に参加しやすくするとともに、その準備状態に応じた学修を保証する。

質保証における４つの枠組み

本事業の質保証で重要な(1)GRIP 参加学生の選抜、(2)レベル別の学習到達度目標の設定、(3)GRIP の履修および単位認定、(4)GRIP の質保証の拡張、の４つについて以下のように推進する。

(1) GRIP 参加学生の選抜

全学に向けて、GRIP の説明会を行い、参加学生の募集を行う。また同時に説明動画を作成し、連携大学と共有する。受講学生の選考基準、共通選考要件を作成しそれぞれの大学で選考を実施する。またプログラムの稼働に伴い、選考要件の評価会議を設定し、選考方法および要件の改善を実施する。

(2) レベル別の学習到達度目標の設定

本事業は、全学では大学院を対象に、IPE 受講済み学生は学部の３年生以上を対象にする。したがって、受講学生は学部、修士、博士とレベルが異なっている。これらの学生が単一の成果を上げるのではなく、それぞれの授業においても、各自のレベルにおいて課題に対してどのような提言を成果とするかを図１のように設定し、レベル別の学習到達度目標で学習の質を担保する。後述する 12 の学習到達目標とともにレベル別の学習到達度目標で学修成果を管理する。

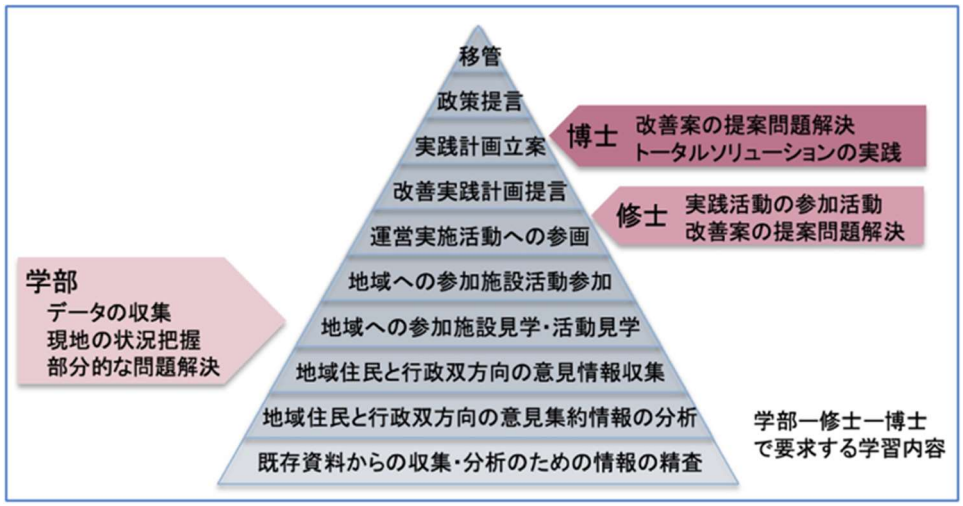


図 4　レベル別の学習到達目標

(3) GRIP の履修および単位認定

副専攻 GRIP の科目および概要を表 2 に示す。

表 2 副専攻　グローバル地域ケア IPE プラス(Global & Regional Interprofessional Education Plus: GRIP) 科目

NO	科目	単位	選択/必修	概要
1	専門職連携基礎	1	選択	IPEの起源と理論的背景、必要性をSDGsとの関連から論述し、基本的な理論から専門職連携実践活動を学ぶ
2	専門職連携実践 1	1	選択	専門職連携実践活動に必要な役割と責任、コミュニケーション、患者利用者住民との関係構築を学ぶ
3	専門職連携実践 2	1	選択	利用者住民へのサービス品質向上に向けた専門職連携実践のためのリーダーシップとメンバーシップと倫理的実践を学ぶ
4	Cultural Competency and Cultural Humility	1	選択	異なる伝統、教育システム、言語を持つ国同士のコミュニケーションを促進するインターカルチュラルな実践を学ぶ
5	社会課題解決基礎	1	選択	社会課題の解決に必要な地域アセスメント、課題抽出、目標設定方策立案、評価計画立案の一連の流れをシミュレーションシナリオを用いて学ぶ
6	社会課題解決応用	1	選択	社会課題の解決に必要なステークホルダーとの合意形成と対立の解決方法、コンサルテーションの実際をシミュレーションシナリオを用いて学ぶ
7	専門職間社会課題解決演習 (Interprofessional Social Learning)	2	必修	事前学習、現地演習、バーチャルワークショップで構成する（詳細後述）

この７つの科目の中で、一番重要なのが、専門職間社会課題解決演習(ISL)である。この演習は、連携する大学、対象とする地域によってそのテーマが異なっていく。

○専門職間社会課題解決演習（ISL）テーマ案

学部、博士前期課程、後期課程の学生が、ともに学びお互いから学び合えるように、連携大学が保有するフィールドを共有し、学生が選択したテーマにふさわしいフィールドを選択できるよう支援することを目標とする。教員は学生のレディネスに合わせた学習支援を行う。そのために、社会課題解決能力のラダーを開発し、これをもとに学修者評価のための共通ルーブリックを作成し、参加大学が共通の評価基準をもって学修者評価ができるようにする。社会課題解決演習（現地演習）のテーマの例を表３に示す。それとともに、どのように全学の学生の専門領域を巻き込みながら課題を解決するかについて、想定される専門領域について括弧内に示す。

表 3 専門職間社会課題解決演習（ISL）テーマ

NO	テーマ案	概要	期待するアウトカム
1	災害被災者の健康	災害の局面に応じた被災者の健康課題を取り上げ解決方略を提案する	住民教育による誰一人取り残さない社会の実現。そのための地域災害対応能力の向上、避難所環境向上のためのテクノロジー開発、被災地域の緑化、復興に向けた街づくり
2	医療資源へのアクセシビリティ	医療資源の偏在と不足に関連した健康課題を取り上げ解決方略を提案する	遠隔医療テクノロジーの実装提案、伝統的代替医療と調和したプライマリヘルスケアシステムの構築、急性期病院のケアの質の向上、長期ケア施設での大往生を支えるテクノロジーとケアモデル提案
3	認知症者とともに作る介護	認知症者の暮らしのなかの健康課題を取り上げ解決方略を提案する	認知症者への尊厳あるケア提供を支援する介護ロボット開発、ケアラー支援テクノロジー開発、認知症者のWellBeingを促進する環境提案
4	パンデミックと文化	パンデミック下の文化的背景および制度に依存した健康課題を取り上げ解決方略を提案する	隔離による孤独を解消するテクノロジー提案、ワクチン忌避への政策提言、国民への情報提供の在り方提言
5	ホームレスネスと社会	文化的文脈から見たホームレスネスが引き起こす健康課題を取り上げ解決方略を提案する	犯罪者のリハビリテーションプログラム提案、シェルター運営へのテクノロジーの応用、長期的支援のための政策提案

◇テーマ No1　「災害被災者の健康」

受講予定学生　＜看護・医・工・園芸・公共政策・総合国際＞

本テーマでは、災害における被災者の健康に関する課題を取り上げ、その具体的解決方法を提案する。住民参画型のインクルーシブな活動により、誰一人取り残さない社会を実現する。そのために、どのような避難所の環境が必要なのか（建築・都市環境)、必要な社会テクノロジーは何か（ロボット)、さらには、被災地の緑化再生によるグリーン・ヒーリングの応用（園芸・緑化)、復興に向けた新たな街を作るサービスやデザインなど（ランドスケープ・デザイン)、多岐にわたる戦略を構築し実現する。日本やマレーシアの地震や津波、タイやインドの水害などが対象となる。

◇テーマ No2　「医療資源へのアクセシビリティ」

受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・公共政策・総合国際＞

本テーマでは、医療資源の偏在から発生する課題を取り上げ、その解決法について

提案するものである。遠隔医療（医・IoT・情報・AI）とそのテクノロジー（工・公共政策）を実装することによる問題を政策提言し、代替医療を実現する。さらに、さまざまな場面におけるケアを実現し、医療により QOL（看護・薬・機会・サービス）を向上させることが可能な政策提言とその実行を実践する。

◇テーマ No3　「認知症者とともに作る介護」

受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・文・法政経・人文・公共政策・総合国際＞

認知症者とどのように生活をともにし、尊厳あるケアを提供できるかを社会が考え、社会で提供する（文・法政経・人文・公共政策)。認知症者だけではなく、ケアラーを支援するテクノロジーの開発も重要な課題として取り上げる（看護・医・理・工)。日本などはヤング・ケアラーの課題などがこれに当たるが、国や地域によって、ケアラーも異なる。このような課題を多様な専門により解決する（看護・医・薬・理・工・文・法政経・人文・公共政策)。

◇テーマ No4　「パンデミックと文化」

受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・公共政策・地方行政・メディア＞

今回の新型コロナウィルスのようなパンデミック下において、精神的な健康課題を文化的な背景をもとに健康課題を解決する（看護・地方行政・メディア・総合国際)。孤立、隔離などメンタルストレスに直結するような環境を最先端技術により解決し、新しい形でのコミュニティの形成により、解決する（看護・工・公共政策・地方行政・メディア・総合国際)。このような、パンデミック下における情報の提示から、コミュニティの形成まで、ソフトな提案を実現する。世界共通でありながらその対応が全く異なることも学習する。

◇テーマ No5　「ホームレスネスと社会」

受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・文・法政経・人文・公共政策・総合国際＞

文化的な背景からくるホームレス化が引き起こす健康課題について取り組む。イギリスの労働型ホームレス、インドの路上生活者など多様である。ホームレスに至った経緯と、犯罪者には犯罪防止を、生活困窮者にはシェルターなど、それぞれの国や地域の特性に合わせたホームレス生活者の健康課題を解決していく（看護・医文・法政経・人文・公共政策・総合国際)。特に、政策提言が重要であり、それを実現する医療看護ネットワークをどのように推進するかを提案する（人文・公共政策・総合国際)。

本事業は、事前学習、現地演習、バーチャルワークショップを組み合わせて実施することが骨格である。ワークショップをメタバースプラットフォームにて継続的に複数回実施することにより社会課題解決のシナリオ case が蓄積していく。これを GRIP の社会課題解決演習で活用することにより、現地演習の学習の質の向上を図り、現地演習での学習の質の向上はバーチャルワークショップでのシナリオ・ケース・スタディの精度の向上につながるという好循環を期待する。

(4) GRIP の将来展望

本プログラムの特徴は、地域ケア創生に関わる学部、大学院の国際的ネットワーク構築、複数の国の複数の専門領域の学生が、お互いからお互いについてお互いに学びあうことにより地域ケア創生を目指した社会課題解決方策の共有、COIL（2023 年度より BMX: Blended Mobility Project）と現地演習をハイフレックスに混在させた継続的な学習の実現である。従来大学生が現地ボランティアとして活動しさまざまな体験から経験的に獲得してきた社会課題解決のための実践能力の向上を可視化し、正規の学習プログラムとして履修管理と単位認定する。また、社会課題の解決に不可欠な専門職連携実践能力の獲得を大学院生レベルで正規科目とする試みでもある。

地域ケアを創生し、持続可能な開発目標３ Universal Health Coverage を実現することのできる専門職が GRIP により育成されることにより、WHO などの国際機関での活躍、ヘルスプロモーション関連の NGO での活躍を期待できる人材育成プログラムになり得る。またこれらの人材の国際ネットワークの強化に貢献することができる。

魅力的な大学間交流

本事業では、インドのシンバイオシス大学、英国のレスター大学、オーストラリアのモナシュ大学と連携し、グローバル地域ケア IPE プラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP）を実現させる。上記の質の保証のために、３つの大学とはカリキュラムの調整を行なっているが、それぞれの大学で以下のような強みを有していることにより、特徴あるプログラムの内容を適切な場所で実施し、さらなる大学間の交流を実現させる。

(1) シンバイオシス大学（インド）の特徴

2000 年代以降に著しい経済発展を遂げたインドにおいて、先進的な看護教育を実施している。一方で、インドは、さまざまな地域課題を有しており、連携大学の学習フィールドとして、貧困、持続、人口の課題に取り組むことができる大学となる。これまでの連携を強化してプログラムを着実に実施する。

(2) レスター大学（英国）の特徴

看護発祥であり、看護先進国にある英国において、地域看護に強い大学である。卓越した知識を有し十分な実践教育が可能な大学である。また、千葉大学の医学部との連携が強くグローバル IPE+から発展した、先進看護工学などを実践できる。これまでの医療連携を強化してプログラムを着実に実施する。

(3) モナシュ大学（オーストラリア）の特徴

広大な国土のもと、遠隔医療の最先端国でもあり、その一翼を担う大学である。他の３つの国とは全く異なる国土の成り立ちにより、ネットワークでの看護が発達している。これらの技術を知識として習得するプログラムや次世代遠隔看護を積極的に検討する大学である。千葉大学とはすでに 30 年近い歴史がありプログラムを着実に実施できる。

以上のように、学習の質保証とそれを利用した多様な大学間交流を加速させる。

1-2-6. 達成目標

将来の関係を見据えた連携強化に資する目標について

(1) 事業計画全体の達成目標（事業開始～2026 年度まで）

本事業の特徴は、1. 地域ケア創生に関わる学部大学院の国際的ネットワーク構築、2. GRIP プログラムで相互の国で学び合い自国の地域ケア方策を共有、 3. COIL（2023 年度より BMX）と現地交流をハイフレックスに混在させ継続的な学修の実現であり、この特徴をもとに、以下の評価視点を設定した。

1. 地域ケア創生に関わる学部大学院の国際的ネットワーク構築

・定量的目標：2022 年度派遣・受入学生を 10 名で開始し、最終年度 2026 年度には派遣・受入を 40 名に拡大する。地域ケア創生に関わる人材育成のため大学間連携および部局間連携を 3 件程度新たに締結する。

・定性的目標：副専攻 GRIP が完成し、 6 つのオンライン科目および専門職間社会課題解決演習が運用され、カリキュラムおよび授業改善のための評価が終了し、改善が定期的に行われている。そのためのプログラム委員会およびプログラム評価委員会が定期的に開催されている。GRIP 科目が JV-Campus に搭載され、視聴活用されている。

2. GRIP プログラムで相互の国で学び合い自国の地域ケア方策を共有

・定量的目標：事業展開期間において、毎年定期的にメタバースでの自国の地域ケアに関する課題・解決目標・方策を共有する成果発表会が開催され、case シナリオが最終年度において少なくとも 10 例蓄積している。

・定性的目標：GRIP 履修により参加学生の専門職連携実践能力、文化的対応能力と文化的謙虚さ、社会課題解決能力が向上している。また各フィールドにおける社会課題の解決方策オプションが増えており、かつ他国への解決方策の移転可能性が明らかになっている。

3. COIL（2023 年度より BMX）と現地交流をハイフレックスに混在させ、社会課題解決に関する継続的な学修を実現

・定量的目標：メディア授業、リアルタイムオンライン、E ポートフォリオ、メタバースミーティング、メタバースプレゼンテーション、ケーススタディシナリオシミュレーション教材が効果的に配置され、稼働し、8 割以上の受講学生が学習到達目標を達成している。

・定性的目標：参加大学間で専門職間社会課題解決のための継続的な学習が行われている。

(2) 中間評価までの達成目標（事業開始～2023 年度まで）

事業計画全体における中間評価における達成目標を以下の 3 つの点において、定量的目標及び定性的目標を設定する。

1. 地域ケア創生に関わる学部大学院の国際的ネットワーク構築

・定量的目標：2022 年度派遣・受入学生を 10 名で開始し、2023 年度には派遣・受入を各 15 名とする。地域ケア創生に関わる人材育成のため大学間連携および部局間連携を 1 件程度新たに締結する。

・定性的目標：副専攻 GRIP の 6 つのオンライン科目が 2023 年度に完成しており、専門職間社会課題解決演習トライアルがインドにおいて 2023 年度に実施されている。また日本におけるトライアルフィールドが 1 か所以上決定している。カリキュラムおよび授業改善のための評価項目が明らかになっている。そのための GRIP に関するプログラム委員会およびプログラム評価委員会が 1 回以上開催されている。GRIP 科目のうち 3 分の 1 程度が JV-Campus に搭載され、視聴活用されている。

2. GRIP プログラムで相互の国で学び合い自国の地域ケア方策を共有

・定量的目標：2023 年度にメタバースでの自国の地域ケアに関する課題・解決目標・方策を共有する成果発表会が開催され、case シナリオが 2023 年度に少なくとも 2 例完成し、 2 例が完成に向けた準備を行っている。

・定性的目標：GRIP 履修の学修者評価スケールおよび成績評価基準を参加大学で合意している。専門職連携実践能力については千葉大学が開発した Chiba Interprofessional Competency Scale の使用を予定する。文化的対応能力と文化的謙虚さについては世界で数種類開発されている Cultural Competency Scale から選択、専門職間社会課題解決能力については本事業で開発するため、その方法論が確定している。

3. COIL（2023 年度より BMX）と現地交流をハイフレックスに混在させ、社会課題解決に関する継続的な学修を実現

・定量的目標：メディア授業、リアルタイムオンライン、E ポートフォリオ、メタバースミーティング、メタバースプレゼンテーション、ケーススタディシナリオシミュレーション教材が効果的に配置され、稼働している。

・定性的目標：2023 年度に継続的な学修実現に向けた初期課題が明確になっている。

養成しようとするグローバル人材像について

(1) 事業計画全体の達成目標（事業開始～2026 年度まで）

本プログラムは、千葉大学で全学部・全大学院を対象として実施する。社会課題の解決はまさに多様な職種間の連携協働および国際的な比較と考察、資源を創造する柔軟な発想が必要とされるためである。

本プログラムで要請する人材像は、Universal Health Coverage 推進のために地域ケアを創生できる専門職である。具体的には、こどもたちの健康状態の改善のためのアクションを取ることができる、その国に必要な医療機器、介護機器を開発できる、健康的な環境を考慮した地域開発ができる、健康資源へのアクセシビリティを改善する、健康習慣の獲得のための教育ができる、高齢者のポリファーマシーの改善に取り組むことができるなど、どの国、どの地域であっても、自国でも他の国でも健康関連の課

題に他の専門職とともに取り組み、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤として、現場での最適解を導き出すことができる自律した組織人、が養成する人材像である。Universal Health Coverage のスローガンである「すべての人に健康を」を実現させるため、あらゆる専門領域の人材にこの Universal Health Coverage を定着させ推進するための、世界規模の人材育成を行う。

(2) 中間評価までの達成目標（事業開始～2023 年度まで）

採択後ただちに、副専攻 GRIP の設置準備に取り掛かり、2023 年度までに 7 つの科目（合計 8 単位）を開講する。この 7 科目は全学共通の新規科目と看護学研究科の開放科目（一部名称変更を行う）の 2 種類となっている。

〇全学共通の新規科目

専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL)、Cultural Competency and Cultural Humanity、社会課題解決基礎、社会課題解決応用

〇看護学研究科の科目の開放

専門職連携基礎、専門職連携実践１、専門職連携実践２

このように構成し、学内にあまり多くの科目を設置せずスムースに展開する。また、専門職間社会課題解決演習についてはトライアルで行う。これらの科目の学修者評価と科目評価のルーブリックの試行が終了している。また専門職連携実践能力、文化的対応能力及び文化的謙虚さ、社会課題解決能力の客観的測定指標について参加大学と合意形成が完了している。

学生に修得させる具体的能力のうち、一定の外国語力基準をクリアする日本人学生数の推移について

(1) 本事業計画において定める外国語力基準及び同基準をクリアする学生数に関する達成目標

表 4　外国語力基準及び同基準をクリアする学生数に関する達成目標

単位：人（延べ人数）

	外国語力基準	達成目標	
		中間評価まで（～2023 年度まで）	事後評価まで（～2026 年度まで）
	【参考】本事業計画において派遣する日本人学生合計数	25	115
1	学部向け GRIP 履修・Global Health and Nursing Ⅱで単位認定（CEFR B1 以上）	15	50
2	GRIP 副専攻履修学生（CEFR B2 以上）	8	20
3	博士後期課程 Global 演習で単位認定（CEFR B2 以上）	2	5

(2) 外国語力基準を定めた考え方

千葉大学では、現在入学後に TOEFL によるプレイスメントテストを入学生全員に実施している。この結果は、その後の学力別クラス編成に利用している。現在では５段階で、CEFR の定める B1(TOEFL iBT 71 以下)、B2(72-79)、B2+(80-94)、C1(95-)、C2 の５段階としている。千葉大学ではスーパーグローバル大学創成支援事業において、グローバル人材としての外国語力基準を CEFR の B2+以上、TOEFL iBT 80（TOEIC730）点以上と定めている。その目標数は、令和５年度までには、学部では 5,600 名 46.7%、大学院では 2,000 名 44.4%を目標としている。本事業では、この SGU で目標としている能力を有していることを条件とするため、大学院生はこの CEFR の B2 以上、TOEFL iBT 80（TOEIC730）程度をプログラム参加の要件とする。学部生に関しては B1 とする。

(3) 事業計画全体の目標達成に向けたプロセス(事業開始～2026 年度まで)

本事業では、英語によるディスカッションおよびプレゼンテーションで英語力を必要とする。大学院生は CEFR の定める B2+以上のレベルの学生を対象とし、学部生は B1 以上の学生を対象とする。千葉大学では、令和２年度入学の学生より、英語カリキュラムを全面的に改訂して、卒業に必要な単位数を増加させ、専門科目を英語により学習する「アカデミック・プレゼンテーション」を主に実施している。さらに、令和元年度以前に入学した学生には、外国語の授業（必修）以外に、イングリッシュ・コミュニケーション（ブリティッシュ・カウンシルとの連携による会話やディスカッション主体の授業)、イングリッシュ・ハウス（常勤教員によるプレゼンテーションやディスカッションのスキルアップ・トレーニング）の３つの英語学習を備えている。プログラムに参加する学生には、その英語のレベルに合わせて、イングリッシュ・コミュニケーションの履修や、イングリッシュ・ハウスでのトレーニングを推奨し、プログラムでのディスカッションや学生同士のチュートリアルに対応できるようにする。また本事業では、様々な課題に関する現地でのインタビューおよび会議への参加、専門家からの意見聴取などを想定している。従って、そのための英語力を確保することを要件とする。この能力は、選抜時点にチェックできるようにする。また、学部生が副専攻 GRIP を聴講することも可能とする。なお、令和２年度より開始された英語カリキュラムの改訂により、令和４年度以降に専門科目の英語による授業が実施される。これは学部の授業であるが、本プログラムで提供される授業の一部を解放して学部生に受講させることも可能である。以上のように、英語の授業の倍増、単位外授業としてのイングリッシュ・ハウスでの学びを通じて語学力の目標を達成させる。

(4) 中間評価までの目標達成に向けたプロセス（事業開始～2023 年度まで）

本事業では、英語のレベルをクリアしていることを選抜の要件とするが、選抜時に英語の要求レベルに到達していない、あるいはスキルをあげたいと希望する学生

は、イングリッシュ・コミュニケーションおよびイングリッシュ・ハウスで実施している、全学共通のディスカッションとプレゼンテーション用の授業を、英語のレベルによって受講する。授業は以下の６つの種類を構築する。（１）英語によるジェネラル・コミュニケーションの取得（インタビュー方法など）（２）英語によるディスカッションのポイントと討議内容のまとめ方の構築（３）英語によるプレゼンテーションのプロセスの理論と実践（４）英語によるプレゼンテーション・マテリアルの作成法（５）スチューデント・チュートリアル・システム（STS）に対応する英語による指導方法の基礎（６）ビジュアル・サマリー・レポート、ポートフォリオ、プレゼンテーション資料の作成方法これらの内容を含めた事前学習コンテンツを利用する。これらの授業はすべてオンデマンド方式で行う。さらに、必要に応じて、プレゼンテーションやディスカッションは、イングリッシュ・ハウスのネイティブの教員の個別指導、看護学研究科のアカデミック英語担当教員の指導を受けられるように調整する。

学生に修得させる具体的能力のうち、外国語力以外について

(1) 事業計画全体の達成目標（事業開始～2026 年度まで）

本事業で学生に習得させる具体的能力は、A.専門職連携実践能力および B.社会課題解決能力である。専門職連携実践能力は社会課題解決能力の前提にあり、この二つに共通する具体的能力に文化的対応能力及び文化的謙虚さが含まれる。これを学部生と大学院生に効果的に修得させるため、以下の通り展開する科目ごとに学習到達目標を示す。

A.専門職連携実践能力

WHO が示す専門職連携教育の学習到達目標がチームワーク、専門職の役割と責任の理解、コミュニケーション、内省と学習、住民・患者とのニーズの把握を伴う関係性の構築、同僚への倫理である。この到達目標を基盤として本事業における学習到達目標を図 5 の通りに設定した。

図 5　専門職連携実践能力

B.社会課題解決能力

SDG s の取り組みを参考に、社会課題を見出しアセスメントし、目標と評価の視点を設定したうえで具体的な方策を立案し、実施に向けたアクションを取ることができること、また挑戦し失敗から学ぶことができることとともに、現地の文化や制度をリスペクトし、住民及びステークホルダーと良好な関係を維持しながら社会変革を進めていくことのできる能力であるとした。この能力を獲得することを学習到達目標として図 6 の通りに設定した。

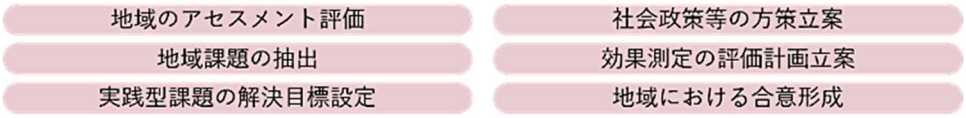


図 6　社会課題解決能力

また社会課題解決能力は学生の準備状態に応じて図 7 の通りに定める。学部生レベルでは、社会課題に関するフィールドワークスキルとデータ収集方法を理解し、実際に地域住民と指導の下でコミュニケーションをとることができ、これらの意見と情報から部分的な課題解決の方向性を検討できること、博士前期課程では地域住民の意見とともに地域のステークホルダーの意見を集約分析したうえで、実践活動に参加し、学生チームの意見をまとめ改善案を提案できること、博士後期課程では、社会課題解決にむけたトータルソリューションの実践ができることを到達目標に学生のレディネスをアセスメントし適切な到達レベルを設定する。

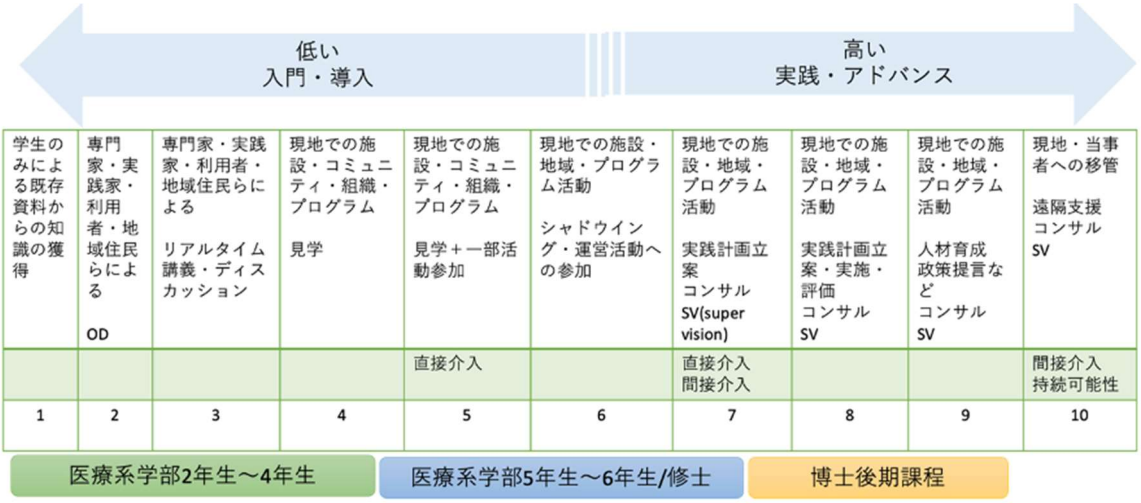


図 7　専門職間社会課題演習学習到達目標のレベル

以上の学習到達目標を達成するために、本事業で設定する副専攻 GRIP 科目の到達目標を表 5 の通りに定める。

表 5　副専攻　グローバル地域ケア IPE プラス（GRIP）各科目到達目標

NO	科目	単位	選択/必修	学習到達目標
1	専門職連携基礎	1	選択	IPEの必要性、理論的背景をSDGSと関連付け説明できる。専門職連携実践活動のタイプと分類を説明できる
2	専門職連携実践１	1	選択	WHOが提案している専門職連携実践の学習到達目標、役割と責任、コミュニケーション、患者利用者住民との関係構築の内容と方法を説明できる
3	専門職連携実践２	1	選択	WHOが提案している専門職連携実践の学習到達目標、チームワーキング、同僚への倫理的実践、自己の省察の内容と方法を説明できる
4	Cultural Competency and Cultural Humility	1	選択	文化的謙虚さ及び文化的対応能力の内容と具体的な行動を説明できる
5	社会課題解決基礎	1	選択	社会課題の解決に必要なプロジェクトマネジメントのプロセスを説明できる
6	社会課題解決応用	1	選択	社会課題の解決に必要な合意形成（アコモデーションとコンセンサス）、対立の分析と解決が説明できる
7	専門職間社会課題解決演習 (Interprofessional Social Learning)	2	必修	学部レベル、修士レベル、博士レベルごとに設定する（詳細は図4）

(2) 中間評価までの達成目標（事業開始～2023 年度まで）

本事業 GRIP を受講した学生はこれまで述べてきた通り、GRIP 各科目の学習到達目標を達成したことを確認できた場合に単位認定をする。そのため派遣学生、受入学生の人数が予定通りに推移し、2022 年度それぞれ 10 名、2023 年度それぞれ 15 名の学生が GRIP 専門職間社会課題解決演習まで履修し単位認定ができれば、グローバルな地域ケア創生を専門職連携により実現できるコンピテンシーを獲得できたと判断できる。

なお、これまで IPE を受講したことのある学生については、GRIP 1 から 3 を既修得単位として読みかえる。また看護学部 4 年生で学部選択授業 Global Health and Nursing I,および II を受講した学生については、GRIP4 から 6 を既修得単位とする。また看護学研究院博士前期課程共通基盤科目専門職連携実践論および専門職連携教育論、災害時専門職連携演習はおなじく GRIP 科目 1，2，3 を既修得単位とする。2023 年度までにこのような既修得単位認定の仕組みを作り、医療系学生の履修しやすさに配慮する。

質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成及び拡大に向けた具体的な取組について

(1) 事業計画全体の達成目標（事業開始～2026 年度まで）

本事業は、大学間の国際的な連携により、多様な領域の学生が連携して社会課題解決への取り組みを実施するなかで、お互いからお互いについてお互いに学びあいつつ、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤とした専門職連携実践能力、社会課題解決能力を獲得することを目指すものである。その究極の目的は、Universal Health Coverage の推進にある。この目的を参加大学が共有しつつ、以下の表 6 に示す 2 つの Phase、

5 つの step で推進する。

2026 年度以降の展望として多様な国の多様な専門性を有する地域ケア創生人材の国際ネットワークを形成し、Universal Health Coverage を実現する専門職の輩出により、WHO など国際機関で活躍する人材育成プログラムとして確立することを目指す。

表 6　質の保証を伴った大学間交流の枠組み形成プロセス

年度	Phase	Step	プロセス
2022	1	1	教材、教育ロジスティックス、教育プログラム質保証の仕組みづくり シンバイオシス大学で社会課題解決演習およびバーシャルワークショップのトライアル
2023		2	ISLトライアルスタート 参加大学プログラム委員会による管理と学修の質保証を本格稼働 副専攻GRIPプログラム完成、他大学に参加呼びかけの準備
2024	2	3	GRIPを周知普及する。ドイツ（ライプチヒ大学）、アメリカ（シンシナティ大学）、台湾（台北医学大学）、北アイルランド（アルスター大学）、オーストラリア（シドニー大学）、ベトナム（ハノイ大学）を候補とし準備を進める。
2025		4	プログラム評価委員会を設置し、質改善の仕組みをスタートさせる 社会課題解決プロジェクトのフォローアップスタディをスタートさせる
2026		5	GRIPの全体評価を行い、継続実施のためのシステムを構築する

(2) 中間評価までの達成目標（事業開始～2023 年度まで）

表 6 の Phase1 が、本事業における質の保証を伴った大学間交流の仕組み構築に関する中間評価までの達成目標への形成プロセスである。本事業の中間評価達成目標は、①参加大学間で教育プログラム委員会、評価委員会などの設置に向けて合意している。②学生の選抜条件、履修ルール、成績評価ルーブリック、学修者評価に関する方法と評価項目について合意している。③①および②の活動により大学間の人事交流事例が増加する、の 3 点である。なお、メディア授業プラットフォーム、メタバース、オンラインの環境整備は 2022 年度中に完成させ、学習環境として十分整える。

1-2-7. 5 年間の学生交流および展開段階のまとめ

下記の表 7 の通り、5 年間の事業展開とともに学生交換国および学生数を増加する予定としている。

表 7　5 年間の事業展開および学生交換国および学生数

年		学生交換数		学生交換国		展開段階	
年次	年度	派遣	受入	学生の派遣国	学生の受け入れ国	PHASE	STEP
初	2022	10	10	インド	インド	1	1
2	2023	15	15	インド、英国	インド、英国		2
3	2024	20	20	インド、英国、オーストラリア	インド、英国、オーストラリア	2	3
4	2025	30	30	インド、英国、オーストラリア他	インド、英国、オーストラリア他		4
5	2026	40	40	インド、英国、オーストラリア他	インド、英国、オーストラリア他		5
計		115	115				

1-3. GRIP 推進のための組織と体制

1-3-1. GRIP 推進委員会の設置

GRIP 推進のため、初年度である 2022 年度は学内を中心に体制の基盤づくりに着手した。2023 年度の組織体制を下記の図 8 の通り策定した。

国際的な IPE プログラムであり、IPERC の下部組織として位置づけ、亥鼻 IPE に係る教員も GRIP 推進委員として加わった。また、海外連携大学は連携大学 GRIP 推進委員会として、さらに外部者を GRIP 評価委員として委員会を形成する。

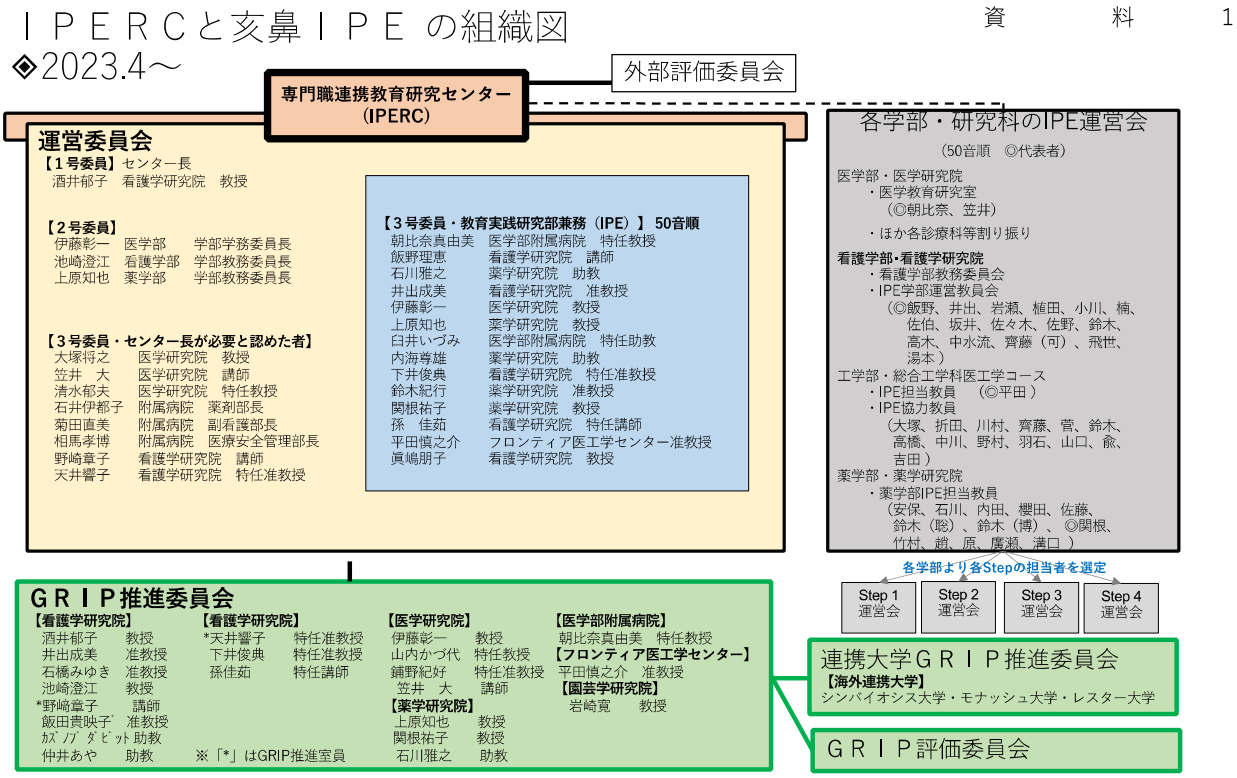


図 8　GRIP 推進委員会と関係部署等の組織図

1-3-2. GRIP にかかわる規定の整備

規定の改定

GRIP 推進委員会の設置にあたり、千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センター規程に以下の条文を追加し、令和 5 年 4 月 1 日より施行した。

（グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム推進委員会）
第１３条　グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program。以下「GRIP」という。）に関する事業を推進するため，センターに，GRIP 推進委員会を置く。
２　GRIP 推進委員会に関し必要な事項は，別に定める。

規定の制定

以下の通り、千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センター　グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム推進委員会に関する内規を新たに制定し、令和 5 年 4 月 1 日より施行した。

千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センター　グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム推進委員会に関する内規

（趣旨）
第１条　この規程は，千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センター規程第１３条第２項の規定に基づき，グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program。以下「GRIP」という。）推進委員会に関し必要な事項を定める。
（目的）
第２条 GRIP の教育，実践，研究を実施し，またプロジェクトの運営に関する関係機関との調整や状況の管理を行うことにより，GRIP 活動の発展・充実に資することを目的とする。
（組織）
第３条　委員会は，次に掲げる委員をもって組織する。
一　大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センター長（以下「センター長」という。）
二　医学部，薬学部及び看護学部の教務担当委員長
三　その他センター長が必要と認めた者
（任期）

第４条　委員の任期は２年とし，再任を妨げない。ただし，欠員が生じた場合の後任者の任期は，前任者の残任期間とする。
（委員長及び副委員長）
第５条　委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。
２　副委員長は，委員の互選によって定める。
３　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。
４　副委員長は，委員長を補佐し，委員長に事故あるときはその職務を行う。
（会議）
第６条　委員会は，委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。
２　委員会の議事は，出席委員の過半数の同意をもって決し，可否同数のときは，議長の決するところによる。
（委員以外の出席）
第７条　委員長は，必要と認めるときは，委員以外の者を委員会に出席させ，意見を聴くことができる。
（GRIP 評価委員会）
第８条　プログラムの質の評価と改善を実施するために GRIP 推進委員会に GRIP 評価委員会を置く。
２　GRIP 評価委員会に関し必要な事項は，別に定める。
（小委員会）
第９条　委員会が必要と認めたときは，小委員会を置くことができる。
２　小委員会の名称，組織及び運営については，委員会が定める。
（事務）
第１０条　委員会の事務は，GRIP 推進室，亥鼻地区事務部総務課において処理する。
（雑則）
第１１条　この内規に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，別に定める。
附　則
この内規は，令和５年４月１日から施行する。

【制定理由】
グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム推進委員会設置に伴い制定するもの。

規定の制定

以下の通り、千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センターグローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム評価委員会に関する内規を新たに制定し、GRIP 推進委員会での承認を以て、令和 6 年 4 月 1 日より施行することとした。

〇千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センターグローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム評価委員会に関する要項

（趣旨）

第１条　この要項は，千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センターグローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program。以下「GRIP」という。）推進委員会に関する内規第８条の規定に基づき，GRIP 評価委員会（以下「委員会」という。）に関し必要な事項を定める。

（目的）

第２条　委員会は，GRIP の教育プログラム開発実施評価運営状況について，第三者の立場から客観的な評価及び提言を行うことにより，GRIP の活動の発展・充実に資することを目的とする。

（組織）

第３条　委員会は外部評価委員会，プログラム評価委員会（以下「各委員会」という。）とする。

２　委員は，GRIP の活動に関し識見を有する者のうちから，センター長が委嘱する。

（任期）

第４条　委員の任期は，依頼した評価項目に対する評価と提言等が終了するまでの間とする。

(議長)

第５条　各委員会に議長を置き，センター長をもって充てる。ただし，センター長に事故があるときは，あらかじめセンター長が指名した者がその職務を代行する。

２　各委員会の進行は，議長が指名した者が行うことができる。

（評価項目）

第６条　各委員会による評価項目は，GRIP の教育・研究活動等の現状を把握し，将来を展望できる体制整備に資する事項とし，主として次の項目とする。 ２　外部評価委員会

一　教育プログラムに関すること。

二　研究活動に関すること。

三　プログラム運営に関すること

３　プログラム評価委員会

一　教育プログラムに関すること。

二　研究活動に関すること。
三　プログラム運営に関すること。

（委員以外の出席）

第７条　委員長は，必要と認めるときは，委員以外の者を委員会に出席させ，意見を聴くことができる。

（評価結果の公表）

第８条　各委員会は，評価結果を取りまとめ，GRIP 推進委員会に提言するとともに，その概要を評価報告書，ホームページ等で公表する。

（事務）

第９条　各委員会の庶務は，GRIP 推進室，亥鼻地区事務部総務課において処理する。

（雑則）

第１０条　この内規に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，別に定める。

附　則

１　この要項は，令和６年４月１日から施行する。

2. 2023 年度の取り組み

2-1. 大学院博士前期課程副専攻 GRIP の開講

GRIP プログラムは、千葉大学の Global Education 大学院国際実践教育の該当科目として開発され、2023 年度より大学院国際実践教育 GRIP として全学の学生が履修可能な 7 科目（8 単位）が開講された。

2-1-1. Global Education 大学院国際実践教育

千葉大学の Global Education（https://global-education.chiba-u.jp/）の一つである、「大学院国際実践教育」とは、「大学院国際実践教育は、将来グローバルに活躍できる高度な実践型人材を育成することを目的とした千葉大学の大学院グローバルプログラムで、海外協定校の学生との協働学習を中心とした大学院国際実践教育の指定科目を、主専攻である研究科・学府での修了要件単位以外で、所定の履修要件に基づき履修するもの」である（https://global-education.chiba-u.jp/globalstudies/）。

本 GRIP プログラムにおいては、2022 年度の申請時より、この大学院国際実践教育に該当するプログラムとして開発・実施することを想定し、千葉大学学務部国際企画課と調整を行ってきた。選定・採択後には、実質的な準備に着手し、2023 年度には下記の図 9 の通り、「大学院国際実践教育」の全 9 プログラムのうちの一つとなった。

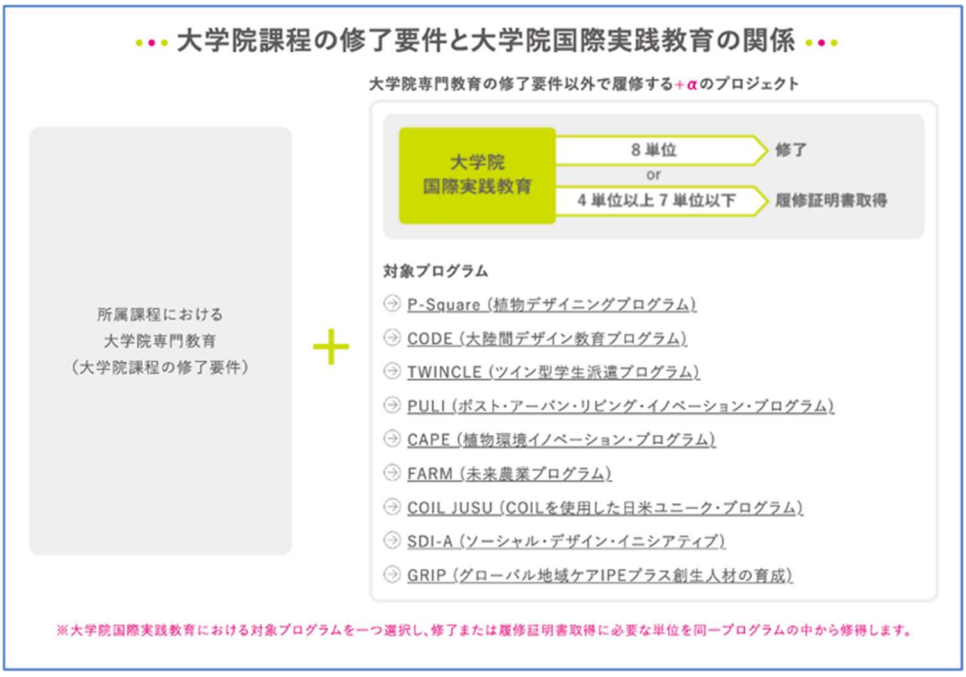


図 9　大学院課程の修了要件と大学院国際実践教育の関係（千葉大学，2023 年度）
（千葉大学　Web サイトより，https://global-education.chiba-u.jp/globalstudies/）

上記の図 9 にも示した通り、「大学院国際実践教育」の学修については、「修了」と「履修証明書取得」の 2 通りがあり、本 GRIP プログラムは「修了」のパターンとして設定する。つまり、図　にもあるように、各大学院生が所属課程における大学院専門教育(大学院課程の修了要件)に加えて、GRIP の指定する 7 科目（8 単位）を履修し単位認定されれば、大学院国際実践教育 GRIP 修了とする。なお、これら 7 科目については、すべてが自由科目であり、千葉大学の全学部・全研究科所属の学生が履修可能である。

2-1-2. 全学共通科としての開講

副専攻としての、大学院国際実践教育 GRIP 修了のための 7 科目開講は、2022 年度に千葉大学大学院看護学研究科において承認され、同看護学研究科において 2023 年度の 10 月に、全学共通科目として開講した。これら 7 科目の概要は以下の表の　通りである。大学院国際実践教育 GRIP 修了認定のためのこれら 7 科目の履修順序は特に規定しない。また、これら 7 科目は個別の履修も可能である。

なお、演習科目である「専門職間社会課題解決演習」を除く 6 科目は先行履修科目として学部生の受講も可能とした。講義科目については、第 4 ターム（10、11 月）に開講した。演習科目である「専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Service Learning: ISL）は、2023 年度はターム 5，6 に開講した。ISL に関連したオンラインでの事前学習は 1 月開始、現地渡航・演習を 2 月、事後のオンライン学習を 3 月に実施した。

表 8　GRIP 関連科目一覧

授業科目	単位数	形態	授業方法	授業科目の内容
専門職連携基礎	1	講義	メディア授業(非同期・双方向)	IPE(Interprofessional Education)の起源と理論的背景、必要性を SDGs の関連から論述し、基本的な理論から専門職連携実践活動を学ぶ。
専門職連携実践 1	1	講義	メディア授業(非同期・双方向)	専門職連携実践活動に必要な役割と責任、コミュニケーション、患者・利用者・住民との関係構築を学ぶ。
専門職連携実践 2	1	講義	メディア授業(非同期・双方向)	患者・利用者・住民へのサービス品質向上に向けた専門職連携実践のためのリーダーシップとメンバーシップと倫理的実践を学ぶ。
Cultural Competency and Cultural Humility	1	講義	メディア授業(非同期・双方向)	異なる伝統、教育システム、言語を持つ国同士のコミュニケーションを促進するインターカルチュラルな実践を学ぶ。
社会課題解決基礎	1	講義	メディア授業(非同期・双方向)	社会課題の解決に必要な地域アセスメント、課題抽出、目標設定、方策立案、評価計画立案の一連の流れをシミュレーションシナリオを用いて学ぶ。
社会課題解決応用	1	講義	メディア授業(非同期・双方向)	社会課題の解決に必要なステークホルダーとの合意形成と対立の解決方法、コンサルテーションの実際をシミュレーションシナリオを用いて学ぶ。
専門職間社会課題解決演習	2	演習	同期/非同期オンライン、現	海外の提携大学所在地において、現地のサービス活動にチームとして参加し、健康に関連した

(Interprofessional Service Learning: ISL)			地演習(海外連携大学)	社会課題解決に取り組む。事前学習、現地演習、事後のバーチャルワークショップにより構成する。

2023 年度は上記の全科目のコンテンツを開発し、履修可能とした。専門職連携基礎、専門職連携実践 1、専門職連携実践 2 については IPERC での蓄積を基に、Cultural Competency and Cultural Humility については専門家であるメーカー亜希子氏のコンサルテーションを受けつつ構成した。社会課題解決基礎、社会課題解決応用では、社会課題解決のプロセスとスキルについて学ぶことを目的として、実際に地域における社会課題とその解決のための介入に取り組んでいる学内教員や、学外組織・施設等の支援者を講師として招聘し、実例について学ぶ構成とした。これには ISL のフィールドである活動や組織を含め、ISL につながるものとする。

2-2. 教材開発

2-2-1. 学習要項の作成

学習ガイドとして、前年度のものを見直し、改訂版の学習要項を作成した（資料　参照）。構成は、GRIP プログラム概要、獲得する能力・到達目標、具体的な学習の流れ、フィールド演習のトピック、使用する学習ツール、ワークシート、最終プレゼンテーションのテンプレートなどから成る。これらを必要最小限としてコンパクトにまとめ、オンラインならびに紙面でも提示した。

内容は GRIP プログラム申請時書類および、参加学生募集説明用資料に準拠しており、特に、獲得をめざす能力とその到達目標については同内容である。

2-2-2. ワークシートおよび学習成果発表プレゼンテーション用テンプレートの作成

ワークシートの作成

取得・向上をめざす 3 つの能力について意識して学習に取り組み、自己の成長と学習課題を認識して計画的に学習活動に取り組むため、現地演習について、初日には計画立案のためのプランニングシート、そして、最終日（8 日目）には計画達成状況の振り返りおよび、GRIP での向上・獲得をめざす IPCP、社会課題解決、文化的対応力（Cultural Competency and Cultural Humility）の 3 つについて自己評価をおこなうリフレクションを行うためのシートを作成し、提示した。

学習成果発表用プレゼンテーション用テンプレート

社会課題解決の能力の項目について焦点化するために、テンプレート化した。さらに、IPCP および文化的対応能力についても新たな気づきや自国との相違等について、発表項目として含めた。

2-2-3. 事前学習課題・資料等の作成

2-2-3-1　派遣・受入共通課題

IPCP および課題解決

2022 年度に引き続き、GRIP プログラム担当教員でもある IPERC（看護学研究院附属専門職連携教育研究センター　Interprofessional Education Research Center）教員が主となって作成した本 GRIP プログラムの主な目的であり必須要素である IPCP 能力そして、IPCP での課題解決への取り組みに関するメディア教材を呈示し、事前のオンデマンド視聴を学習課題とした。加えて、WHO の" Framework for Action on Interprofessional Education & Collaborative　Practice"(https://www.who.int/publications/i/item/framework-for-action-on-interprofessional-education-collaborative-practice)を教材として掲載した。

日本の地域包括ケアシステム

日本の地域包括ケアシステムに関する動画教材を作成し、全参加学生に提示した。SIU ならびに UL 学生が取り組む日本での学習テーマは自助および互助等の地域包括ケアシステムを基盤としている。また、本学学生が派遣先のインドあるいはイギリスにおいて取り組む社会課題も同様に人々の地域生活の支援であることから、その基盤となる知識として事前学習教材として提示した。

2-2-3-2　派遣学生への事前学習課題・資料等

SIU(シンビオシス国際大学)への派遣学生

本学よりシンビオシス国際大学(インド)に派遣する学生は、現地にて困難な状況にある子どもならびに女性への支援を学習テーマとして取り組んだ。それに先だって、事前のオンラインオリエンテーション時に、SIU よりインド、大学のあるプネ、そして現地の学習テーマならびに演習施設・組織に関する紹介がなされ、同オリエンテーションをアーカイブとして視聴教材として、文書教材と共に提示した。る文献を reading material として提示していただいた。

UL(レスター大学)への派遣学生への事前学習課題・資料等

レスター大学（イギリス）へ派遣する学生に対しては、現地での学習テーマであるホームレス支援に関して、レスター大学 GRIP 担当教員によりイギリスの保健医療システムおよびホームレス支援に関する動画教材等を作成し、事前に提示した。

2-2-3-3　受入学生への事前学習課題・資料等

千葉大学においては受入学生へのプログラムとして、災害準備、ホームレス支援、ソーシャルキャピタル創出の 3 つの学習テーマならびにフィールドを用意した。各学習テーマおよびフィールドについて学習要項とともに、日本と世界のホームレス支援に関する資料・訪

問施設が登場する動画、日本の災害と準備状況ならびにアプリの紹介、ソーシャルキャピタルとしての居場所となる訪問施設・組織等に関する資料を事前学習として提示した。学生の負担とならないように、一部は参考資料とした。

学生同士の交流ならびにチームビルディング推進

各大学内および大学間の学生の交流を推進するために、各学生の自己紹介動画(2，3 分程度/人)を事前課題として課し、全参加学生がオンデマンドで視聴できるようにした。

日本において専門職間社会課題解決演習を実施する SIU 学生および UL 学生計 15 名については、3 つの学習テーマとそのフィールド（災害準備、ホームレス支援、ソーシャルキャピタル創出）について、学習テーマについて事前に各学生の希望を募った。希望をとりまとめ、学生の希望が充足されつつも所属や専攻等が多様となるように配置し、3 チームを形成した。来日前に提示し、渡航前からのチームビルディングを促した。

本学の派遣学生については、インドあるいはイギリスにおいて現地演習を実施する千葉大学学生については、渡航前にオンライン説明会を数回開催し、説明会に続き学生同士のミーティングとするなど、メタバースを提供する等して、本学においても同様に渡航前からのチームビルディングを推進した。

2-2-4. 学習用プラットフォーム（LMS：Learning Management System）の設定

Google Classroom 上でのクラス作成・設置

千葉大学利用の LMS である Google Classroom を 2023 年度の GRIP プログラムにおいても使用し、事前に派遣・受入両学生ならびに関係教員等をビジターアカウントあるいは特別聴講学生として登録し、教材提示、課題提出等のプラットフォームとして使用した。2022 年度には SIU の GRIP 担当者および SIU 学生が同フォームにログインできないでいたが、2023 年度は早期にアカウントならびにログインに関する資料を SIU 側に提示し、全員がログインならびに使用可能であった。UL 学生に関してはログイン上の問題は無かった。

メタバースプラットフォーム ovice のスペース構築

2022 年度に引き続き、メタバースプラットフォームを架空の共同学習室として使用するために GRIP プログラム専用スペースを契約し、本学、SIU、UL の 3 大学のロゴを配置し、独自の仕様として設置した。

2-2-5. 事後学習

事後学習としては、参加学生が現地演習最終日に学習成果として発表した各チームの学習テーマである社会課題とその解決方法としての既存の取り組みや、自国との差異や移転可能性に関する考察を含め、動画として LMS に提示する。いわゆるケースシナリオとして、学生が相互にそれらの動画を視聴し、フィードバックを行うこととした。それらのフィード

バックも含めてメタバース上に提示し、ケースシナリオ含めワークショップ形式として提示する。

2-3. カウンターパートとの連携

この GRIP プログラムでは、2022 年度はトライアルとしてシンビオシス国際大学(インド)と千葉大学(日本)とで、派遣・受入各 10 人計 20 人の学生交換を実施した。2023 年度はこれにレスター大学(イギリス)を追加した。さらに 2024 年度はモナシュ大学(オーストラリア)が加わり、参加学生人数も最終年度である 2026 年度には派遣・受入各 40 人、計 80 人となる予定としている。

以下、カウンターパートである、各大学との GRIP 開始までの交流の経緯と 2022 年度の調整・連携活動状況について記述する。

2-3-1. シンビオシス国際大学（インド）

2022 年度の振り返りとして、GRIP 推進室メンバーおよび SIU の GRIP 担当者らとで、5 月にオンラインミーティングを実施し、さらに 6 月には grip 推進室教員が SIU に赴き、対面にて 2023 年度実施に向けて検討を行った。2022 年度のトライアルでの実施を振り返り、2022 年度は初年度であり本プログラム採択から学生交換まで 4 ヶ月という非常に短期間での準備であったこともあり、十分な準備期間確保、リアルタイムでのオンラインオリエンテーション、学習目標の明確化、日本での演習のコンパクト化、JASSO や事後学習課題等の提出物の簡略化等の要望が SIU 側から出された。GRIP 推進室より、参加学生の多様化、効率的かつ遠隔での授業を可能とする LMS である Google Classroom へのログインの必須化と学生への支援、学生の体調不良防止としてインドでの演習時における空調設備のある車両使用、SIU から本学学生への単位認定・付与等を要望として提示した。その他、2023 年度の双方の学生交換日程、学習テーマ、緊急時の連絡体制等について検討・確認した。以降は随時、メールにて連絡を取り、調整を行った。

2-3-2. レスター大学（イギリス）

UL においては、2023 年 1 月に本学の GRIP 推進室メンバーが現地に赴き、学生交換実施のための検討を行った。同年 9 月には、GRIP 推進室より実務担当者が現地に赴き、派遣・受入双方について学生交換日程、学習テーマ、演習施設・組織、学生の滞在場所、緊急時の連絡体制、単位認定・付与等について検討した。その他、随時、オンラインミーティングならびにメールでの連絡・調整を実施した。

2-3-3. モナシュ大学（オーストラリア

GRIP プログラムでは、モナシュ大学とは 2024 年度の学生交換実施を予定している。このため 2023 年 3 月には本学より GRIP 推進委員会メンバーが現地に赴き、現地の担当教員

らと学生交換実施の合意の下、うち合わせを行った。2023 年 9 月には本学研究員 1 名を現地コーディネーターとして位置づけ、2023 年 11 月には本学より実務担当者が再度現地に赴き、現地コーディネーターならびにモナシュ大学担当教員らと学生交換期日、学習テーマ等の検討、大学内ならびに学生寮の視察を行った。その後、現地担当教員の異動ならびに担当者変更もあり 2024 年 1 月には、2024 年度の学生交換実施に向け、オンラインミーティングにて改めて担当者、学生交換期日、学習テーマ等に関して確認ならびに検討を行った。2024 年度早々にもオンラインミーティングを実施するなど、2025 年 11 月の同大学から本学への受入、2025 年 2－3 月での本学からの派遣実施を目処として調整を継続している。

2-4. ISL プログラム開発

ISL（Interprofessional Service Learning）は本 GRIP プログラムの中核である。3 つの部分から構成され、オンラインでの事前学習、パートナー大学所在地に渡航・滞在しての現地演習、オンラインでの事後学習となる。本項では主に、現地での演習であるフィールド演習について記述する。

2-4-1. フイールド演習の概要

GRIP プログラムでは渡航先の社会課題に焦点を当てる。参加学生が学習しやすいように教員からテーマを提示する。各国の GRIP プログラム担当教員や部署職員らが GRIP 推進室と検討しつつテーマを決定する。そのテーマに沿って、訪問施設や組織を選定し、組み合わせ、ブリーフィングの時間なども考慮し、スケジューリングする。2023 年度の各国での学習テーマは以下の表の通りである。

表 9　各大学の参加学生の学習テーマと訪問施設・組織

Participants	Partner universities and location of on-site practice	Theme	Areas, organizations, facilities to visit/participate in
Chiba University students	Symbiosis International University (Pune, India)	Support for children and women in difficult circumstances	Village schools, NGOs supporting children and women in need
Chiba University students	University of Leicester (Leicester, UK)	Homelessness Support	Self-help groups, home care facilities, clinic, NPOs supporting people in need,
Symbiosis International University students And University of Leicester students	Chiba University (Chiba and Tokyo, Japan) *Students from the two universities formed three mixed teams. Participating students engaged in a field exercise on one of the three themes as a team.*	1. Homelessness Support	NPOs support people in need, visiting nursing stations, government labor and welfare centers
		2. Disaster preparedness	University hospital (disaster base hospital), home care facility for handicapped, town walking with app
		3. Building Community Social Capital	NGOs providing gathering places for residents, children, etc., exercise classes by residents

現地演習のスケジュール概要

現地到着後、オリエンテーションの後、学生は 5 人/チームを形成する。UL では参加学生は 5 人の 1 チームのみ、学習テーマも一つだが、SIU には 10 人の学生が渡航するため、2 チームを形成する。日本の千葉大学においては、UL 学生 5 人および SIU 学生 10 人の計 15 名より両大学混合の 3 チームを形成する。1 チームあたり 1 テーマとして、テーマを選定し、トピックに焦点化して、チームでの役割分担や情報共有などを行いつつ学習を行う。各チームは数カ所の組織や施設にて活動に参加し、最終日には各グループのテーマについて、学習目標 IPCP、社会課題解決、文化的対応力の 3 つに照らし学習成果を発表する。その時点で、教員や現地学生からのフィードバックを得る。さらに事後学習として、学生は相互に各発表についてフィードバックを行う。

学生交流

SIU、UL そして千葉大学において、GRIP 参加学生が本来の学業に支障の無い程度にバディとなって、常に数人がプログラム活動に同行する。日本では、SIU および IL 学生受入時に、派遣にて同大学を訪問した本学学生が同行する。同行する学生は英語にて、学習課題に関する自国の状況や公共交通機関の利用法等に関する説明や、自由時間には学生同士が自発的に調整を行い共に余暇時間を過ごすなど、学習活動から生活の支援等を行う。このように自国において受入学生の支援を行うことにより、渡航先のみならず自国においても学生交流および共同学習にて自国の社会課題等についても学習する機会となる。

2-5. ISL プログラム　派遣

表　に、派遣について、派遣先、人数、学習テーマ、期間等を示す。

2-5-1. 参加学生の概要

募集・選考の結果、参加学生は看護学部、看護学研究科、医学部、国際教養学部という昨年の参加学生の所属に加え、工学部、教育学部の所属であった。派遣先は学生の希望を優先しつつ、参加学生の学術的専門性が多様となるように配置した。SIU には 10 人、UL には 5 人の計 15 人を派遣した。

2-5-2. プログラム期間

表に示した通りである。最低でも 8 日間の学習日を確保し、派遣先大学や演習施設等の都合により、渡航期間が若干異なっている。

表 10　　2023 年度 学生派遣の概要

渡航先	**千葉大学　→　レスター大学　5名**	**千葉大学　→　シンビオシス国際大学　10名**
渡航期間	2024年2月10日（土）～23日（金）	2024年2月13日（火）～23日（金）
プログラム期間	2024年2月12日（月）～21日（水）8日間 ※平日のみプログラム実施	2024年2月14日（水）～21日（水）8日間
学生の所属・構成（人）	男性1，女性4 医学部　1、工学部(建築1、医工学1)　2 法政経学部　1、　看護学研究科(前)　1	男性3，女性7 工学部(医工学2，都市環境1)　3、国際教養学部　3 教育学部　1、看護学部　2、看護学研究科(前)　1
現地での学習テーマ及び訪問先等	ホームレス支援（ホームレス支援NGO、当事者による自立支援施設）（GPホームレス診療外来等）	困難な状況にある子ども、女性の支援 （スラム街、支援NGO、女性支援施設等、環境保全NGO） 学習成果発表時のトピック グループ1 “NGO's role in improving social problems in India.” グループ2　“Analysis of issues in Indian society and proposal of solutions.”
備考	レスター大学より修了証発行	SIUのSCIEより修了証発行および2単位認定・付与

2-5-3. 学習内容

SIU での学習テーマと活動

SIU ではすでに、SCOPE ： Symbiosis Community Outreach Programme and Extension (SCOPE)という一つの部門として組織、サービスラーニングフィールドやカリキュラムが確立されている（https://siu.edu.in/Health-Facilities.php)。活動のターゲットは、健康課題に関連したものから IT 教育や経済的教育提供など多岐にわたるものである。SIU での GRIP プログラムは SCIE（Symbiosis Center for International Education）が SCOPE と共同して提供する。

SIU に到着した本学学生は、困難な状況にある子どもおよび女性への支援を学習テーマとして 10 人全員が同一のスケジュールで行動するが、前述の通り、2 つのチームとなり、それぞれ異なるトピックにて学習成果をまとめ発表した。この度の 2 つのトピックは、“NGO's role in improving social problems in India.”および“Analysis of issues in Indian society and proposal of solutions.”であった。

SIU での現地演習スケジュールと訪問施設・組織等

スケジュールは図に示した通りである。SIU でのインドの社会構造や NGO の必要性等、そして学習テーマである困難な状況にある子ども達ならびに女性へのエンパワメント等の支援、環境保全等について現地の担当教員による講義の後、スラム街やストリートチルドレンに教育を提供している NGO、女性の支援を行う NGO、環境保全に関する NGO 等を訪問し、活動に参加した。インドでは他の途上国同様に、子どもや女性の支援を含む開発と同時に、環境保全によるサステナビリティの担保も大きな課題であり、インドでの現地演習の特性として、これらを並行して考慮する社会課題解決等が学習課題となった。またヘリテージウオークでは、州政府の歴史的な旧施設や街中の野菜市場、寺院と参拝する人々、近代的な大型ショッピングモール等を訪問し、人々の生活の様子を観察した。

表 11　インド・シンバイオシス国際大学での GRIP スケジュール

SYMBIOSIS INTERNATIONAL (DEEMED UNIVERSITY)

Symbiosis Centre for International Education

GRIP– Study India Program (14 Feb to 22 Feb 2024)

Study India Program	Weekday			Weekend			Weekday		
	14/Feb/24	15/Feb/24	16/Feb/24	17/Feb/24	18/Feb/24	19/Feb/24	20/Feb/24	21/Feb/24	22/Feb/24
	1st Day	2nd Day	3rd Day	4th Day	5th Day	6th Day	7th Day	8th Day	9th Day
	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday	Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday
	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast
AM	Arrival 12:35 AM at Pune Airport (UK 935)	Lecture: Social Structure & need for NGO's in india	Departure for the Visit	Briefing about the visit and Departure for the Visit	Depart for Heritage Walk	Visit to NGO 3 which works for the area of sustainability & Environment preservation	Presentation Preps, time with Faculty to discuss	Presentations & Closing program	Departure 08:45 AM
	Opening Program FRRO Orientation		Visit to SSS/ Community which works for the welfare of Children	Visit to Streevani which works for Women empowerment	Cultural Heritage Walk				
	Welcome Lunch	Lunch	Lunch	Lunch	Lunch	Lunch	Lunch	Farewell Lunch	
PM	Briefing about the Program	Understanding domains –Children in difficult situation –Women empowerment – sustainability & Environment preservation	Debriefing and interaction regarding NGO– 1	Visit to NGO 2/ Community which works for Women empowerment	Freetime for shopping with buddies	Debriefing and interaction regarding NGO– 3	Buddy Activity– Saree draping, henna drawing, etc.	Freetime	
					Depart for campus				
	Dinner		Dinner	Dinner	Dinner	Dinner	Dinner	Dinner	

Please Note: Schedule is subject to change

UL での学習テーマと活動

UL では、現地の本 GRIP プログラム担当教員である IPE(Interprofessional Education)担当の教員らによって、ホームレス支援が学習テーマおよびフィールドとして準備・提供された。本学学生は 5 人 1 チームであり、この 5 人でホームレス支援を課題として取り組んだ。

UL での現地演習スケジュールと訪問施設・組織等

現地での訪問施設・組織およびスケジュールは図の通りである。学生 5 名が 3 つに別れ、それぞれ複数の施設・組織の活動に、1-2 日参加した。レスターでのホームレスの原因の多くが薬物依存であることから、薬物依存からリカバリした当事者による自助・共助組織や、ホームレスや移民等を対象とする公的なクリニックの見学等を実施した。NHS とホームレス支援という趣旨の学習成果発表を行い、現地担当教員らからフィードバックを受けた。

表 12　イギリス・レスター大学での GRIP スケジュール

Chiba Student Exchange Monday 12 February – Wednesday 21 February 2024

Monday 12 February	Tuesday 13 February	Wednesday 14 February	Thursday 15 February	Friday 16 February
9:30am -10:30am Meet with Liz Anderson Room GDC 1.19* All 5 students	9:00am-10:30am Meet with Steve Malcherczyk Room GDC 1.19* 5 students	8:00am-2:00pm Inclusion Health Visit 2 students (Fumika Kudo; Sho Nakano)	9:30am-12noon The Bridge 2 students + 1 student (Fumika Kudo; Sho Nakano; Nanako Nihei)	8:00am-2:00pm Inclusion Health Visit 1 student (Nanako Nihei)
10:30am-11:30am Meet with Dr Andy Ward Room GDC 1.19* All 5 students	12pm-5pm The Centre Project 2 students + 1 student (Fumika Kudo; Sho Nakano; Nanako Nihei) (with Steve)	9:00am-2:00pm No 5 Visit for 2 students + 1 student (Midori Narita; Niina Sugimoto; Nanako Nihei)	2:00pm-3:00pm Meet with Dr Bharathy Kumaravel Room GDC 1.19* All 5 students	9:00am-2:00pm No 5 Visit 2 students (Fumika Kudo; Sho Nakano)
11:30am -12pm Meet with Nicole Room GDC 1.19* All 5 students	12pm-4pm Dear Albert 2 students (with Steve) (Midori Narita; Niina Sugimoto)	5:00pm – 7:00pm Project LIGHT Evening Session with Wayne Henderson No 5 Room 0.37 GDC* All 5 students		12pm-5pm The Centre Project 2 students (Midori Narita; Niina Sugimoto)
6:30pm-8:30pm Welcome Dinner Location Marquis Wellington Pub 139 London Rd, Leicester LE2 1EF All 5 students				
Saturday 17 February	**Sunday 18 February**	**Monday 19 February**	**Tuesday 20 February**	**Wednesday 21 February**
Self-study	Self-study	9:30am-12pm The Bridge 1 student (+ 2 other students) (Fumika Kudo; Sho Nakano; Nanako Nihei)	9:00am-12:00pm No 5 Visit 1 student (+ 2 other students) (Fumika Kudo; Sho Nakano; Nanako Nihei)	Self-study (visit to heritages)
		9:00am-2:00pm No 5 Visit for 2 students (Midori Narita; Niina Sugimoto)	9:30am-12noon The Bridge 2 students (Midori Narita; Niina Sugimoto)	
		3:00pm-5:00pm Public Health Placement All 5 students (TBD)	2:00pm-4:00pm Final Meeting with Academics Liz, Andy, Steve, Bharathy Room GDC 1.19* All 5 students	

Students attend placements based on the following groups:

Purple = 1 student (Healthcare/Medical) Blue = 2 students (Law & Architecture) Green = 2 students (Healthcare/Medical)

2-6. ISL プログラム　受入

受入・プログラム期間、参加学生人数・所属、学習テーマ等は表　に示した通りである。

表13　　2023年度　学生受入の概要

渡航先	**レスター大学　→　千葉大学　5名**	**シンビオシス国際大学　→　千葉大学　10名**
渡航期間	2024年2月28日（水）～3月10日（日）	2024年2月29日（木）～3月9日（土）
プログラム期間	2024年3月1日（金）～3月8日（金）8日間	
学生の所属・構成(人)	男性2, 女性3 医学専攻 3、助産専攻　2	男性3, 女性7 デザイン専攻　3、商学専攻　3、看護学専攻　4
現地での学習テーマ及び訪問先等	1. ホームレス支援（ホームレス支援NPO、訪問看護ステーション、無料診療所、公的施設等） 3. 災害準備（防災アプリでの市街探索、災害拠点病院、DPAT、重度心身障害者施設等） 2. ソーシャルキャピタル創出（地域再生NPO、子ども支援NPO、高齢者による高齢者のための居場所等）	
備考	短期留学プログラム受講生として修了証発行	特別聴講学生として単位認定(2単位)・成績証明書・修了証発行

2-6-1. 参加学生

昨年度のトライアル版では SIU からは看護学部生のみを対象としたが 2023 年度は当初の目的通り SIU の全学から参加学生を募った。その結果、文系も含む 3 つのコース等から計 10 名の学生が参加した。また UL は 2023 年度がトライアルとなるため、IPE 関連学部である医学部ならびに助産学専攻の学生 5 名の参加となった。

2-6-2. 学習期間

プログラム期間はいずれも 2024 年 3 月 1 日から 8 日の 8 日間であった。

2－6－3　学習内容

千葉大学(日本)における学習テーマと活動

2022 年度のトライアル版を基盤として、さらなる学習テーマの明確化および学習の深化を目指し、そして移動等の学習活動の効率化等を勘案し、2023 年度はホームレス支援、災害準備、ソーシャルキャピタル創出の 3 つの学習テーマおよびフィールドとした。各フィールドのスケジュール及び内容は図の通りである。

「ホームレス支援」の現地演習スケジュールと訪問施設・組織等

ホームレス支援のフィールドにおける訪問施設やスケジュールは表の通りである。台東区にあるホームレス支援の NPO を拠点として、近隣にあり、路上生活者や生活困窮者への支援を行っている訪問看護ステーション、そして東京都より委託されて就労及び福祉サービスを提供しているセンターを訪問し、説明を聞くとともに活動に参加した。ホームレスに関連して、山谷と呼ばれる地域の歴史的背景や経緯について解説を受け、食糧を配布するアウトリーチ参加、訪問看護ステーションが提供するデイサービスや無償でのシャワー提供、生活困窮者に特化したホスピスへの訪問看護、ドヤと呼ばれる簡易宿舎の見学、無料診療ク

リニック等の見学を行った。さらにこれらの多機関の連携についても考察した。現地演習最終日には、学習成果として山谷におけるホームレス支援について自国との差異、特にインドでのスラム街、イギリスの薬物依存に依るホームレス等の、原因や対策等の差異について考察し、サービスの移転可能性について発表した。

表 14　日本における「ホームレス支援」フィールドのスケジュールおよび訪問施設等

Date	a.m.	attending	p.m.	attending
Feb 29 Thur			02:25 UL students Arrival @Haneda Move to Chiba 05:00 Check in at Hotel Sunroute Chiba 06:00 Dinner	SGS
March 1 Fri	07:25 SIU students Arrival @Narita Move to Hotel	SGS	12:00 Welcome lunch@ GRIP room(#184, School of Nursing, Inohana Campus) 01:30 Orientation 02:00 Respective field orientation, team building, activity planning, briefing for next day activity 03:00 self-study	All faculty SGS
March 2 Sat	Heritage Walk Buddy Activity	buddies	Lunch free time	buddies
March 3 Sun	Heritage Walk Buddy Activity	buddies	Lunch free time	buddies
March 4 Mon	09:00-10:00 briefing@GRIP room 10:00- Move to Minamisenju St. in Tokyo	Nosaki SGS buddy	Lunch 01:00- 04:00 Visit ①**Sanyukai** orientation, facility tour, talking with users, debriefing Free time	Nosaki SGS buddy
March 5 Tue	08:30 meeting @hotel lobby briefing 09:00- Move to Minamisenju St. in Tokyo 11:00- 12:00 facility tour ②**Johoku Rodo Fukushi(Labor and welfare) Center**	Iida SGS buddy	Lunch 01:30- 04:00 Visit ③ **Visiting Nursing Station Cosmos** lecture, joining the visit to clients, debriefing Move to Chiba, Free time	Iida Nosaki SGS buddy
March 6 Wed	08:30 meeting @hotel lobby briefing. 09:30- Move to Minamisenju St. in Tokyo	Nosaki SGS buddy	Lunch 12:45- 03:00 ①**Sanyukai** Join the outreach activity 03:00- 03:30 debriefing & briefing @Sanyukai Move to Chiba, Free time	Nosaki SGS buddy
March 7 Thur	08:00 meeting @hotel lobby 08:20- Move to Minamisenju in Tokyo 10:00-12:00 ①**Sanyukai** observe Sanyu free Clinic	Nosaki SGS buddy	lunch Move to Chiba, Inohana Campus 03:00- 04:30 gather@GRIP room debriefing, preparation for presentation 04:30- Free time	Nosaki SGS buddy
March 8 Fri	09:00 gather@GRIP room preparation for final presentation 10:00-12:00 @lecture room #2 final presentation uploading the presentation video certification, closing	All faculty SGS	farewell lunch@ lecture room#2 tea ceremony, YUKATA wearing 03:00 end	Faculty SGS
March 9 Sat	Hotel check-out 11:10 SIU Students Departure from Narita airport	SGS	9:55 LU Students Departure from Haneda airport	SGS

① **Sanyukai**：NPO for homelessness support
② **Johoku Rodo Fukushi (Labor and welfare) center** commissioned by the Tokyo Metropolitan government
③ **Visiting Nursing Station Cosmos**

「災害準備」の現地演習スケジュールと訪問施設・組織等

災害準備についてもより多角的かつ包括的に学習できることを目指し、フィールドをスケジューリングした。表に示した通りである。昨年度同様に、住民の立場としてみまもりあいアプリを使っての街歩きに加え、手段としてのネットワーク形成法であるみまもりあいアプリ自体について解説を加えた。さらに、医療機関の役割・機能として、災害拠点病院としての大学病院の設備・昨日や DPAT 災害派遣精神医療チームの活動等についても説明を

受けた。さらには心身障害を有する人々のケア付き入居施設において停電時の対策等につき見学を行い、千葉市の緊急時の対応計画等についても解説を受けた。これらの立場や施策の包括的な連携についても考察した。最終日の学習成果発表会においては自国との差異や、自国に導入したい停電時対策などが言及された。

表 15　日本における「災害準備」フィールドのスケジュールおよび訪問施設等

Date	a.m.	attending	p.m.	attending
Feb 29 Thur			02:25 UL students Arrival @Haneda Move to Chiba 05:00 Check in at Hotel Sunroute Chiba 06:00 Dinner	SGS
March 1 Fri	07:25 SIU students Arrival @Narita Move to Hotel	SGS	12:00 Welcome lunch@ GRIP room(#184,School of Nursing, Inohana Campus) 01:30 Opening, Orientation 02:00 Respective field orientation, team building, activity planning, briefing for next day activity ① **Mimamoriai App** 03:00 self-study	All faculty SGS
March 2 Sat	Heritage Walk Buddy Activity	buddies	Lunch free time	buddies
March 3 Sun	Heritage Walk Buddy Activity	buddies	Lunch free time	buddies
March 4 Mon	09:00-10:00 briefing@GRIP room 10:30- Move to the Sumida satellite campus in Tokyo	Ishibashi Iino SGS buddy	Lunch 01:00- 03:00 Visit and walk around ② the **Sumida satellite campus** orientation, facility tour, talking with users, debriefing Free time	Ishibashi Kinoshita SGS buddy
March 5 Tue	09:00- 09:40 Briefing@GRIP room 09:40- Move to Chiba Univ. Hospital 10:00- 12:00 ③ lecture about the DPAT, **Chiba Univ. Hospital**	Iino Nosaki SGS buddy	Lunch 02:00- 04:00 ③ lecture & tour about the "Disaster Base Hospital", **Chiba Univ. Hospital** 04:30-05:00 briefing @GRIP room	Iino SGS buddy
March 6 Wed	10:00-12:00 Visit to ④**Libertas** Lecture about Individual evacuation plans for persons with severe physical and mental handicaps & tour	Iino Iida SGS buddy	Lunch 01:00- 03:30 debriefing @GRIP room Free time	Iino Iida SGS buddy
March 7 Thur	10:00- ⑤**AEON Mall Makuhari Shin-Toshin** Briefing, walking with Mimamoriai App for preparation for a mass casualty	Iino SGS buddy	Lunch 02:00 – Move to Inohana Campus 03:00- 04:30 gather@GRIP room debriefing, preparation for presentation 04:30- Free time	Iino Iwase SGS buddy
March 8 Fri	09:00 gather@GRIP room preparation for final presentation 10:00-12:00 @lecture room #2 final presentation uploading the presentation video, closing	All faculty SGS	farewell lunch@ lecture room#2 tea ceremony, YUKATA wearing 03:00 end	Faculty SGS
March 9 Sat	Hotel check-out 11:10 SIU Students Departure from Narita	SGS	9:55 UL Students Departure from Haneda	SGS

① Mimaoriai App　② Sumida satellite campus of Chiba University　③ Chiba University Hospital
④ Libertas (Workstation, Chuo-ku Consultation Support Center)　⑤ AEON Mall Makuhari Shin-Toshin

「ソーシャルキャピタル創出」の現地演習スケジュールと訪問施設・組織等

昨年度のトライアル版においてもソーシャルキャピタル創出はテーマとして扱った。2023 年度は対象の年代の幅を広げ、子どもを対象とする組織や全年代を対象とする活動にも訪問・参加した。また昨年度同様に、住民自身による居場所作りの場にも訪問し、活動に参加した。スケジュールや訪問先等は表の通りである。

最終日の学習成果発表会では、少子高齢化という日本の状況を踏まえた考察や、自国との差異、移転可能性について言及された。

表 16　日本における「ソーシャルキャピタル創出」フィールドのスケジュールおよび訪問施設

Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	Sun
		February 28th	February 29th	March 1st	March 2	March 3rd
		LU departure		7:25 am SIU Arrival at Narita Airport check-in	Early lunch by the meeing time **11:50** **Meet up with Ms. Kono at the Hotel Lobby**	(self study)
			2:25 pm LU Arrival at Haneda Airport → check-in SIU departure	**12:00** @Inohana **Welcome lunch** **1:30 pm** **Orientation** (All → by theme) till 3:00 pm	12:25 Meet up with Prof. Amai @JR Ichikawa St. 13:00 **①Ichikawa Terakoya** ・Explanation ・Activity participation (play with kids) ・Q&A and discussion till 4:00 pm	(self study)
March 4th	March 5th	March 6th	March 7th	March 8th	March 9	
9:30 @Inohana Debriefing and prebriefing Lunch @ Inohana 12:10 Leave Inohana campus	9:30 @Hotel Lobby Debriefing and prebriefing 10:40 Leave the hotel	9:30 @Inohana? Hotel Lobby? Debriefing and prebriefing 10:20 Leave Inohana campus OR hotel	9:30 @Inohana Debriefing and prebriefing Lunch @ Inohana 12:20 Leave Inohana campus	9:00 @Inohana Preparation for the presentations **10:00** **Final presentation**	check out 11:10 SIU Departure from Narita Airport	
13:00 **② Chiba Regional Revitalization Research (Future Tree)** ・Explanation ・Activity participation (play with kids) ・Q&A and discussion till 4:30	12:00 **③Neighborhood Care** ・Lunch ・Explanation ・Visit nursing accompaniment (2 cases) ・User interaction ・Lecture by Mr. Yoshie, Q&A, and discussion till 4:00 pm	12:00 **③Neighborhood Care** ・Lunch (bring your own) ・Visit nursing accompaniment (currently being arranged) ・Interaction with local users ・Q&A and discussion till 4:00 pm	13:00 **④Higashi Chiba district** ・Explanation ・Participation in Engawa Salon ・Q&A and discussion till 4:00 pm Back to hotel ・Debriefing and preparation for the presentation @ hotel	**12:00** **Farewell lunch** **13:00** **Cultural experience & Wrap-up** (final presentation video editing, JASSO document confirmation, etc.) till 3:00 pm	21:55 UL Departure from Haneda Airport	

等

3. 事業評価

3-1. 事業評価の観点と方法

3-1-1.事業評価の観点

本事業は主に 2 つの観点で評価される。1 つめの観点はプロセス評価であり、学習プログラムの開発、派遣/受け入れの時期や人数について目標値を達成できたか、また、事業の遂行過程や現場での運営が円滑であったかを評価するものである。2 つめの観点は学習成果の評価であり、GRIP を通して育成を目指す「どの国、どの地域であっても、自国でも他の国でも健康関連の課題に他の専門職とともに取り組み、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤として、現場での最適解を導き出すことができる自律した組織人」が含有する 3 つの能力：①連携実践能力、②問題解決能力、③Cultural Competence がプログラムを通してどの程度、またどのように発達したかを評価するものである。

3-1-2. プロセス評価の方法

プロセス評価と学習成果の評価は共に、定量的評価と定性的評価を併せて総合的に実施した。プロセス評価は、事業計画と実績の数値的な比較による定量的評価のほか、今年度の参加学生と演習にご協力いただいた各フィールドの担当者からのヒアリングに基づいて、次年度以降踏襲すべき点と改善すべき点を定性的に収集した。 ヒアリングは全てのプログラム終了後にオンラインで担当者へ依頼し、任意でオンラインフォームを通して回答を得た。

3-1-3. 学習成果の評価方法

学習成果の評価のためには，GRIP 参加前後に 3 つの能力を測定し統計的にその変化を検討する定量的評価と、参加学生のワークシートの記入内容（学習目標の立案、並びに、学習目標に照らし合わせたリフレクション）に基づく定量的評価を実施した。 定量的評価の実施時期は、千葉大学およびシンビオシス国際大学の学生ともに、事前学習開始前（2 月）と最終課題終了後（3 月）である。回答は任意であり、Google Forms と BEVI※を使用してオンラインで回答依頼を送り、プログラム評価を目的とした測定であることや回答の有無や内容が成績に影響しないこと等の説明事項を読んだ上で「同意し回答を始める」を選択した学生のみが回答に進んだ（資料５）。定性的評価のため参照したワークシートは、学生が渡航を伴う現地演習の初日に学習目標を，最終日にリフレクションを記入したモノであった。以上のプログラム評価は千葉大学看護学研究科の倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 NR4-109)。学生に提示した説明事項や質問項目等、詳細は資料 5 の研究計画書の付帯資料を参照されたい。

※BEVI: The Beliefs, Events, and Values Inventory の略称であり、ライセンスを得た大学のみ

が実施できる独自のオンラインプラットフォームを用いた信念や価値観の測定・分析ツール。

3-2. プロセス評価

3-2-1. 目標値の達成状況

「大学の国際展開力強化事業」の申請書に則り、2023 年度の数値目標は提携校数 2 校、派遣学生数 15 名、受入学生数 15 名、派遣と受入の日数はそれぞれ 10 日程度であった。これらの目標に対する実績は、提携校数 2 校（シンビオシス国際大学、レスター大学)、派遣および受入学生数は 10 名ずつで計 20 名、それぞれが 8 日間の現地演習を含む 10 日程度の渡航日程でプログラム実施を完了し、数値目標を達成したと言える。

学習のプロセスとして重要である現地演習の事前事後学習をオンラインで行う計画についても、Zoom を用いて 3 カ国（日本、インド、イギリス）の学生が合同で集うオリエンテーションや、Google Classroom でのオンデマンド学習を通して機能的に実施できた。特にメタバース（oVice）を学習のプラットフォームとして利用した点には本学の他の留学プログラムにはない独自性が表れている。次年度以降は、事前学習における JV-Campus の更なる活用を目指している。

また、GRIP プログラムの特徴のひとつは学部や研究科等の専門性、並びに学部生から博士後期課程の学生まで学年を問わないインタープロフェッショナルなチームで課題に取り組む点である。今年度は、千葉大学では看護学部、看護学研究科（博士前期課程)、医学部、ならびに非医療系である国際教養学部、教育学部、工学部の学部生と大学院生が混在したチームを形成し、通常の授業では経験することがない編成でのプログラム参加が叶った。一方、シンビオシス国際大学からは、今年度は看護、デザイン、Arts and commerce 専攻の学生が参加し、チームメンバーの多様性という点で昨年度よりもプログラムの趣旨に合致する編成となった。レスター大学は初年度である今年は医学系学部に絞り、医学専攻の学生と助産専攻の学生を受入れた。次年度は、数値目標（提携校数 3 校、派遣学生数 20 名、受入学生数 20 名）の達成を目指すと共に、学生の多様性を拡大し、よりプログラムの特徴を活かした学習経験を図る。

3-2-2. 協定校およびフィールドからの評価

シンビオシス国際大学、レスター大学、並びに、9 のフィールドのうち 3 組織/施設の連絡担当者より、今年度のトライアル実施までの準備および当日の運営について、良かった点と改善すべき点のフィードバックを得た。得られた回答は以下の通りである。一部、組織/施設が特定されないよう表現を加工した。

良かった点

- オリエンテーションで体験でまち歩きをする前に、(災害マップ)アプリの操作方法をお伝えすることが出来たこと。［フィールド］
- 昨年度と比較するとインドに加えて英国からも来訪があり 3 カ国間の意見交換ができたことができた。見学に終始するのではなくディスカッションの時間を多く持てた。［演習サイト］
- 日本（地域）の取り組みを留学生に紹介できたこと。また、留学生（の視点）から日本の取り組みに対する質問や意見がもらえたこと。[フィールド]
- インドでは実際に地域に住む方から直接話を聞くことが出来た。実際の声を聞くことで、インドという異国の地での生活の実態を少しではあるが知ることが出来たように感じる。また、全ての場所で歓迎していただき、快くインタビューに答えていただいた。そこから学んだことは非常に多かった。[千葉大学生]
- 充実したスケジュールかつ土日は旅行など観光もできた点。期間もちょうどよかった。［千葉大学生］
- 質問に対して真摯に素早く反応していただけた点。［千葉大学生］
- As part of the social capital team, I was able to get a real feel for Japanese culture and was able to immerse myself in it. （社会資本チームの一員として、私は日本文化を肌で感じることができ、その中に没頭することができました。）[留学生]

改善できる点

- GRIP プログラムをよく理解できておりませんのでコメントは差し控えます。逆に言えば、GRIP プログラムをもっと理解したうえで参加できるとより効果的だったかもしれません。[フィールド]
- 安全に過ごすためには仕方がないのかもしれないが、インドでの食事や休日の過ごし方まで全てが決められており自由が少なかった。キャンパスの位置的に難しいかもしれないが、もう少しインドを「探検する」経験をしたかった。［千葉大生］
- 日本でのプログラムの充実度が低いように感じた。特にここから何を学ぶのかということが明らかにされていなかったり、専門性の高い方からの話がなかったり、ただ歩くだけの時間が長かったりすることは改善が必要と感じた。インドではこのプログラムに参加するための選考が難しいと聞いた。プログラムから多くのことを学んでもらうためにも、フィールドワークの訪れる場所やその場所での説明をする人の見直しは必要であると感じた。［千葉大生］
- インドでは地域に住む人や NGO で働か人から話を聞くことで学んだことが多かった。そのため日本に来た学生にもそのような機会をもっと提供してあげて欲しい。何日間かあるフィールドワークの中で、そこで働く人とディスカッションできた日が 1 番いい日だったと言っていた。もっと人から学ぶ機会を提供した方がいいプログラムになると感じた。［千葉大生］
- レスターの学生との交流が夕食 1 回しかなかったのでもう少し現地で交流したかっ

た。内容や講義など医療系にとても偏っていて、非医療系学生が難しそうな場面があった。また病院見学や講義の際は学生 5 人とも医療系学生と認識されている部分があった。［千葉大生］

- せっかく色々な学生と共に渡航できたので、イギリスにて他分野の先生とお話しできる機会があると良いと思いました。イギリスの先生方は皆さん医療系の学生向けに話されている感じがしました。また日本でホームレスについての講義やオフラインでの顔合わせが少しあってもいいなと思いました。[千葉大生]
- wish we had more time as it was an amazing experience that went so quickly! （もっと時間があれば良かった。プログラムは本当に素晴らしい経験で、時間があっという間に過ぎてしまった。）[留学生]

昨年度に引き続き、プロセス評価としては今年度の数値目標を全て達成し、メタバースの利用やフィールドにおける学習プログラムも概ね計画通り達成できたと言える。複数の国からの学生が参加することにより、多種多様な立場から意見交換ができた点を評価した意見が見られた。その一方で、改善を検討すべき点としてイギリスでの現地交流など学生との交流が比較的少なくなってしまったグループでは、より交流できる機会を望む声があがった。また、多職種連携教育プログラムとして非医療系学部からの参加を募っているにも関わらず、医療系学生と非医療系学生を分けられてしまっているという学生の意見も見られた。この点は、このプログラムを運営していく中で、フィールドサイトの受け入れ先に改めて、医療現場であっても非医療職以外の視点も考慮に入れた多職種連携教育であることを、フィールドサイトと準備段階で念入りにすり合わせていく必要があると考える。引き続き、次年度以降も数値的な目標達成とより円滑で学習効果の高いプログラム運営のために検討・検証・改善を続けていく。

3-3. 学習成果の評価

昨年度より連携実践能力および問題解決能力に追加して新たに本年度より Cultural Competency に関する項目を追加している。千葉大生 11 名、レスター大学生 3 名とシンビオシス国際大学生 4 名の計 18 名（男性 4 名、女性 14 名）から、BEVI には千葉大生 7 名とシンビオシス国際大学生 7 名の計 14 名（男性 3 名、女性 11 名）から事前事後 2 時点揃った回答を得た。

3-3-1. 連携実践能力

連携実践能力は、King et al. (2016)による Interprofessional Socialization and Valuing Scale (ISVS-21)※1 を用いて測定した（例：I have gained an enhanced awareness of roles of other professionals on a team.）。21 項目 1 次元から成り、0（全くあてはまらない）から 6（非常

によくあてはまる）の 7 件法で測定する尺度である※2。本尺度の日本語版は未発表であることと、プログラムの特性上千葉大学の学生は一定の英語能力により選抜されていることから、日印の学生共に英語で項目を表示し回答を求めた。

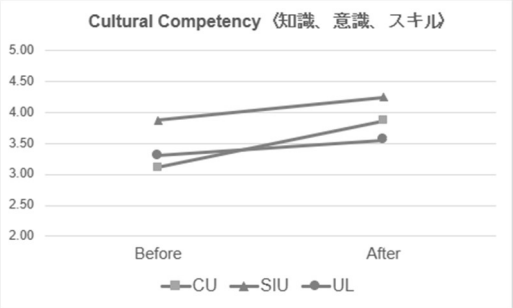
事前事後測定の結果

本尺度の取りうる値は 0〜7 である。全体平均は事前 4.39（SD＝.55）、事後 5.16（SD＝.28）であり、プログラム全体として事前より事後の方が自己評価が見られた。大学毎に値を見ると、千葉大生においては事前 3.64（SD＝.81）、事後 4.77（SD＝.61）、シンビオシス国際大学生では事前 4.92 (SD＝.49)、事後 5.39 (SD＝.41)、レスター大生では事前 4.62（SD ＝ .88)、事後 5.33(SD=.44)となった。全ての大学において、数値の上昇が確認された。プログラム開始前には千葉大生が他 2 大学生より低い値となっていたが、千葉大生の自己評価の上昇により、プログラム後にはこの差は縮まった。

3-3-2. Cultural Competency 文化的能力（知識・意識・スキル）

Cultural Competency とは文化的能力と訳されており、ここでは 自分とは異なる民族や集団の文化を理解し、効果的に交流したり文化を考慮した医療やケアを提供したりする能力と捉える。 Domenech et al. (2022) による Development of the awareness, skills, knowledge: General (ASK-G) scale を用いて測定した。これは信頼性と妥当性が確保された比較的新しい尺度であり、2022 年度のトライアルプログラムの研究結果から GRIP が発達を図る Cultural competency の 3 側面（知識・意識・スキル）をより明瞭に測定することが必要と考えられたために追加された。いずれも著作権侵害の恐れがない。また、英語力による選別を突破した学生が参加することと全ての学習活動を英語で実施するという GRIP プログラムの特性上、尺度への回答も基本的には英語で実施予定であるが、妥当性と信頼性が確認された日本語版が開発されていることから、回答者の負担軽減のため日本語による回答も選択可能とした。

事前事後測定の結果



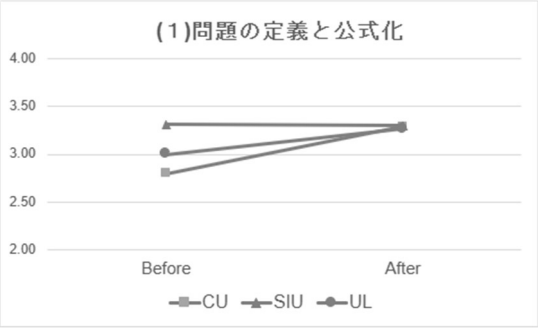
Cultural Competency(知識、意識、スキル)の取りうる値の範囲は 0〜5 である。その尺度は確かな信頼性を持つ 4 つの要因から測定される。それは「自己への気づき」、「他者への気づき」、「主体的な能力開発」、「知識」等の 4 項目で測定される。 全体平均は事前 3.43（SD = .33)、事後 3.87（SD = .28）となった。そのうち千葉大生においては事前 3.12（SD = 1.21)、事後 3.87（SD = .94）と上昇しており、シンビオシス国際大生においては事前 3.88（SD = .81)、事後 4.25(SD=.62）、レスター大学では事前 3.31（SD = 1.16)、事後 3.56(SD=1.16)となった。全ての学校で上昇がみられたが、特に千葉大生の変化が比較的大きくなった。

3-3-3. 問題解決能力

題解決能力は、昨年に引き続き D' Zurilla et al. (1998)による.Social Problem-Solving Inventory-Revised (SPSI-R)、並びにその日本語版である佐藤ほか.(2006)を用いて測定した。20 項目 4 次元から成り、0（全くあてはまらない）から 4（大変よくあてはまる）の 4 件法で測定する尺度である。 (1)問題の定義と公式化、 (2)さまざまな解決法の案出、(3)意志決定、 (4)解決法の実行と検証の各次元は 5 項目ずつの平均値で算出した。本年度より、GRIP を通しての発達および変化が期待される側面として、合理的問題解決に加えて、ポジティブな問題志向、ネガティブな問題志向の 2 側面を加えて測定することとした。

事前事後測定の結果

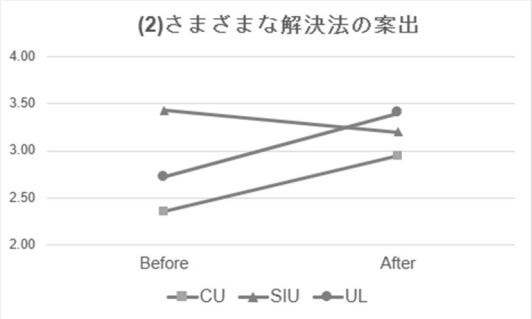
(1)問題の定義と公式化



SPSI-R の取りうる値の範囲は 0〜4 である。1 つめのサブスケールである「問題の定義と公式化」は、「解決すべき問題を抱えている時は、状況を分析し、どのような障害物が自分の望みの達成を妨げているのかを明らかにしようとする」や「問題を解決しようとする前に、自分の達成したい具体的な目標を設定する」等の 5 項目で測定される。

全体平均は事前 3.04（SD = .21)、事後 3.29（SD = .01)。そのうち千葉大生においては事前 2.80（SD = .14)、事後 3.29（SD = .25)、シンビオシス国際大生においては事前 3.00（SD = .31)、事後 3.27（SD = .10)、レスター大学では事前 3.31（SD = .33)、事後 3.56(SD=.25)となった。

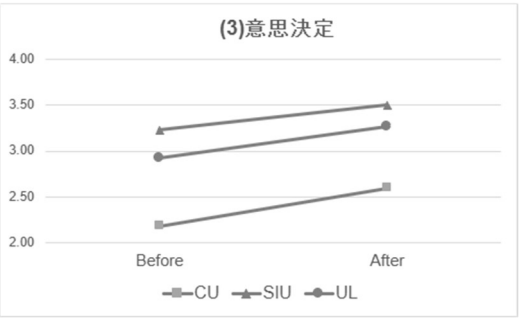
(2)さまざまな解決法の案出



SPSI-R の 2 つめのサブスケールである「さまざまな解決法の案出」は、「問題を解決しようとしている時は、しばしば異なった解決策を考え、それらのいくつかを組み合わせて良い解決策を生み出そうとする」や「問題を解決しようと試みる時は、できるだけ多くの違った角度から問題に取り組む」等の 5 項目で測定される。

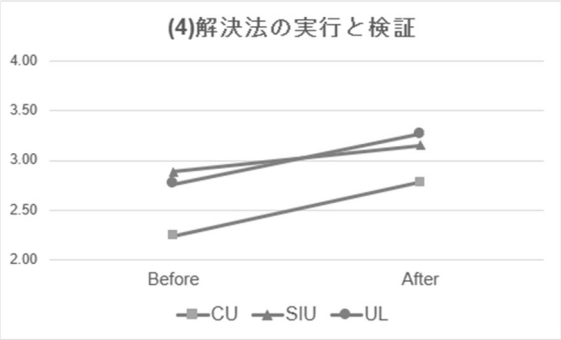
全体平均は事前 2.84（SD = .44)、事後 3.18（SD = .19）であり、全体として上昇がみられた。そのうち千葉大生は事前 2.36（SD = .49)、事後 2.95（SD = .34)。シンビオシス国際大生は事前 3.43（SD = .16)、事後 3.20（SD = .10)、レスター大生では事前 2.72（SD = .60、事後 3.40(SD=.25)となった。千葉大生、レスター大生ではプログラム参加前後で上昇が見られ、シンビオシス国際大生には変化が見られなかった。

(3)意思決定



SPSI-R の 3 つめのサブスケールである「意思決定」は、「決断する時は、それぞれの選択肢の直後の結果と、長い目で見た結果の、両方を考慮する」や「決断する時は、選択肢を判断し、比較するために体系化された方法を用いる」等の 5 項目で測定される。　このサブスケールの全体平均は事前 2.78（SD = .44)、事後 3.12（SD = .38）であり全体としては上昇がみられた。千葉大生においては事前 2.19（SD = .34)、事後 2.64(SD = .23)と上昇したものの、シンビオシス国際大生においては事前 3.23(SD = .48)、事後 3.50（SD = .16）レスター大生では事前 2.92（SD = .27)、事後 3.27(SD=.25)となった。

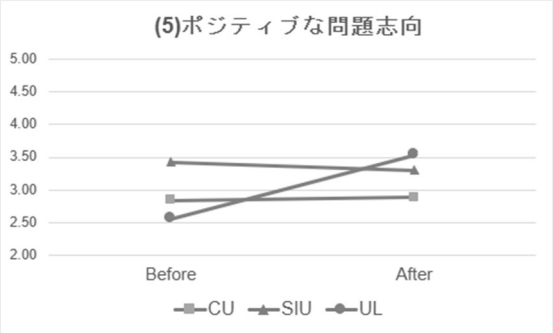
(4)解決法の実行と検証



SPSI-R の 4 つめのサブスケールである「解決法の実行と検証」は、「解決策を実行した後で、何が良くて何が悪かったのか分析する」や「問題に対する解決策を実行した後で、状況がどのくらい良くなっているかを、できるだけ注意深く評価しようとする」等の 5 項目で測定される。

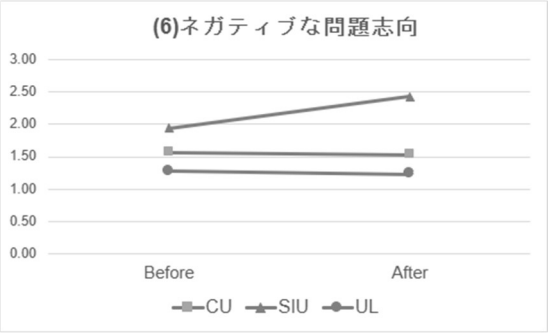
全体平均は事前 2.63（SD = .28）、事後 3.07（SD = .21）。そのうち千葉大生は事前 2.24（SD = .21）、事後 2.78（SD = .11）、シンビオシス国際大生は事前 2.89（SD = .42）、事後 3.15（SD = .20）、レスター大生では事前 2.76（SD = .41）、事後 3.27(SD=.33)となった。 であった。どのグループも上昇が見られ、特に千葉大生、レスター大生では 0.5 以上の上昇が確認された。

(5)ポジティブな問題思考



SPSI-R の 5 つめのサブスケールである「ポジティブな問題思考」は「問題を解決可　能であると判断する」や「自分には問題を解決する能力があると考える」などといった 、問題に対する建設的・積極的な構え を測定する下位尺度であり、5 項目からなる。全体平均は事前 2.94（SD = .21）、事後 3.24（SD = .01）。そのうち千葉大生は事前 2.84（SD = .12）、事後 2.89（SD = .27）、シンビオシス国際大生は事前 3.43（SD = .13）、事後 3.30（SD = .23）、レスター大生では事前 2.56（SD = .53）、事後 3.53(SD=.70)となった。 全体平均ではわずかに上昇となったが、その内訳は千葉大生とシンビオシス国際大生は大きく変わらず、レスター大生の上昇が全体をけん引する形となった。

(6)ネガティブな問題思考



6 つめのサブスケールである「ネガティブな問題思考」では、「問題を脅威的であるととらえる」や「自分には問題をうまく解決することができないと考える」などといった 、問題に対す る否定的･消極的な構えを測定している。10 項目から構成されている。全体平均は事前 1.60(SD = .27)、事後 1.73(SD = .51)。そのうち千葉大生は事前 1.57（SD = .32)、事後 1.54（SD = .27)、シンビオシス国際大生は事前 1.94（SD = .31)、事後 2.43（SD = .23)、レスター大生では事前 1.28（SD = .58)、事後 1.23(SD=.70)となった。千葉大生とレスター大生では大きく変化は見られなかったが、シンビオシス国際大生では大きく上昇する形となった。

3-3-4 . BEVI を使用した Cultural Competency を含む信念および世界観

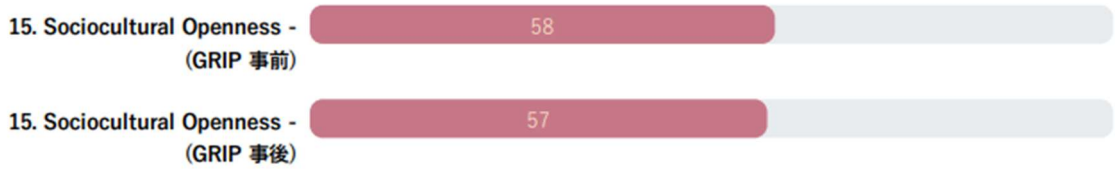
昨年度に引き続き BEVI（Wandschneider et al., 2015）を使用して Cultural Competency を含む信念および世界観に関する分析を行った。BEVI は、留学プログラムの成果を定量的および客観的な測定・検証を目的として開発されたツールである。日本を含む 140 カ国・8 万件のデータを基に、異文化受容性をはじめとする個人の様々な信念･価値（Belief and Value）を 185 の項目から統計的に算出する。留学プログラムの評価には、社会的オープン性（Sociocultural Openness）並びに世界との共鳴 （Global Resonance）が頻用される。それぞれの測定項目は非公開である。取りうる値は 0 から 100 であり、世界平均を 50 として相対的に数値を解釈する必要がある。 一般的には各グループのプログラム前と後に採取したデータを比較し、それをもとに分析を行うが、2023 年度では事前と事後両方に回答した参加者がごく少数であったため、千葉大生以外の国籍別のレポートを BEVI 分析にて抽出することができなかった。参加者のうち千葉大生は事前の回答が一定数得ることができたため、グループの特性として分析を行っていく。ここでは当プログラムに特に関連性のある社会文化的オープン性と世界との共鳴についてプログラム前後の変化や世界平均と比較していく。

事前事後測定の結果

(1) 社会文化的オープン性（Sociocultural Openness）

社会文化的オープン性とは、文化、経済、教育 環境、ジェンダー、国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的でオープンである程度を表すものである。測定項目は非公開であるが、「私たちは、自分たちと異なる文化を理解しようとすべきだ」等の項目が含まれるとされている。

以下のグラフは、千葉大生の BEVI 結果のプログラム前後比較を表している。BEVI の値は統計的に有意な変化であるかどうかの検定を行うことができないが、開発者によると 5 以上の増減が見られた場合に明確な変化があったと見なすのが一般的である。千葉大生平均は事前 58、事後 57 でほぼ変化がなかった。世界の平均が 50 となっているため、世界平均と比較するとわずかに高い数値となる。つまり、参加した千葉大生は他国の社会文化に対しては、ほぼ世界の平均と同じか、やや進歩的でオープンとなることがうかがえる。



2）世界との共鳴（Global Resonance）

世界との共鳴とは、さまざまな個人、集団、言語、 文化について学ぶことや出会うことを努力している程度や、グローバル社会への関与を望んでいる程度を表すものである。「世界の出来事について多くの知識を持っていることは大切だ」等の項目から測定される。

千葉大生の平均は事前 67、事後 57 であった。プログラム前には 67 という世界平均に比べて高い数値でプログラムに臨んでいるが、プログラム後には 67 から 10 減少していることがわかる。ここから考えられるもこととして、異なる文化を学ぶことへの努力や関与が低下したということは、努力が足りてないと感じた場合や、関与関心が低下したという可能性が考えられる。

以上より、学習成果の評価としては、連携実践能力と問題解決能力が統計的に上昇した点は、当プログラムの狙いとなる活動が行えていると評価できる。全体的に数値が上昇している中で、「ネガティブな問題思考」におけるシンビオシス国際大学の点数が他大学と比べて上昇しているという点である。つまり、プログラムを始める前と後では、社会的な課題に取り組むにあたり、ネガティブな問題思考が強くなる傾向にあったと言える。この点をさらに個人的な回答レベルまで掘り下げてみると、回答が得られたシンビオシス国際大学生 4 人のうち、3 人の点数が上昇していることが分かった。また、BEVI での千葉大生の分析結果

でも世界との共鳴という項目では、プログラム前後で減少するという近しい事象が観察されている。これらの結果から推測できることとして、参加者自身が思い描いていた社会課題や多文化への適応能力を実際に体験したことで、想像と現実のギャップがこの結果として現れた可能性がある。この変化が何に起因しているかは、非常に興味深いところであり、今後のプログラムを運営における文化的な側面や考え方や感じ方の違いを分析する上での大きな足掛かりとなるだろう。プログラムを通して、学生たちの考え方にどのような変化をもたらしたかをタイムリーなインタビュー調査などで掘り下げることができれば、より精度の高いプログラムの改善に繋がる。

今回の調査では回答者がシンビオシス国際大学生は 4 人と少なく、一般化できるほどの結果が得られていないのは考慮しておく必要がある。事前と事後の両方を回答した学生は千葉大生は 73.3%、シンビオシス国際大学生は 40%、レスター大生が 60%となる。母数が少ないことによる一般化が難しくなる点を避けるため、回答率を上昇させるという課題は引き続き検討していく必要がある。特に調査のための質問数が合計で約 70 問と多くなることは、学生にとって負担となってしまうことも予想できることから、プログラム内でも回答する時間を十分に設けることや、質問項目について不明点などがすぐ聞けるように大学スタッフが近くにいる状態で質問調査を実施するなどといった工夫を検討していく必要がある。

3-4 外部評価

3-4-1. GRIP 外部評価委員会の概要

外部有識者から評価を受けプログラムの質の向上を図るため、GRIP 推進委員会の規定を整備し GRIP 外部評価委員会を置くことを定めている。GRIP 外部評価委員会は、日本、並びにアメリカ等の国外の有識者を委員とし、年に 1 回開催する。2023 年度はカタールと南アフリカより海外における IPE の有識者として新たに 2 人の外部評価委員を招待し、より多様性のある意見を取り入れることができた。一年間のプログラム運営のプロセスおよび学習成果を、本年次報告としてだけでなく活動実績や今後の計画を資料としてまとめ、客観的に本プログラムを評価していただき、次年度以降のプログラム改善の基盤とする。

2023 年度の外部評価委員会は、2023 年 6月にオンライン会議にて日本、アメリカ、イギリス、カタール、南アフリカを繋ぎ実施された。それぞれ、異文化感受性、国際交流プログラムの評価、地域創生に精通した 6 名の外部評価委員より、プログラムの目的や問題解決に取り組む際の各国の社会システムの捉え方等についての活発な議論が交わされた。

3-4-2. 評価方法

GRIP 外部評価委員会による評価は、年間のプログラム運営プロセスと学習成果を包括的に検討することを目的としている。評価の具体的な方法は以下の通りである。

①外部評価委員会資料の準備

・年次報告書

・活動実績のまとめ

・フィールドワーク先や学生からのフィードバック

・今後の計画

②評価委員会の実施

日時：2023 年 6 月（日本語・英語で各 1 回）

形式：Zoom によるオンライン会議

評価委員：6 名の専門家（異文化感受性、国際交流プログラム評価、地域創生に精通）

評価委員出身国：日本、アメリカ、イギリス、カタール、南アフリカ

③評価プロセス

事前資料の送付：評価委員に上記の評価資料を事前に送付

活動報告：評価委員会時に資料を基に活動報告を実施

意見交換：プログラムの運営方法、評価方法、研究活動、今後の計画について意見交換を実施

アドバイス：評価委員からの改善提案や助言を収集

3-4-3. 評価結果

評価結果は、外部評価委員会において得られた意見やアドバイス、および委員会後に提出された最終評価票をまとめたものである。得られた結果は、プログラムの強み、課題と改善点、そして全体的な進捗状況の評価として下記にまとめている。以下、各項目の詳細を記す。

①プログラムの強み

外部評価委員会では、GRIP プログラムの以下の点が強みとして挙げられた。

- 学生交換プログラムの成功
  レスター大学と千葉大学間で実施された学生交換が成功を収め、参加者から臨床経験と異文化体験に関する肯定的なフィードバックが得られている。この交流は学生の専門的スキルと異文化理解を深める重要な機会となっている。
- 学際的なアプローチ
  公衆衛生やホームレス問題など、多様な分野を含む学際的な性質が参加者の学びに大きな価値を付加している。これにより学生は多角的な視点から問題解決能力を養うことができている。
- プログラム拡大への取り組み
  カタール大学やフリーステート大学などへのプログラム拡大に向けた議論が進められており、新たな MOU（大学間交流協定）の締結が計画されている。これらの取り組みは学生交流ネットワークの拡大と多様性向上に寄与している。

- 将来の持続可能性
  2025 年初頭にはグローバル IPE に関するシンポジウムが計画されており、将来の資金調達についても継続的な議論が行われている。これらはプログラムの長期的な発展と安定性を支える重要な要素となっている。

②課題と改善点

外部評価委員会では、以下の課題と改善点が指摘された：

- 非医療系学生の参加
  経済学や工学など非医療系学生を臨床環境に配置することには課題があり、初期段階では医療系学生に焦点を当てることが実用的かもしれない。これによりプログラム運営がよりスムーズになる可能性がある。
- MOU（大学間交流協定）の進捗
  大学間で MOU を締結するために長期的な交渉が求められるが、これはパートナーシップの正式化と学生・情報交換の円滑に行っていくために非常に重要であり、引き続き慎重に進めていく必要がある。
- プログラムの評価
  学生の感想のなかにアウトカム評価と思われる内容が含まれているので記載方法は検討する必要がある。
  プログラムのアウトカムは、連携実践能力や文化的能力については想定通りである一方で、問題解決能力は通常領域特異的な能力と言われており、今回測定されている社会問題解決能力の評定尺度で測定されるべき内容が学習／指導されていたのかが明確ではない。学習内容を精査し評価と学習内容の整合を図る必要がある。いずれの事前事後比較においても統計学的な検定等を含めた議論が欲しいところである。
- プログラム拡大に向けた戦略
  プログラムの拡大には戦略的計画が必要であり、そのためには将来的な資金調達も考慮しつつ進めていくことが重要である。持続可能な成長と影響力ある成果提供を目指すべきである。

③最終評価票集計結果

外部評価委員会終了後に提出された最終評価票では、プログラム全体の進捗状況について以下の結果が得られた：

「予定を越えて進展」：1 名

「予定どおり進展」：5 名

この結果より、プログラムが概ね計画通りに進行していると評価した。今後は、プログラムの拡大を長期的目標に置き課題解決に取り組む。

Fact Sheet

資料 1　GRIP 実績

年		学生交換数		学生交換国		展開段階		備考
年次	年度	派遣学生数	受入学生数	学生の派遣国	学生の受入国	PHASE	STEP	
初	2022	10 名 ： 医学部 3 名 薬学部 1 名 看護学部 3 名 看護学研究院 2 名 国際教養学部 1 名 ※JASSO 2022 年度海外留学支援制度(協定派遣)派遣学生 10 名分採択	10 名 ： シンビオシス国際大学 学部生 8 名 大学院生 2 名 ※JASSO 2022 年度海外留学支援制度(協定受入)受入学生 10 名分採択	インド	インド	1 GRIP モデルの構築(2022-2023 年中間評価まで)	1 教育、教育ロジスティックス、教育プログラム質保証の仕組みづくり シンバイオシス大学で社会課題解決演習およびバーチャルワークショップのトライアル	SIU との大学間協定締結
	期間	2023.2.13-2.22	2023.3.1-3.9					
2	2023	10 名： シンビオシス国際大学 工学部 3 名（医工学 2、都市環境 1） 国際教養学部 3 名	10 名： シンビオシス国際大学 デザイン専攻 3 名 商業専攻 3 名 看護学専攻 4 名	インド、英国	インド、英国	2 GRIP モデルの世界普及（2024－2026 年中間評価以降）	2 ISL トライアルスタート 参加大学プログラム委員会による管	

		教育学部 1 名 看護学部 2 名 看護学研究科（前）1 名 5 名： レスター大学 医学部 1 名 工学部 2 名 （建築 1、医工学 1） 法政経学部 1 名 看護学研究科（前）1 名 ※JASSO 2023 年度海外留学支援制度(協定派遣)派遣学生 15 名分採択	5 名： レスター大学 医学専攻 3 名 助産専攻 2 名 ※JASSO 2023 年度海外留学支援制度(協定受入)受入学生 15 名分採択				理と学修の質保証を本格稼働 副専攻 GRIP プログラム完成、他大学に参加呼びかけの準備	

資料２　受け入れプログラム実績

レスター大学（University of Leicester）受入
プログラム期間：2024 年 3 月 1 日～3 月 8 日
渡航期間：2024 年 2 月 28 日～3 月 10 日
学部生 5 名（医学専攻 3 名、助産専攻 2 名）

シンビオシス国際大学（Symbiosis International (Deemed University))受入
プログラム期間：2024 年 3 月 1 日～3 月 8 日
渡航期間：2024 年 2 月 29 日～3 月 9 日
学部生 10 名（デザイン専攻 3 名、商業専攻 3 名、看護学専攻 4 名）

※JASSO 2023 年度海外留学支援制度(協定受入)受入学生 15 名分採択

資料３　派遣プログラム実績

レスター大学（University of Leicester）派遣
プログラム期間：2024 年 2 月 12 日～2 月 21 日

渡航期間：2024 年 2 月 10 日～2 月 23 日
医学部 1 名、工学部（建築 1、医工学 1）2 名、法政経学部 1 名、看護学研究科（前）1 名

シンビオシス国際大学（Symbiosis International (Deemed University)）派遣
プログラム期間：2024 年 2 月 14 日～2 月 21 日
渡航期間：2024 年 2 月 13 日～2 月 23 日
工学部（医工学 2，都市環境 1）3 名、国際教養学部 3 名、教育学部 1 名、看護学部 2 名、看護学研究科（前）1 名

※JASSO 2023 年度海外留学支援制度(協定派遣)派遣学生 15 名分採択

資料 4　教員交流実績

1. シンビオシス国際大学（インド）2023 年 6 月 19 日～6 月 24 日
　G20 関連のカンファレンスに参加し、インドにおける高等教育状況を把握
　シンビオシス国際大学を拠点とした現地演習プログラム構築のための現地視察及び現地教員と打ち合わせ
シンビオシス国際大学：Dr. Anita Patankar、Ms. Swati Sahasrabudhe、 Dr. Sonopant G Joshi、Ms. Bhakti Padhye, Prof. Lelith Daniel
千葉大学：野崎章子、佐伯昌俊

2. レスター大学（イギリス）2023 年 9 月 11 日～9 月 12 日
　レスター大学とアライアンス、GRIP プログラム実施のための現地視察及び打ち合わせ
レスター大学：Prof. Elizabeth Anderson、 Dr. Anil Sood、Ms. Nicole Bergman、Mr. Steve Malcherczyk、Ms. Maria Keering
千葉大学：野崎章子、飯田貴映子、山内かづ代

3. カタール大学（ドーハ）　2023 年 11 月 5 日～11 月 9 日
　ATBH XI（All Together Better Health Conference: The 11th International Conference on Interprofessional Practice and Education）にて評価研究成果発表
　GRIP プログラム及びグローバル IPE について、レスター大学、カタール大学、フリーステート大学（南アフリカ）教員と打ち合わせ
レスター大学：Prof. Elizabeth Anderson
カタール大学：Prof. Alla El-Awaisi
フリーステート大学：Prof. Champion Nyoni
千葉大学：酒井郁子、天井響子

4. モナシュ大学（オーストラリア）2023 年 11 月 10 日〜11 月 11 日

2024 年度より学生派遣予定の GRIP プログラム実施のための現地視察及び現地教員と打ち合わせ

モナシュ大学：Dr. Fiona Kent、Dr. Jo Colvin、Dr. Kaori Shimoinaba

千葉大学：野崎章子、飯田貴映子、天井響子、マスグレイブ武田美果

資料５　研究計画書

研　究　計　画　書

研究題目　「GRIPプログラムの教育評価に関する研究」

研究者　酒井郁子

共同研究者：　井出成美、石橋みゆき、飯田貴映子、野崎章子、ｶｽﾞﾉﾌﾞ ﾀﾞﾋﾞｯﾄﾞ、仲井あや、関根祐子、石川雅之 、伊藤彰一、山内かづ代、鋪野紀好、笠井　大、岩崎　寛、中口俊哉、朝比奈真由美、中村絵里、臼井いづみ 、孫佳茹、天井響子

Ⅰ　研究の必要性及びその背景

千葉大学は2007年から、日本初となる医療系学部を横断した「専門職連携教育プログラム−亥鼻IPE」を必修科目として推進してきた。また、2020年度からは全入学生を対象とするENGINEプランを開始し、「全員留学」を実施している。グローバル地域ケアIPEプラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP、以降GRIPと表記）は、15年間実施してきた専門職連携教育を全学に発展させ、また日本以外の国や地域の課題にも対応できる専門職業人材を育成することを目指した新たな留学プログラムである。GRIPでは、「地域特有の健康課題」に対して、専門領域の異なる学生がインター・プロフェッショナル且つインター・ナショナルに協働して取り組み解決方策を提案する。地域対応型の人材を、専門を跨いだサービス・ラーニングにより育成する。

本研究は、このGRIPプログラムの教育評価を量的および質的に分析し、プログラムの学習効果を高める要因と教育方法の改善点を明確にすることを目的とする。具体的には、2022年度から2026年度までの千葉大学および海外連携大学のGRIP参加学生を対象とした、①専門職連携能力、社会課題解決能力、文化的対応能力及び文化的謙虚さの変化を評価するためのプログラム参加前後の質問紙調査、②変化の個人差や共通要因を質的に分析するためのインタビュー調査を実施する。

持続可能な社会を創生するため2015年に採択された「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」では、環境や平和の維持という全世界的な課題から、災害や貧困、医療資源へのアクセスという国や地域特有の課題まで多様な社会課題が対象とされている。これらの課題解決のためには、まさに多様な職種間の連携協働および国際的な比較と考察、資源を創造する柔軟な発想が必要とされる。そのためGRIPは、どの国や地域の社会課題に対しても他の専門職とともに取り組み、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤として、現場での最適解を導き出すことができる自律した組織人の養成を目指している。しかし、インター・プロフェッショナル且つインター・ナショナルに協働して社会課題を解決できる人材のコンピテンシーとして挙げられる専門職連携能力、社会課題解決能力、文化的対応能力及び文化的謙虚さの包括的な育成を図った留学プログラムは非常に稀有であり、その評価研究も未だ国内外を通して実施されていない。よって、GRIPプログラムの教育効果、並びにプログラムとしての改善点を定性的、定量的、且つ縦断的に検討することの社会的意義は大きいと考えられる。

なお、本研究は対象をGRIPプログラムの参加学生に限定しているが、千葉大学では既にその他の留学プログラムやオンラインプログラムの参加学生に対して、後述するシステムBEVIを利用して文化的対応力および文化的謙虚さの評価に取り組んでおり、BEVIのスコアについて他プログラムとGRIPの比較という形で検討を行うことでGRIPのみならず他プログラムの評価や改善に貢献できる可能性がある。留学プログラム参加学生に対するBEVIの利用は既に千葉大学大学院医学研究院倫理審査委員会の承認を受け行われている。

Ⅱ　研究目的

GRIPプログラムの教育評価を量的および質的に分析し、プログラムの学習効果を高める要因と教育方法の改善点を明確にすることを目的とする。

本研究は、参加者のコンピテンシーの変化の測定と、その変化の要因となった学習内容や経験の構造化の二側面から構成される。まず、研究１は、GRIP参加者の専門職連携能力、社会課題解決能力、文化的対応能力及び文化的謙虚さをプログラムの前後により測定し、定量的に学習効果を評価する質問紙調査である。次に研究２は、プログラム終了後に個別に実施するインタビュー調査である。参加前の自己の状態、参加中の経験、そして現在の自己の状態を回顧的に語ってもらい、変化の要因となった学習内容や経験、それらと個人差の関連、学習効果をより高めるためのプログラムとしての改善点を定性的に評価する。

これらの定量的および定性的調査を千葉大学の学生と提携大学の学生に対して継続して実施し、プログラムの評価、改善、並びに学内外への波及を目指す。

Ⅲ 評価対象となる学習プログラムの概要

GRIPはオンラインによる事前学習、現地演習、メタバース上で実施する成果発表会の三段階から成る。参加学生は事前学習の開始前と成果発表会の終了後に質問紙への回答を求められる。個別インタビューは成果発表会終了後に実施する。

1. 事前学習

(1) 学習目標

① 演習の計画・準備；演習の目標を共有する。
② 自国の保健・医療・社会経済文化・制度等について概要を理解する。
③ 地域アセスメント方法について理解する。
④ 文化的能力・文化的謙虚さについて理解する。
⑤ 健康の社会的決定要因（Social Determinants of Health: SDH）について相対的に把握する。

(2) 方法

オンライン学習（対面を含むハイブリッド型）、オンラインテスト

(3) 内容

専門職連携基礎、専門職連携実践１、専門職連携実践２、Cultural Competency and Cultural Humility、社会課題解決基礎、社会課題解決応用の６科目を通して、知識構築と参加学生同士のチームビルディングやシミュレーション学習を行う。

2. 現地演習

(1) 学習目標

① フィールドにて多様な文化的・学際的背景をもつ学生が協働して、地域の問題解決に取り組む。
② チームとしての対立の対処法と、専門家間の関係を発展方法を学ぶ。
③ 他の専門職がリソースとなり、自身の実践の補完となることを学ぶ。
④ 他の専門職への理解を深める。
⑤ 地区踏査等によってアセスメントおよび課題を明確化する。

(2) 方法

実渡航を伴う現地施設やコミュニティ、プログラムの見学、参加、運営

(3) 内容

渡航先の対象地域において、以下のテーマでの社会課題解決演習を行う
（例）災害被災者の健康、医療資源へのアクセシビリテイ、認知症者とともに作る介護、
パンデミックと文化、ホームレスネスと社会

3. 成果発表会

(1) 学習目標

① 学習成果の具現化を行う。
② 自身の研究や実践に対する実装準備を行う。または実装する。
③ 自他国への移転可能性を検討する。
④ 自身の専門家としての活動へ知識と経験を活用する。

(2) 方法

メタバースプラットフォームを用いたリアルタイムな成果発表会

(3) 内容

・グループプレゼンテーションの実施
・各大学教員からのフィードバック受容およびそれを受けたプレゼンテーションの改善
・社会課題解決ケースシナリオの提出（最終課題）

Ⅳ 研究方法

研究 1:「GRIPプログラムによる学習効果の定量的評価」質問紙調査

(1) 対象

2022年度のGRIPプログラム参加学生のうち、後述する研究手続きと倫理的配慮に則った説明を受け、研究協力に同意した学生。上述の参加学生には、千葉大学から派遣する学生のほか、GRIPプログラムを通じて協定校から千葉大学が受け入れる学生も含む。

(2) 期間

倫理審査承認後から2023年9月末日までを研究期間とする。

(3) データ収集

Google Spaceをプラットフォームとし、オンラインの質問紙調査を実施する。GRIPプログラム参加学生へ、プログラム開始前、現地演習終了後、成果発表終了後の最大3回、質問紙への回答依頼を送信する。Google Space上に研究協力依頼(資料1・2)および誓約書(資料3)を掲示し、学生が同意した場合に以下の内容に対応した回答画面に進む。測定項目は資料9の通りである。

a. 専門職連携能力

Interprofessional Socialization and Valuing Scale (ISVS-21) (King et al.、 2016) 21項目

b. 社会問題解決能力

Social Problem-Solving Inventory-Revised (SPSI-R) (D'Zurilla et al.、 1998) 52項目

c. Cultural competencyを含む信念および世界観

BEVI (Shealy、 2016) 185項目

尺度a～cは国内外で広く使われており、本研究の申請者はこの尺度の背景にある概念や理論についてよく理解した上で使用する。尺度cは千葉大学として使用ライセンス契約をしている。いずれも著作権侵害の恐れがない。また、英語力による選別を突破した学生が参加することと全ての学習活動を英語で実施するというGRIPプログラムの特性上、尺度への回答も基本的には英語で実施予定であるが、尺度bおよび尺度cは項目数が多いことと両尺度とも妥当性と信頼性が確認された日本語版が開発されていることから、回答者の負担軽減のため日本語による回答も選択可能とする。

(4) 分析

回収されたデータは匿名化・符号化の上で回答者ごとに紐づけし、プログラム開始前から終了後の値の変化を成長曲線モデルで分析する。加えて、分散分析により、千葉大学の学生と協定校の学生の比較、あるいは、千葉大学内でGRIPと同時期に実施された他の渡航を伴う留学プログラムやオンライン留学プログラムとの効果比較を行う予定である。

研究 2:「GRIPプログラムを通した学習体験の構造化」インタビュー調査

(1) 対象

2022年度のGRIPプログラム参加学生のうち、後述する研究手続きと倫理的配慮に則った説明を受け、研究協力に同意した学生。上述の参加学生には、千葉大学から派遣する学生のほか、GRIPプログラムを通じて協定校から千葉大学が受け入れる学生も含む。

(2) 期間

倫理審査承認後から2023年9月末日までを研究期間とする。

(3) データ収集

GRIPプログラムにかかわる全ての活動終了後、Google Space上に研究協力依頼(資料4・5)および誓約書(資料6)を掲示し、研究手続きや倫理的配慮、協力の有無により不利益を被らないこと等についての説明の上で協力学生を募集する。研究協力に同意する学生にのみ同意書(資料7)をGoogle Space上で提出してもらう。インタビューはインタビューガイド(資料8)に則った半構造化インタビューとする。個別にzoomで実施し、同意を得た上で音声記録を取る。

(4) 分析

音声記録は直ちに匿名化・逐語化し、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：TEM）を参考に参加者の体験と学習の経時的な整理と構造化を行う。

Ⅴ 倫理的配慮

1. 研究許可・承諾を得る手続きにおける任意性の保障

(1)研究対象者関連施設（研究対象者の所属・利用等による関連施設。研究協力機関も含む。）への質問紙やインタビュー等の協力を得るための手続き

千葉大学：

・本研究には2022年度のGRIPプログラムに参加予定の看護・薬・医学部、看護学研究科、医学薬学府、国際教養学部の学生が対象者として含まれる可能性がある。GRIPは全学を対象としたプログラムであり、目的、概要、教育効果検証の必要性等、事業に関する説明および協力要請は既に千葉大学全体で行われている。

・上記に加え、看護学研究科では、所属学生を対象としたインタビュー調査を実施する際に倫理審査とは別途学生支援委員会にて研究計画およびインタビューガイドの確認を受ける必要がある。本研究は倫理審査終了後速やかに規定の確認を受ける予定である。

・看護学研究科以外の関連する他学部および研究科に確認したところ、本研究について倫理審査とは別に上述のような審査を受ける必要性はないことが確認された。

協定校：

・GRIPプログラムが「大学の世界展開力強化事業」として申請および採択されるにあたって、学生の派遣、受け入れ、それらの前後の教育、並びに教育効果の検証についての協力関係が既に構築されている。

・研究の計画および実施に際しても協定校の研究責任者と連携し、双方の学生に対し十分な倫理的配慮がなされるよう留意する。

(2)研究対象者の承諾を得る手続き

研究１：質問紙調査

・対象者に対しGoogle Space を通じて研究協力依頼書(資料１・2)を提示する。任意性の保障などの説明を徹底し、強制力が行使されない配慮を行う。

・研究協力は対象者の自発的意志に基づくもので、常時協力中止の申し出が可能であり、中止の申し出により不当な扱いを受けないことを研究協力依頼書で説明する。

・調査協力の撤回は自由であることを研究協力依頼書に記載する。

・研究参加の協力・非協力に関わらず、それによる不利益が生じないことを、研究協力依頼書を用いて十分に説明を行う。

・研究協力依頼書を読み、理解の上、協力に同意してもらえる場合のみ、調査票(資料9)へ回答をもとめる。また、調査票への回答および送信を以って、この研究に同意すると判断する。同意しない場合、調査票への回答は不要とする。

研究２：インタビュー調査

・インタビューの実施に関する研究協力依頼(資料４・5)は、成績評価に関わらない研究者(以下「特任教員」とする)が行う。

・研究説明のはじめに、研究協力は対象者の自発的意志に基づくもので、常時協力中止の申し出が可能であり、中止の申し出により不当な扱いを受けないことを研究協力依頼書で説明する。

・研究協力の同意は文書で回答し、Google Space上に提出する(資料7)。

・インタビュー開始直前にも倫理的配慮等の口頭説明と協力意志の確認を行う。また、インタビュー中および終了後も協力の撤回は自由であることを伝える。

・研究を公表するときに、研究協力への意志を再確認する。

2. 研究実施における安全性・負担の軽減の保障

(1)申請者の研究遂行能力の担保・研究への準備状況

申請者および共同研究者は、質的研究および量的研究に関する豊富な経験および業績を有している。また、研究メンバー間で合意形成を行いながら研究計画を立案し、研究の実現可能性は保証されている。さらに、データ分析は研究経験者複数名により実施し、分析プロセスにおいては研究者間での討議を十分に行うことでデータの信頼性・妥当性を確保する。

(2)研究協力に伴う不利益やリスクに対する対応(身体的・精神的・社会経済的・時間的負担等に対する配慮も含む)

研究 1:質問紙調査

・研究協力依頼は、各学部の状況に合わせて研究協力者の負担の少ない時期を選んで行う。例として、医学部や看護学部の国家試験前、教育学部の教員採用試験前や、実習の時期にはデータ収集を実施しない。

研究 2:インタビュー調査

・インタビューの実施日は、学生に予定を確認し、学生の都合(希望)に合わせて設定する。

・インタビューに対する抵抗感や拒否感を最小限にするために、インタビューは特任教員が担当する。インタビューは協力者の利便性やプライバシーを確保するためzoomで個別に実施する。

・インタビュー内容の録音についての諾否を確認し、承諾しない場合は録音を行わない。

・インタビューにより不快感が発生しないよう、インタビュー実施者はその場の状況や研究協力者の様子に敏感になり、研究協力者の精神的負担が推測される場合は、データ消去や途中終了等を躊躇せず行う。

・インタビュー実施後も、研究協力者から話した内容の一部分については使わないで欲しいというような申し出があった場合には、インタビュー実施後6か月以内であれば、データ消去や途中終了など躊躇せず行う。それ以後の場合、消去の希望に応じかねる旨を依頼書に明記し、予め研究協力者に伝えておく。

3. データ収集から公表におけるプライバシー・匿名性・個人情報の保護

(1)データ収集時の配慮

研究 1・研究 2ともに、個人を特定し得るデータは記号化する。万が一散逸した場合にも個人が特定されないように氏名および所属学部の固有名詞は使わない形でデータを保存する。

研究 2：インタビュー調査の場合、さらにインタビュー直前に個人情報保護の注意を喚起し、もしそこに参加していない個人が特定される発言があったときにはその時に記録や録音を停止し、削除する。

(2)データ分析における配慮

研究 1・研究 2 ともに、研究協力の諾否および、ID 化前の個人が特定されるデータについて成績評価担当者にはアクセスさせない。そのため特任教員をデータ管理者とし、ID 化・テキストファイル化の作業を統括し、データアクセスの可否を判断する。

(3)研究資料の管理方法

以下、研究 1・研究 2 ともに採用する管理方法である。

・本研究は複数の研究者による共同研究のため、以下に示すデータ収集、管理、処理方法を研究者間で合意し、倫理的配慮で明文化した具体的ルールを遵守する。

・本研究の参加者が学生であり、授業担当教員が中心メンバーの研究活動となるため、強制力を極力回避するため、データ保管者を決め、徹底する。こうすることにより、研究対象者の不利益を阻止する。成績評価担当者は、データ収集・保管には原則的に関わらないこととする。

・データ保存は研究成果発表後10年間を原則とする。管理責任者は特任教員とする。管理責任者は特任教員が異動する際は、次期データ管理者を選定し引継ぐものとする。

・成績評価にかかわらない特任教員の中からデータ管理者 1 名を決め、データは電子媒体および紙媒体に保管し、そのデータの保管は鍵のかかるキャビネット内とし、施錠開錠と鍵管理を確実に行う。

・データは紙媒体および電子媒体ともにコピーは必要最低限とし、データ管理者がデータアクセスの承認・非承認を決し、承認された場合はコピーの日時、部数、承認を受けた者の名前を記録に残す。データを預かった共同研究者は各自、専用のデータ収納ボックスを準備し、施錠管理を行う。

上記のほか、研究 2 はさらに以下のことを配慮する。

・録音した電子データおよび逐語録は、データ期間保存終了後に復元不可能な状態にして処分する。

・インタビューにおいて、他の参加者の人権侵害(個人情報の漏洩や名誉毀損)にかかわる可能性が認められたときは即座にインタビューを中断し、可能性がある部分の記録を廃棄する。

(4)研究成果公表及び対象への還元の方法とその際の配慮

・研究 1・研究 2はいずれも研究を公表する予定があること、またその際は個人が特定できないよう十分配慮することを研究協力依頼書の中に記載する。

・研究データの公表に際して、すべての個人が特定できないよう改めて点検する。

・研究 2は研究公表について事前に研究協力者へ確認した上でGRIPの HP にて周知する。

資料 1

令和　年　　月　　日

年度GRIP参加学生の皆様

「GRIPプログラムの教育評価に関する研究」

＜研究1 質問紙調査＞へのご協力のお願い

千葉大学は、令和４年度から、国や地域、また文化や専門性の違いを超えて社会課題の解決に貢献できる人材の育成を目指し「グローバル地域ケアIPEプラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP、以降GRIPと表記）」を開始しました。

この亥鼻 GRIPプログラムについて、教育効果を明らかにすると同時に、さらに効果的なプログラム構築のための基礎資料を得ることを目的に教育評価研究を行います。

研究内容につきましては、研究計画書および研究を行うにあたっての研究者の遵守事項(次頁以降)をご覧ください。なお、本研究は千葉大学大学院看護学研究院倫理審査委員会にて承認を受けております。ご不明な点などございましたら、お手数ではございますが、下記のお問合せ先へご連絡ください。

当研究の意義をご理解いただき、なにとぞご協力を賜りますようお願い申し上げます。

研究者: 酒井郁子、井出成美、石橋みゆき、飯田貴映子、野崎章子、ｶｽﾞﾉﾌﾞ ﾀﾞﾋﾞｯﾄﾞ、仲井あや、関根祐子、伊藤素行、石川雅之 、伊藤彰一、笠井　大、岩崎　寛、中口俊哉、朝比奈真由美、中村絵里、臼井いづみ 、孫佳茹、天井響子

問い合わせ先　千葉大学看護学研究院附属専門職連携教育研究センターGRIP推進室
センター長 酒井郁子

〒260-8672　千葉市中央区亥鼻 1-8-1
TEL　043-226-2614
FAX　043-226-2614
e-mail　inohana-ipe@office.chiba-u.jp

次ページ以降をご覧ください

資料 2

令和　年　月　日

「GRIPプログラムの教育評価に関する研究」

＜研究1 質問紙調査＞に関する研究協力のお願い

この文書は、研究の目的および研究活動全体において、私たち研究グループが、研究協力者の皆様に不利益がないように努める遵守事項について記載しております。

以下の項目をお読みいただき、本研究の趣旨をご理解・ご同意いただきました上で、研究へのご協力をいただきたくお願い申し上げます。

研究への協力にご同意いただける場合のみ、Google Spaceから調査票にご回答ください。

記

本研究は下記の目的で行うものです。研究の趣旨をご理解の上、何卒ご協力をお願い致します。

1. 研究の目的

本研究の目的は、GRIPプログラムの学習効果を評価するとともに、プログラムの有用性を検証し、より教育効果の高いプログラムに改善するための基礎的データを得ることです。

2. 研究方法・期間

1)調査内容

GRIPプログラムに参加した学生ご自身の専門職連携能力、社会課題解決能力、Cultural Competencyの主観的な評価の変化を検討します。

2)調査方法

Google Spaceを通したオンラインの質問紙調査です。回答は全部で30分程度と予想されます。

（1） Google Space上に掲示された研究協力依頼書をお読みいただき、ご協力いただける場合は Google Spaceから「同意して回答を始める」をクリックの上で調査票へご回答ください。

（2） ご回答が終わりましたら、送信ボタンを押してください。

3)日時

学生への協力依頼は、各学部の状況に合わせて学生の負担のない時期を選んで、Google Spaceを通じて行うように配慮します。例として、医学部や看護学部の国家試験、教育学部の教員採用試験等に影響しうる時期や実習時期には調査を実施致しません。

3. 個人情報の保護について

データは、研究者が厳重に保管し、データ保管期間終了後に責任をもって破棄致します。ご回答いただいた内容は、本研究においてのみ使用し、他の研究に用いることはありません。また研究成果を公表する際にも施設や個人が特定される形では公表しないことをお約束いたします。この研究の期間中および終了後でも、この研究に関する質問がありましたら、いつでも文末の問い合わせ先にお問い合わせください。

4. 研究協力に伴う不利益やリスクについて

研究への協力・非協力にかかわらず、学生は一切の不利益を被りません。学生への強制力を回避するため、GRIPの授業担当教員は、データ収集・保管には原則的に関わらないこととします。また、特任教員をデータ管理者とし、ID 化・テキストファイル化の作業を統括し、データアクセス者を制限します。

5. 研究に要する費用

研究にご協力いただけることでの謝礼はございません。この研究にかかる費用について、貴施設の直接の経済的負担は一切ありません。研究に必要な費用は、研究者がすべて負担致します。

6. 研究計画等の開示

ご希望があれば、いつでもこの研究の研究計画の内容をご参照していただくことができます。

7. 研究への協力の拒否権について

この研究への協力はお断りになることができます。また、一旦同意した場合であっても、いつでも途中でやめることができます。

学生においても、研究協力は自発的意志に基づくもので、常時協力中止の申し出が可能です。回答時に中止の申し出により不当な扱いを受けないことをお約束致します。

8. 研究データの利用について

この研究のために提出いただきました調査の内容は、本研究においてのみ使用し、他の研究に用いることはありません。

9. 研究結果の報告

研究の進捗状況やその成果、学術的な意義については、ご希望に応じ、分かりやすい形で説明致します。研究成果を公表する際には、公表前にデータの共有と公表内容の合意を得て行います。個人が特定される形では公表しませんし、できる限りの配慮を致します。

10. 研究中・終了後の対応

この研究の期間中および終了後でも、この研究に関する質問がありましたら、いつでも下記の問い合わせ先にお問い合わせください。

問い合わせ先
看護学研究院専門職連携教育研究センター GRIP推進室　センター長 酒井郁子
〒260-8670　千葉市中央区亥鼻 1-8-1
TEL/FAX　043-226-2614　inohana-ipe@office.chiba-u.jp

資料 3

「GRIP プログラムの教育評価に関する研究」

研究協力に関する誓約書

<研究 1　質問紙調査>

****

私は、研究活動全体において別紙でご説明したことを遵守し、データ提供者のプライバシーを守り、これを研究以外に使用しないことを約束します。また、研究論文に個人を特定しうるような方法による論述や公表を行わないことを約束します。

研究者名＿＿＿＿＿＿酒　井　郁　子＿＿＿＿＿＿

資料 4

令和　年　月　日

年度GRIP参加学生の皆様

「GRIPプログラムの教育評価に関する研究」

＜研究2 インタビュー調査＞に関する研究協力のお願い

千葉大学は、令和４年度から、国や地域、また文化や専門性の違いを超えて社会課題の解決に貢献できる人材の育成を目指し「グローバル地域ケアIPEプラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP、以降GRIPと表記）」を開始しました。

この亥鼻 GRIPプログラムについて、教育効果を明らかにすると同時に、さらに効果的なプログラム構築のための基礎資料を得ることを目的に教育評価研究を行います。

研究内容につきましては、研究計画書および研究を行うにあたっての研究者の遵守事項(次頁以降)をご覧ください。なお、本研究は千葉大学大学院看護学研究院倫理審査委員会にて承認を受けております。ご不明な点などございましたら、お手数ではございますが、下記のお問合せ先へご連絡ください。

当研究の意義をご理解いただき、なにとぞご協力を賜りますようお願い申し上げます。

研究者: 酒井郁子、井出成美、石橋みゆき、飯田貴映子、野崎章子、ｶｽﾞﾉﾌﾞ ﾀﾞﾋﾞｯﾄﾞ、仲井あや、関根祐子、伊藤素行、石川雅之 、伊藤彰一、笠井　大、岩崎　寛、中口俊哉、朝比奈真由美、中村絵里、臼井いづみ 、孫佳茹、天井響子

問い合わせ先　千葉大学看護学研究院附属専門職連携教育研究センターGRIP推進室
センター長 酒井郁子

〒260-8672　千葉市中央区亥鼻 1-8-1
TEL　043-226-2614
FAX　043-226-2614
e-mail　inohana-ipe@office.chiba-u.jp

次ページ以降をご覧ください

資料５

「GRIPプログラムの教育評価に関する研究」

＜研究2 インタビュー調査＞に関する研究協力のお願い

この文書は、研究の目的および研究活動全体において、私たち研究グループが、研究協力者の皆様に不利益がないように努める遵守事項について記載しております。ぜひ、下記の内容をご理解の上、研究へのご協力をいただけますようお願い申し上げます。

以下の項目をお読みいただき、研究に協力することにご同意いただける場合は、同意書に記入の上、Google Space上に提出してください。

記

1　研究の目的

本研究の目的は、GRIPプログラムの学習効果を評価するとともに、プログラムの有用性を検証し、より教育効果の高いプログラムに改善するための基礎的データを得ることです。

2　研究方法

Zoomを利用したオンライン個別インタビュー調査

研究協力に同意の得られた皆様には、今回のGRIPでの学習の体験について、インタビュー調査をします。実施日はご都合に合わせて個別に決定します。インタビューの内容は、研究協力者に可否を確認したうえで、IC レコーダーにて録音します。インタビューの時間は、30分から最大で1 時間ほどです。終了後に謝礼としてアマゾンギフトカード3,000円分をメールアドレスにお送りします。

3 調査の手順および特記事項

1)**研究に同意していただける方には研究協力への同意書に署名し、Google Space上の提出場所へ提出していただきます。**

2)インタビュー内容は、GRIPでのご自身の経験や考えです。

3)インタビューは、研究協力者と日程調整のうえ、原則としてzoomで個別に実施します。

4)もしインタビューおよびその回答内容において、倫理的配慮が損なわれていると調査者が認めた場合(例えば、他者の尊厳を脅かす発言や患者・利用者、学生の個人情報の漏えい等)は、その場で中断し録音データを消去いたします。

5)研究への同意後だけでなく、インタビュー実施後も、話した内容の一部分について使わないで欲しいというような申し出があった場合には、インタビュー実施後6か月以内であれば、研究協力者の希望により、データ消去や途中終了など躊躇せず行います。それ以後の場合、研究が分析終了後といった消去が不可能な段階に入る可能性があるため、消去へのご希望に応じかねますことをご了承ください。

4　倫理的配慮

①研究協力に伴う不利益やリスクに対する対応

・研究協力の諾否によって、学生は、いかなる不利益も被ることはありません。

・成績評価に関与しない立場の教員を実施者およびデータ管理者とします。

・インタビューは、GRIP担当教員のうち、成績評価を担当せず、且つインタビュー調査の経験が豊富な特任教員

が行います。インタビューへの協力の有無を授業担当教員に伝えることもありません。
・インタビューにより不快感が発生しないよう、インタビュアーは、研究協力者の回答内容をよく聞き、インタビューの間に、不快感の有無や研究協力続行の意志を確認するようにします。
・インタビュー中に研究協力者の精神的負担が推測される場合にいは、データ消去や途中終了等を躊躇せず行います。
・研究協力者がインタビュー内容の録音を承諾しない場合は録音を行わず、インタビュアーが内容を筆記致します。

②研究遂行能力

・インタビューは、インタビュー調査経験を充分に持つ研究者(特任教員)2 名によって行われます。

③問い合わせ等の方法と対応

・ 教員の問い合わせ先

千葉大学看護学研究院附属専門職連携教育研究センターGRIP推進室　センター長 酒井郁子
〒260-8672　　千葉市中央区亥鼻 1-8-1
TEL043-226-2614 FAX043-226-2614　　e-mail inohana-ipe@office.chiba-u.jp

④ 研究協力の同意をいただく方法と途中辞退の保障

・ 研究協力の同意は所定の書式に記入し、Google Space上に提出してください。
・ 研究協力は学生の自発的意志に基づくもので、同意書を提出した後、またインタビュー実施後も、常時協力中止の申し出が可能です。また、中止の申し出により不当な扱いを受けることはありません。
・ 同意書を提出後、協力中止を申し出たい場合は、上記③に連絡をしてください。電話・FAX・メールどのような方法でも構いません。
・ インタビューは、開始直前に改めて意志確認を行います。協力の撤回は自由です。

⑤プライバシー・匿名性・個人情報の保護および人権侵害の回避

・ 個人を特定し得るデータは記号化することで、万が一散逸した場合にも、個人が特定されないように氏名および所属学部の固有名詞は使いません。
・ データ管理者 1 名(特任教員)を決め、データの保管と管理を確実に行います。
・ 研究データの公表に関しては、すべての個人が特定できないよう、改めて点検します。
・ インタビューに先立ち、個人情報保護の注意を喚起し、もしそこに参加していない個人が特定される発言があったとき、人権侵害に関わる内容があった場合には、その時に記録や録音を停止し、削除します。
・ 録音した電子データおよび逐語録は、データ保存期間(研究成果発表後10年間)終了後に復元不可能な状態にして処分します。

⑥研究成果公表及び対象への還元の方法とその際の配慮

・ 研究データの公表に関しては、すべての個人が特定できないよう改めて点検致します。
・ 研究公表については、事前にメールにて協力者に確認の上GRIPのHPにて周知致します。

資料 6

「GRIP プログラムの教育評価に関する研究」

研究協力に関する誓約書

<研究２ インタビュー調査>

****

私は、研究活動全体において別紙でご説明したことを遵守し、データ提供者のプライバシーを守り、これを研究以外に使用しないことを約束します。また、研究論文に個人を特定しうるような方法による論述や公表を行わないことを約束します。

研究者＿＿＿＿＿＿酒　井　郁　子＿＿＿＿＿＿

日付:令和　　年　　月　　日

資料 7

「GRIP プログラムの教育評価に関する研究」

研究協力 同意書

(研究２ インタビュー調査)

研究協力に同意していただける方は下記に記入し、GRIPのGoogle Space 上の BOX にご提出ください。なお、インタビューにご協力いただける方へは、インタビュー前に誓約書をお渡し、改めてご意向をご確認した上で同意書にご署名をいただきます。

****

私は、「**GRIP プログラムの教育評価に関する研究**」について文書による説明を受け、研究の目的・内容・方法・期待される利益および起こりうる不利益などについて説明を受け、理解しました。

そこで、私の自由意思にもとづいて、この研究に協力し、インタビューを実施することに同意します。

参加者(記名)＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

日付:令和　　年　　月　　日

インタビューにご協力いただける方は、下の欄にご連絡先をお書き下さい。インタビューの日程調整と、公表する前に協力者の方に閲覧していただく際の連絡のためであり、それ以外の目的には使用いたしません。

Email ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

資料 8

学習体験の構造化用《インタビューガイド》

このインタビューでは、GRIPでのみなさんが体験したことやそのときの考えを伺います。目的は、プログラムの評価と、授業やプログラムの改善を行う際の基礎資料を得ることです。

インタビューは成績評価とは無関係です。みなさんの人権やプライバシーを保護し、協力の有無やお話された内容が成績に影響しないことを約束します。

参加は自由です。途中でやめたくなった場合、そこで終了することも可能です。終了後にデータやその一部を使ってほしくないと考えが変わったときは、6ヶ月以内にご連絡いただけましたらデータを削除します。

ここまでで質問や心配なことはありますか？（ある場合は回答。ない場合は次に進む。）

では、これから録音を開始します。よろしいでしょうか。（許可を得た場合は録音開始）

1．まず、今回GRIPに参加したきっかけを教えてください。

・他の留学プログラムもある中で、GRIPを選択したのはなぜですか？
・GRIP参加前に、他学部（他研究科）と連携・協働して学習やプロジェクトを進めた経験はどれくらいありましたか？
・GRIP参加前に、国内外への社会問題への関心はどれくらいありましたか？
・GRIP参加前に、異なる文化や価値観に触れた経験はどれくらいありましたか？
・GRIPに期待していたことはありますか？

2．事前学習についてお聞きします。

・事前学習の中で印象に残っていることはありますか？
・なぜその出来事があなたにとって強く印象に残ったのだと思いますか？（この2点を深く聴く）
・他に印象に残っていることはありますか？（なくなるまで繰り返し）

3．現地演習についてお聞きします。

・現地演習の中で印象に残っていることはありますか？
・なぜその出来事があなたにとって強く印象に残ったのだと思いますか？（この2点を深く聴く）
・他に印象に残っていることはありますか？（なくなるまで繰り返し）

4．成果発表会についてお聞きします。

・成果発表会やその準備の中で印象に残っていることはありますか？
・なぜその出来事があなたにとって強く印象に残ったのだと思いますか？（この2点を深く聴く）
・他に印象に残っていることはありますか？（なくなるまで繰り返し）

5．あなたの考えについてお聞きします。

1）他学部（研究科）と連携・協働して学習やプロジェクトを進めること対する考え方や態度は、GRIPを通して変化したと思いますか?
・どのように変化したと思いますか？
・変化のきっかけとなったことはありますか？

2）国内外の社会問題に対する考え方や態度は、GRIPを通して変化したと思いますか?
・どのように変化したと思いますか？
・変化のきっかけとなったことはありますか？

3）異なる文化や価値観に対する考え方や態度は、GRIPを通して変化したと思いますか?
・どのように変化したと思いますか？
・変化のきっかけとなったことはありますか？

6．最後に、GRIP全体についての感想や、今後改善して欲しいことを教えてください。

資料 9

測定尺度項目一覧

専門職連携実践能力

King et al. (2016). Refinement of the Interprofessional Socialization and Valuing Scale (ISVS-21) and Development of 9-Item Equivalent Versions.pdf

6 I am aware of my preconceived ideas when entering into team discussions.
7 I have a better appreciation for using a common language across the health professionals in a team.
9 I have gained an enhanced awareness of my own role on a team.
10 I am able to share and exchange ideas in a team discussion.
11 I have gained an enhanced perception of myself as someone who engages in interprofessional practice.
12 I feel comfortable being the leader in a team situation.
13 I feel comfortable in speaking out within the team when others are not keeping the best interests of the client in mind.
16 I feel comfortable in describing my professional role to another team member.
17 I have a better appreciation for the value in sharing research evidence across different health professional disciplines in a team.
19 I am able to negotiate more openly with others within a team.
21 I have gained an enhanced awareness of roles of other professionals on a team.
24 I am comfortable engaging in shared decision making with clients.
25 I feel comfortable in accepting responsibility delegated to me within a team.
26 I have gained a better understanding of the client's involvement in decision making around their care.
27 I feel comfortable clarifying misconceptions with other members of the team about the role of someone in my profession.
28 I have gained greater appreciation of the importance of a team approach.
29 I feel able to act as a fully collaborative member of the team.
30 I feel comfortable initiating discussions about sharing responsibility for client care.
32 I am comfortable in sharing decision making with other professionals on a team.
33 I have gained more realistic expectations of other professionals on a team.
34 I have gained an appreciation for the benefits in

問題解決能力

佐藤ほか.(2006).SocialProblem-SolvingInventory-Revised(SPSI-R)日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討.pdf

Ⅲ合理的問題解決(RPS:α=.92)

(1)問題の定義と公式化(PDF:α=.80)

11 解決すべき問題を抱えている時は、状況を分析し、どのような障害物が自分の望みの達成を妨げているのかを明らかにしようとする

29 解決しなければならない問題が起こった時は、まず最初に、その問題に関するできるだけ多くの事実を手に入れようとする

33 問題を解決しようとする前に、自分の達成したい具体的な目標を設定する

44 解決しなければならない問題が起こった時は、自分の周りのどのような要因や状況がその原因となっているかを調べる

49 問題を理解するのが困難な時は、問題を明らかにするために役立つ、より明確で具体的な情報を手に入れようとする

(2)さまざまな解決法の案出(GAS:α=.77)

5 問題を解決しようとしている時は、しばしば異なった解決策を考え、それらのいくつかを組み合わせて良い解決策を生み出そうとする

20 問題を解決しようと試みる時は、創造的になり、新しい解決策や独自の解決策を考え出そうとする

39 問題を解決しようとしている時は、もうそれ以上アイデアを思いつけなくなるまで、できるだけ多くの選択肢を考える

47 問題を解決しようとしている時は、自分の目標が何であるのかを常に気にかけている

48 問題を解決しようと試みる時は、できるだけ多くの違った角度から問題に取り組む

(3)意志決定(DM:α=.72)

18 決断しなければならない時は、それぞれの選択肢のうまくいった場合とうまくいかなかった場合の結果を予想しようとする

24 決断する時は、それぞれの選択肢の直後の結果と、長い目で見た結果の、両方を考慮する

40 決断しなければならない時は、それぞれの解決策の結果をよく考え、互いに照らし合わせて比較する

43 決断しなければならない時は、それぞれの選択肢が自分の気分にどのような影響を与えるか考慮する

46 決断する時は、選択肢を判断し、比較するために体系化された方法を用いる

(4)解決法の実行と検証(SIV:α;.77)

25 解決策を実行した後で、何が良くて何が悪かったのか分析する

26 解決策を実行した後で、自分の気分を調べ、どのくらい良くなっているか評価する

27 問題に対する解決策を実行する前に、自分の成功のテヤンスを増やすため、その解決策を復習する

35 問題に対する自分の解決策の結果に不満足な時は、何が悪かったのかを発見し、再び試してみる

37 問題に対する解決策を実行した後で、状況がどのくらい良くなっているかを、できるだけ注意深く評価しようとする

Cultural Competency

以下、BEVIのプログラムサイト（https://jp.thebevi.com/about/scales/）より

Language English

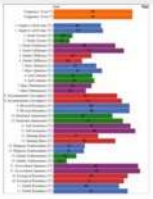
BEVI

トップ　BEVIとは　費用/サポート　ログイン　コンタクト

BEVIのすべてのバージョンは、次の相互に関連する４つの質問項目から構成されています:

1. 包括的な人口統計・背景情報に関する質問項目（プロジェクトに合わせて変更可能）
2. 生い立ちまた経歴に関する質問項目
3. 2つの妥当性と17の「尺度」に関する質問項目
4. 3つの質的な「経験に対する内省的」質問項目

妥当性の尺度には、一貫性と適合性が含まれています。17の尺度は次の7つの領域に分類されます:



I. 妥当性の尺度 Validity Scales

一貫性 *Consistency*: 類似又は同一の内容を測っているが表現の異なる質問項目に対する、回答の一貫性（「人は常に変化する」、「人は実際には変わらない」など）(e.g., "People change all the time." "People don't really change.")

適合性 *Congruency*: 統計的に推定できる回答パターンとの、回答の一致の程度（「温かさや愛情を真に欲している」、「自分の感情を深刻に受け止めている」、など）(e.g., "I have real needs for warmth and affection." "I take my own feelings very seriously.")

II. 形成的因子 Formative Variables

1. 人生における負の出来事 *Negative Life Events*: 困難な子ども時代、問題を抱えていた両親、人生における葛藤/苦闘、多くの後悔（「家族の1人または複数との衝突が多い」、「家族が金銭的な問題を抱えていた」など）(e.g., "I have had a lot of conflict with one or more members of my family." "My family had a lot of problems with money.")

III. 中核的欲求の充足 Fulfillment of Core Needs

2. 欲求の抑圧 *Needs Closure*: 不幸な生い立ち/生活史、いさかいの多い/不安定な家族構造、物事が起こる原因・状態の原因についてのステレオタイプの思考/筋が通らない説明（「素晴らしい子ども時代だった」、「他よりも運のいい数字がある」など）(e.g., "I had a wonderful childhood." "Some numbers are luckier than others.")

3. 欲求の充足 *Needs Fulfillment*: 経験・欲求・感情に対してオープン、自分・他者・より広い世界に対する気遣い/思いやり（「子どもの早期教育プログラムにもっとお金を費やすべきだ」、「自分が何者なのかを考えることが好きだ」など）(e.g., "We should spend more money on early education programs for children." "I like to think about who I am.")

4. アイデンティティの拡散 *Identity Diffusion*: アイデンティティの危機、結婚生活/家族生活についての否定的宿命論、自分や将来に対する「否定的な」感情（「つらいアイデンティティの危機を経験している」、「男性が結婚に忠実であることを期待しているが、実際はそうはならない」など）(e.g., "I have gone through a painful identity crisis." "Even though we expect them to be, men are not really built to be faithful in marriage.")

IV. 不均衡の許容 Tolerance of Disequilibrium

5. 基本的な開放性 *Basic Openness*: 基本的な思考、感情、欲求に対してオープンかつ率直（「自分というものを常に良いと思っているわけではない」、「自分の人生は孤独だと感じている」など）(e.g., "I don't always feel good about who I am." "I have felt lonely in my life.")

6. 自分に対する確信 *Self Certitude*: 強い意志、困難に対し言い訳することが我慢できない、ポジティブ思考を強調する、深い分析を好まない（「もっと頑張れば、ほとんどの問題は克服できる」、「ルールに従ってやれば、うまくやれる」など）(e.g., "You can overcome almost any problem if you just try harder." "If you play by the rules, you get along fine.")

V. 批判的思考 Critical Thinking

7. 基本的な決定論 *Basic Determinism*: 差異/行動について簡潔な説明を好む、人は変わらない/強者が生き残ると信じている、苦労の多い生活史（「エイズは神の怒りの証だ」、「強者が生き残るのは当然だ」など）(e.g., "AIDS may well be a sign of God's anger." "It's only natural that the strong will survive.")

8. 社会・情動の理解 *Socioemotional Convergence*: 自己、他者、より広い世界を認識している/オープンである、思慮深く、実用主義、意思が固い、自立の必要性を認める一方で弱者を気遣うなど世界を白黒では捉えない（「不幸な人を救うためにもっと何かしなければならない」、「自分の責任を果たしていない人が多すぎる」など）(e.g., "We should do more to help those who are less fortunate." "Too many people don't meet their responsibilities.")

VI. 自己の理解 Self Access

9. **身体への共鳴** *Physical Resonance*: 身体的欲求/感情の受容、経験主義、人間性/進化の影響を評価する（「私は自由な精神の持ち主だ」、「私の体は私の感情に敏感だ」など）(e.g., "I am a free spirit." My body is very sensitive to what I feel.")

10. 感情の調整 *Emotional Attunement*: **感情に動かされやすい、傷つきやすい、社交的、愛情を求めている、親和的、愛情表現に価値を置く、家族関係が親密（「感情を表すのは気にならない」、「弱さは美徳でありうる」など）**(e.g., "I don't mind displays of emotion." "Weakness can be a virtue.")

11. 自己認識 *Self Awareness*: 内省的、自己の複雑性を受け入れる、人の経験/状態を気遣う、難しい思考/感情を許容する（「常に自分をよりよく理解しようと努めている」、「取り組むべき課題を抱えている」など）(e.g., "I am always trying to understand myself better." "I have problems that I need to work on.").

12. 意味の探求 *Meaning Quest*: 意味を模索する、人生にバランスを求める、耐性がある/根気強い、感受性が高い、弱者への思いやり（「人生の意味についてよく考える」、「人生のバランス感覚をもっとよくしたい」など）(e.g., "I think a lot about the meaning of life." "I want to find a better sense of balance in my life.").

VII. 他者の理解 Other Access

13. 宗教的伝統主義 *Religious Traditionalism*: **宗教心があつい**、自己/行動/出来事を神/霊的な力によるものと考える、「来世」を信じる（「宗教がなければ平和はないだろう」、「天国への道がある」など）(e.g., "Without religion there can be no peace." "There is one way to heaven.").

14. ジェンダー的伝統主義 *Gender Traditionalism*: 男性と女性はある型にはまるよう創られている、伝統的/単純なジェンダー観やジェンダーの役割を好む（「女性は男性より感情的だ」、「男性の役割とは、強くあることだ」など）(e.g., "Women are more emotional than men." "A man's role is to be strong.").

15. **社会文化的オープン性***Sociocultural Openness*: 文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的/オープンである（「自分とは異なる文化を理解しようと努めるべきだ」、「わが国では、貧富の差が大きい」など）(e.g., "We should try to understand cultures that are different from our own." "There is too big a gap between the rich and poor in our country.").

VIII. 世界の理解 Global Access

16. 生態との共鳴 *Ecological Resonance*: 環境/持続可能性の問題に深く関与している。地球/自然界の将来を懸念している（「環境が心配だ」、「所有者が誰であろうとも、この土地を守らなければならない」など）(e.g., "I worry about our environment." "We should protect the land no matter who owns it.").

17. 世界との共鳴 *Global Resonance*: さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶこと/出会うことを努力している。グローバル社会への関与を望んでいる（「世界の出来事についてよく知っておくことが大切だ」、「自分とは大きく異なる人々の集団といることが快適だ」）(e.g., "It is important to be well informed about world events." "I am comfortable around groups of people who are very different from me.").

IX. 経験に対する内省的な質問項目

BEVIは、「混合メソッド」的な測定方法で、量的なもの（尺度）と質的なもの（自由回答）の双方を問い（Coates, Hanson, Samuel, Ashe, & Cozen, 2016; Cozen, Hanson, Poston, Jones, & Tabit, 2016など）、これらに基づく分析を行っています。BEVIには次の３つの質的な経験に対する内省的な質問項目が含まれており、これらにはテストの最後に記述形式で答えてもらいます。

- 国際的な学習体験の、どのような出来事・側面があなたに最も影響を与えましたか？また、それはなぜですか？
- **この経験の結果、あなた自身の「自己」や「アイデンティティ」（例えば、ジェンダー、民族性、性的指向、宗教的背景、政治的背景など）が、明確になりましたか？**
- **国際経験や異文化交流体験の結果、あなたは何を学びましたか？また、あなたはどのように変わりましたか？**

BEVIデータの解釈には多種のレポートが**利用可能で**、研究者やtBEVI管理者はグループのテスト結果を様々な方法で分析することができます（グループ内の差異を含む）。もっとも単純なレポートの一例として、各尺度についてグループの事前（T1）と事後（T2）の中央値の集計例を以下に示します。

資料６　学習の進め方

Global & Regional Interprofessional Education Plus Program

Chiba University Graduate School of Nursing
GRIP Promotion Office

2023-2024 GRIP Study Guide

Table of Contents

1. Introduction to the GRIP program 1
2. ISL: Interprofessional Service Learning in GRIP program 1
3. Expected learning outcomes: Abilities and skills to be developed and expanded through ISL..... 1
4. ISL schedule for 2024 3
5. Learning Activities and Assignments: Timeline 4
6. Evaluation..... 5
7. Appendixes 6

1. Introduction to the GRIP program

GRIP is an abbreviation for Global & Regional Interprofessional Education Plus Program. The goal is to develop global human resources who can mainly contribute to promoting UHC: Universal Health Coverage under SDG3. Students from a variety of academic fields form teams and travel to partner universities outside their home countries to work on solving social problems related to local health. The GRIP Promotion Office of the Chiba University Graduate School of Nursing is leading in working with overseas partner universities (India, UK, and Australia).

2. ISL: Interprofessional Service Learning in GRIP program

ISL: Interprofessional Service Learning is the GRIP program's core learning activity and practical exercise.
Participating students will work as a team to join in local service activities at partner universities overseas and work to solve health-related social issues. It will consist of pre-learning (online), on-site exercise, and a post-learning online virtual workshop.

3. Expected learning outcomes: Abilities and skills to be developed and expanded through ISL

The ISL is designed to provide participating students with the opportunity to:

(1) develop/expand collaboration skills to solve problems as an interprofessional team by demonstrating their expertise, individuality, and strengths.
(2) develop/expand cultural competency and humility, and be able to find optimal solutions in real-world situations.
(3) develop/expand skills in addressing and solving health-related social issues as self-directed professionals depending on their grade level in their own and other countries.

1) Competencies for IPCP: Interprofessional Collaborative Practice

Outcome examples of six abilities aimed at the development and expanding on IPCP

(Framework for Action on Interprofessional Education& Collaborative Practice. P26, 2010, WHO)

1. Teamwork:
- being able to be both team leader and team member
- knowing the barriers to teamwork

2. Roles and responsibilities:
- understanding one's own roles, responsibilities and expertise, and those of other types of health workers

3. Communication:
- expressing one's opinions competently to colleagues
- listening to team members

4. Learning and critical reflection:
- reflecting critically on one's own relationship within a team
- transferring interprofessional learning to the work setting

5. Relationship with, and recognizing the needs of, the patient:
- working collaboratively in the best interests of the patient
- engaging with patients, their families, carers and communities as partners in care management

6. Ethical practice:
- understanding the stereotypical views of other health workers held by self and others
- acknowledging that each health workers views are equally valid and important

2) Cultural Competency and Cultural Humility

Cultural Competency and Cultural Humility strategy for practicing

Cultural Competency

a developmental process in which one achieves increasing levels of awareness, knowledge, and skills along a continuum, improving one's capacity to work and communicate effectively in cross-cultural situations.

- Learning about your own and others' cultural identities
- Combating bias and stereotypes
- Respecting others' beliefs, values, and communication preferences
- Adapting your services to each patient's unique needs
- Gaining new cultural experiences

Cultural Humility

a reflective process of understanding one's biases and privileges, managing power imbalances, and maintaining a stance that is open to others in relation to aspects of their cultural identity that are most important to them.

- Practicing self-reflection, including awareness of your beliefs, values, and implicit biases
- Recognizing what you don't know and being open to learning as much as you can
- Being open to other people's identities and empathizing with their life experiences
- Acknowledging that the patient(client) is their own best authority, not you
- Learning and growing from people whose beliefs, values, and worldviews differ from yours

3) Social problem-solving

level	Skills to be set as attainment goals	Intended target students
1	Able to analyze characteristics, issues, needs, etc. related to health from the perspective of specific regions, communities, and groups, and explain them using determinants of health and relevant SDGs.	**Undergraduate students (1st-3rd year)**
2	Able to explain the logical and scientifically based theoretical models, processes, and specific indicators of interventions related to issues and contributing factors that are the target of support and services, using cited theories and models.	**Undergraduate students (3rd-5th year), Master's students**
3	Able to critically evaluate existing support and services, propose ideas for improvement and resource introduction, and suggest new intervention methods.	**Undergraduate students (5th-6th year), Master's-PhD students.**

skills to aim at the development and expansion in solving social problems

Assessment of community, region → Clarifying the problems and factors → Consensus building in the community → Goal setting → Planning for evaluation of effectiveness → Planning of social policies and other measures

Since the knowledge and experience of participating students vary depending on their grade level, the attainment goals are set according to each grade level.

As for social issues, going beyond the attainment of goals set regardless of grade level is desirable.

4. ISL schedule for 2024

Students from diverse cultural and interdisciplinary backgrounds form teams and work together to solve local problems based on interprofessional collaboration.

1) Chiba University student

In India

All 10 participants visit the same facility/area and participate in activities. Regarding the presentation of learning results, after arriving in India, students will be divided into two teams of five people each, and each team will present one theme.

In the UK

Five students work as a team to visit facilities and areas on one theme, participate in activities, and present their learning results.

Participants	Program period	All students	Dispatch destination	Students per team	Learning theme	Visit destination
Chiba University student	14 - 21 Feb.2024	10	Symbiosis International (India)	5	Children in Difficult Circumstances	Children support facilities in slums, etc.
				5	Women in Difficult Circumstances	Support facilities for women suffering from domestic violence, etc.
	12 - 21 Feb.2024	5	University of Leicester (UK)	5	Homelessness Support Care	Support facilities for the homeless Clinic, etc.

2) SIU and UL students

In Japan

Participants will be 15 students from two universities. **They will be requested to declare their preference of learning theme by the end of January; Then two university-mixed teams will be formed based on students' interests and diversity.** Each team will be responsible for either of the learning themes, visit facilities and organizations related to each theme, and present their learning results.

Participants	Program period	All students	Dispatch destination	Students per team	Learning theme	Visit destination
Symbiosis International University	1-8 Mar. 2024	10	Chiba University (Japan)	5	Homelessness Support	NPO supporting the homeless Visiting nursing station
University of Leicester		5		5	Social capital	NPOs supporting children, mutual support groups for and by the elderly, etc.
				5	Disaster Preparedness	Walking at a huge mall DPAT at University Hospital Support facilities for physically and mentally handicapped people

5. Learning Activities and Assignments: Timeline

1) Preparation: How to log in to the learning platforms

Platform	Usage	Account	URL for login page
Google Classroom	(1) Pre-learning (2) Confirm the schedule and information about visiting organizations for ISL (3) Submit assignments (e.i., reports during ISL, presentation videos)	SIU & UL Students Individual accounts will be provided via the professor in charge of students' affiliation. CU students Chiba Univ. Google account	https://classroom.google.com/c/NjQ5OTY3OTQzNzQ1?cjc=fxobr4k SIU & CU students will be registered after the orientation on 12th January. LU students will be registered on 18th.
ovice (Metaverse)	24-hour online learning room	SIU Students CU students No specific account is needed. But a password is required. Please find the password on the GRIP Google Classroom.	https://78pt4dqpcy.ovice.in Available from 12 January
Google Space	Group chat Communication tool especially during ISL	Same as Google Classroom	Available from 12 January

*Please prepare for appropriate environment for online conferences including PC, web camera, microphone, headphones (earphones), and the Internet

2) Learning timeline

Date and Time	Assignment	Platform
Program Orientation		
12 January 2024, from 18:00 JST.	Program orientation	Zoom Synchronous Asynchronous
Pre-Learning		
From 12 January	Examples of lecture videos and reading materials - IPE/IPCP - Community-based integrated care system in Japan - Social Structure in Japan - Disaster Preparedness in Japan - Homelessness in Japan - Social Structure in India - Public Health in the United Kingdom - Homelessness in the United Kingdom and more…	Google Classroom OnDemand
By 29 January	Making and submitting the one-minute self-introduction video (mp4) - Name, affiliation, specialty, Which country to travel to, social issues and themes of interest	Google Classroom
Field Exercise		
-12 or 14 Feb. for CU students in India -4 Mar. for SIU & UL students in Japan	Fill out and submit an individual learning plan (Google Form) - Personal objective, self-evaluation regarding learning objectives See sheet (Appendix 1)	Google Classroom
Days of the visit to the field during the program	Fill out and submit daily activity records (Google Form) - Today's learning objectives, action plan, implementation details, evaluation of the achievement of objectives, and next tasks. (Appendix 2)	Google Classroom
-21 Feb. for CU students in India -8 Mar. for SIU&UL students in Japan	Fill out and submit a reflection of learning (Google Form) - Personal objective, self-evaluation regarding learning objectives (Appendix 3)	Google Classroom
	Presenting the team's learning outcome as a presentation - 20 minutes - Use the PowerPoint or Google slides for the final presentation of Community assessment items, issues, solutions, etc. (Appendix 4) - * Details are shown below 3)	In-person at the visiting university
	Making and submitting the final presentation video by team (by 11 March) - 20 minutes - brush up and revise the team's presentation	Google Classroom
Post-learning		
By 22 March	Watching videos of other teams' learning outcomes and submitting comments.	ovice Asynchronous OnDemand

3) Required contents of the final presentation during ISL (In-person)

(1). Team introduction (1 min)

Introduction of team members and each affiliation, specialty, school year, etc.

(2). Overview of the study schedule (1 min)

Learning theme, visited organizations, actual implementation content, etc.

(3). Case presentation (solving social issues) (10 min)

Focusing on a topic (e.g., disaster preparedness, etc.), the fields and activities will be presented, including the organization/facility of each field, social issues, service recipients, support or service activities, evaluation indicators, activities in which students have participated/implemented, good points and devised points, and country possibility of transfer to, and options (required), and possibility of improvement and new suggestions (optional).

(4). Team reflections (3 min)

Good practice, strength, and evaluation

(5). Each student's presentation of what they learned in this program (1 min/person, 5 min in total)

① Q&A (5 min)

② Commentary (5 min) - - A total of 30 minutes for a university (provisional) - -

*Presentations will be recorded and archived for viewing.

*As model cases for the next year, students participating in the next year will be allowed to watch the archives.

6. Evaluation

Each student's grade will be comprehensively decided based on attendance and contributions, records and reports, the evaluation of the final presentation, assignments, etc.

Evaluation criteria for the final presentation

Perspective	Level 1	Level 2	Level 3 (Required standard)	Level 4
Contents in the presentation				
Social problem-solving Evaluate according to Table 5.	Required contents are not presented	Level 1	Level 2	Level 3
Evaluation as a Team (IPCP) 1. teamwork 2.relationship 3. recognizing the needs of the patients or users 4.Ethical practices	Required contents are not presented	- Can act as both leader and member - Recognize obstacles to teamwork	- Collaborate according to the interests and needs of the targets - Collaborate as partners with stakeholders with needs	- Respect minority opinions in the team
Communication				
Speaking skills 1.attitude 2.wording 3.voice volume 4.speed	Not appropriate or difficult to listen overall	Not appropriate or difficult to listen in some parts	Appropriate and easy to listen	Excellent and drawn the listeners
Question-and-answer Understanding the meaning of the question, clear and evidence-based answer, and sincere attitude	Do not understand the intent of the question	Understand the intent of the question but the answer is out of line or ad hoc	Answer the question sincerely and in line with the intent of the question	Answer the question sincerely and persuasively presenting evidence

7. Appendixes

1) Appendix 1. Learning plan

Fill out the following two questions via Google Forms.

1. What do you expect to learn and acquire through the ISL?
   (Consider your goal in social problem-solving, interprofessional collaboration, team activities, and cultural competence and humility.)
2. How will you act on your goals?
   (List your ideal attitude and behaviors during field visits and team activities.)

2) Appendix 2. Daily activity records form

Students will be required to submit daily activity records via Google Forms every day during ISL.
The form will be available on Google Classroom before the first day of ISL.
Tentative items are the following: Today's learning objectives, action plan, implementation details, evaluation of the achievement of objectives, and next tasks.

3) Appendix 3. Reflection of ISL

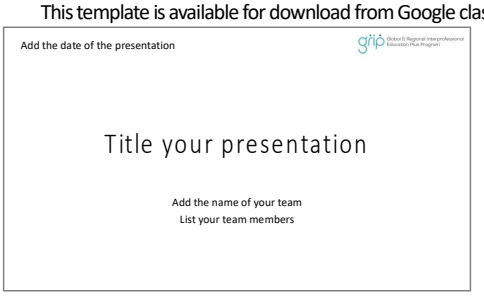
Fill out the following two questions and answer the self-evaluation survey via Google Forms.

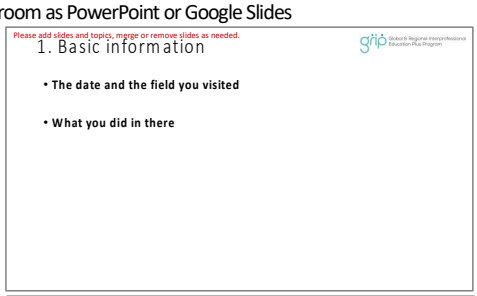
1. What did you do during ISL? How was your attitude and behaviors?
   (Please refer to the learning plan when considering.)
2. What have you learned through the GRIP program? And how will you utilize what you learned in the future?
   (Please consider what meaning it will bring to your career.)
3. Self-evaluation regarding the GRIP learning objective

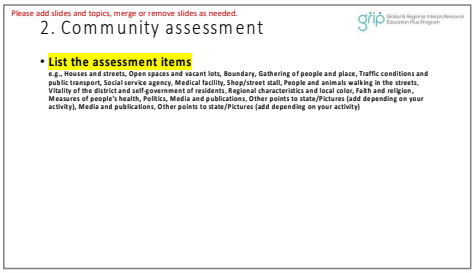
Areas and items
1. Demonstration of your own expertise 1: Could not do it, 2: Partially able to do it, 3: Able to do it, 4: Able to do it very well
2. Goal attainment of on-site practice * Goals vary by individual (Undergraduate: Level 1-2, Graduate Students and Experienced Professionals: Level 1-3) Level 1: Can analyze the characteristics, problems, and needs of a specific region, community, or group from a health perspective. Can explain health determinants and related SDGs. Level 2: Can logically and scientifically explain the problems and related factors, interventions, and specific indicators of effectiveness and processes of support or services, based on referenced theories or models. Level 3: Can critically evaluate existing support or services, identify areas for improvement or resource introduction, and propose new intervention ideas.
3. Professional collaboration 0: Not applicable, 1: Not improved, 2: Slightly improved, 3: Improved, 4: Greatly improved
- Contribution to problem-solving in a team of mixed specialties - Clarification of your roles and responsibilities - Communication and leadership - Learning with the team members - Building smooth relationships with users - Ethical practice
4. Cultural competency and humility 0: Not applicable, 1: Not improved, 2: Slightly improved, 3: Improved, 4: Greatly improved
Cultural Competency - Learning about your own and others' cultural identities - Combating bias and stereotypes - Respecting others' beliefs, values, and communication preferences - Adapting your services to each patient's unique needs - Gaining new cultural experiences
Cultural Humility - Practicing self-reflection, including awareness of your beliefs, values, and implicit biases - Recognizing what you don't know and being open to learning as much as you can - Being open to other people's identities and empathizing with their life experiences - Acknowledging that the patient/client is their own best authority, not you - Learning and growing from people whose beliefs, values, and worldviews differ from yours

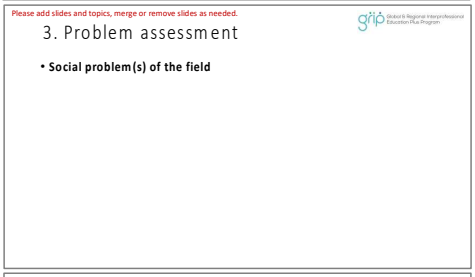
4) Appendix 4. Final presentation template

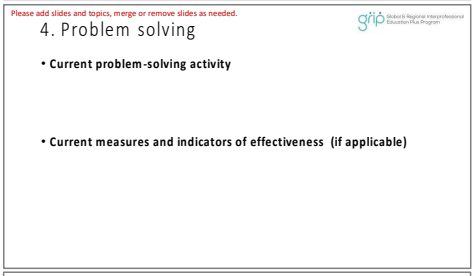
This template is available for download from Google classroom as PowerPoint or Google Slides

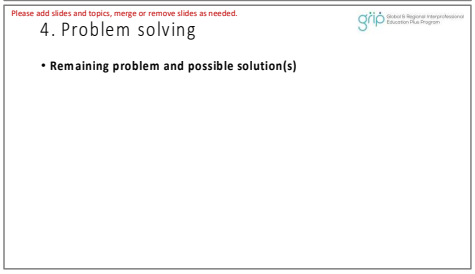


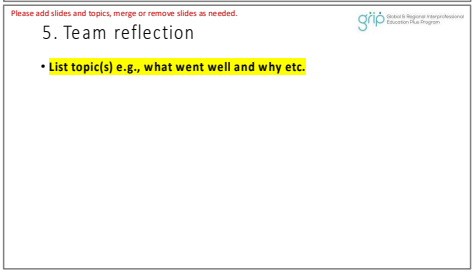


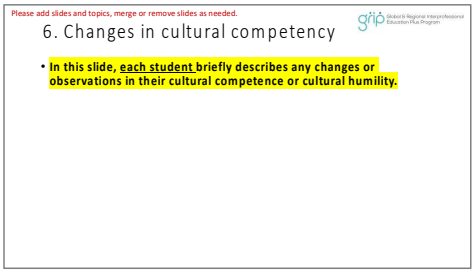


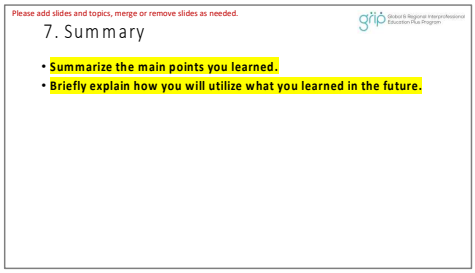












2023 年度 GRIP 実施・協力者一覧（敬称略）

GRIP 推進委員※「*」は GRIP 推進室員

看護学研究院：酒井郁子、井出成美、石橋みゆき、池崎澄江、*野崎章子、飯田貴映子、
カズノブダビッド、仲井あや、*天井響子、下井俊典、孫佳茹
医学研究院：伊藤彰一、山内かづ代、鋪野紀好、笠井大
薬学研究院：上原知也、関根祐子、石川雅之
医学部附属病院：朝比奈真由美
フロンティア医工学センター：平田慎之介
園芸学研究院：岩崎寛

受入プログラム

特定非営利活動法人山友会　油井　和徳、城北労働・福祉センター　志村昌孝、訪問看護ステーションコスモス　山下眞実子、鵜澤喜恵子
千葉大学医学部附属病院　菊田直美、新井加代子、森内 加奈恵、千葉 均
社会福祉法人　りべるたす　伊藤佳世子、NPO 団体法人　市川てらこや　松丸陽輔
NPO 法人　ちば地域再生リサーチ　陶守奈津子、一般社団法人　Neighborhood Care　吉江悟、東千葉地区　和・輪・環の会　村井早苗、セーフティネットリンケージ　塩澤卓巳
（株）エス・ジー・エス　肥田木孝、中路良恵、若尾美津穂
（株）JTB　千葉支店　山本重高、塩谷十方美

派遣プログラム

レスター大学　Liz Anderson、Dr Andy Ward、Steve Malcherczyk、Dr Bharathy Kumaravel Nicole Bergman
シンビオシス国際大学　SCIE　Bhakti Padhye、SCOPE Dr. Lelith Daniel
（株）エス・ジー・エス　Kshipra Potdar
（株）JTB　千葉支店　山本重高　塩谷十方美